何ノ縁ヲ以テノ故ニ是クノ如キ清浄ノ世界ヲ取ラズシテ五濁惡世ヲ遠離シ玉ハザリシヤ

○佛、寂意菩薩ニ告ゲ給ハク、善男子菩薩摩訶薩ハ本願力ヲ以テノ故ニ淨妙ノ國ヲ取リ、亦願ヲ以テノ故ニ不淨ノ土ヲ取ル、何ヲ以テノ故ゾ、善男子、菩薩摩訶薩ハ大悲ヲ成就スルガ故ニ斯ノ弊惡不淨ノ土ヲ取ル耳、是ノ故ニ吾レハ本願ヲ以テ此ノ不淨穢惡ノ世界ニ處シ、阿耨多羅三藐三菩提ヲ成ジキ

○善男子、汝今諦ニ聽キ善ク之ヲ思念シ善ク受ケ善ク持テヨ、吾レ今當ニ說クベシト」時ニ諸〳〵ノ菩薩敎ヲ受ケテ聽カントス」佛寂意菩薩ニ告ゲ玉ハク、善男子我レ往昔、恒河沙等ニ過グル阿僧祇劫ニ於テ、此ノ佛世界ヲ刪提嵐ト名ケタリ、是時ノ大劫ヲ名ケテ善持ト曰ヘリ、彼ノ劫中ニ於テ轉輪聖王アリ無諍念ト名ク、四天下ニ主タリ、一ノ大臣アリ名ヲ寶海ト曰ヘリ、是レ梵志種ニシテ善ク占相ヲ知リヌ、時ニ一子ヲ生ズ、三十二相アリテ其身ヲ瓔珞

此中の寶海梵志は釋尊の因地なり

リ、八十種好アリテ次第ニ莊嚴シ、百ノ福德ヲ以テ一相ヲ成就ス常光一尋、其身圓足シテ尼拘盧樹ノ如シ、一相ヲ諦觀スルニ厭足有ルコト無シ、其ノ生ル、時ニ當リテヤ百千ノ諸天有リ來リテ共ニ供養ス、因テ爲メニ字ヲ作リ號シテ寶藏ト曰ヘリ其後長大トナリ、鬚髮ヲ剃除シ、法服ヲ着シ出家シテ阿耨多羅三藐三菩提ヲ成ズ、還タ寶藏如來應供正徧知明行足、善逝世間解、無上士、調御丈夫、天人師佛世尊ト號ス、即チ法輪ヲ轉ジ、百千無量億那由他ノ諸〳〵ノ衆生ヲシテ等シク人天ニ生ジ、或ハ解脫ヲ得セ令ム

此中に寶海梵志とあるは即ち今の釋迦牟尼佛である、其子の寶藏が出家學道して最正覺を成就し、寶藏如來となりたれば、無諍念王、其如來に歸依し且つ王の千子も亦皆此の如來に歸依し弟子となつて未來作佛の淨土を願取したるに依り、寶藏如來は一々其の所願に任せて記別を與へられた其の次第が、右悲華經の第二卷より第六卷まで羅說せられてある、而して寶藏如來の父たる寶海梵志も亦大いに

發心し、無數千萬億の人を勸誘して、寶藏如來の說敎を聽かしめ、多く菩提の道に入れしめられた事など微細に記述せられてある然るに以上の諸菩薩が寶藏佛の尊前に於いて本願を立て、一々記別を授けられたのは喜ばしき事であるけれども、一千四人の菩薩が揃ひも揃うて住み易く度し易き佛土をのみ願取して、住み難く度し離き娑婆世界五濁惡世の衆生を厭ひ棄てられたのは其の意向に依るとはいへ深重の大悲が缺けてをると云はねばならぬ、故に吾れ此の寶海は諸菩薩の爲めに厭ひ嫌はれたる世を救ひ人を助けねばならぬといふの佛意が、諸菩薩本授記品第六卷の後半以下に記述せられてある、其の文句を少しく引證すれば左の通りである

爾時ニ佛、寂意菩薩ニ告ゲ玉ハク善男子、時ニ寶海梵志是ノ思惟ヲ作シヌ、我レ今已ニ無量無邊百千萬億那由他ノ衆生ヲ勤メテ阿耨多羅三藐三菩提ニ住セシム、我レ今是ノ諸大菩薩ヲ見ルニ、各各發願シテ淨キ佛土ノミヲ取リ、唯ダ一人ノ婆由毗紐ヲ除ク、此ノ賢劫中其餘ノ菩薩ハ亦五濁ヲ離ル

我レ今當ニ是ノ末世ノ中ニ於テ、眞ノ法味ヲ以テ諸ノ衆生ニ與ヘン我レ今當ニ自ラ堅牢ニ莊嚴シテ諸ノ善願ヲ作スコト獅子吼ノ如ク、悉ク一切ノ菩薩ヲシテ聞カ令メ已リ、心ニ疑怪ヲ生ジテ未曾有ナリト歎セシメ、復タ一切ノ大衆天龍鬼神乾闥婆、阿修羅迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽人非人ヲシテ、叉手シテ我ヲ恭敬シ供養セシメン、佛世尊ヲシテ我ヲ稱讚セシメ並ニ記莂ヲ授ケシメ、十方無量無邊、在在處處現在ノ諸佛ヲシテ諸ノ衆生ノ爲メニ正法ヲ講說セシメン、彼ノ諸ノ如來我ガ獅子吼ヲ聽カバ悉ク讚歎シテ我レニ阿耨多羅三藐三菩提ノ記ヲ授ケン、亦使ヲ遣ハシ來リ、諸ノ大衆ヲシテ悉ク之ヲ見ルコトヲ得セシメン

我レ今最後ニ大誓願ヲ發シ、菩薩ノ所有大悲ヲ成就シ、乃至阿耨多羅三藐三菩提ヲ成ジ已リ、若シ衆生有リテ我ガ大悲ノ名ヲ聞カバ悉ク希有ノ心ヲ生ゼ令メン、若シ後時ニ於テ諸ノ菩薩アリテ大

悲ヲ成就セバ、亦當ニ是クノ如キノ世界ヲ願取セシムベシ。是ノ世界ノ中ノ所有衆生ハ、法ニ饑虛シ、盲ニシテ慧眼無ク、四流（欲流有流見流無明流）ヲ具足ス、是ノ諸ノ菩薩當ニ救護ヲ作シ而シテ爲ニ說法スベシ、我レ乃至般涅槃シ已ラバ、十方無量無邊白千萬億ノ諸世界中、在在處處現在ノ諸佛、諸菩薩大衆ノ中ニ於テ我名ヲ稱讃シ、亦復我レノ善願ヲ宣說シ彼ノ菩薩ヲシテ大悲薰心ヲ以テ、皆專心ニ是事ヲ聽聞シ已リ、心大イニ驚キ怪ミ未曾有ナリト歎ゼン先ヅ所得ノ悲皆更ニ增廣ナルコト、我ガ所願ノ如クニシテ不淨土ヲ取ラシメン、是ノ諸ノ菩薩皆我ガ如ク不淨ノ世界ニ於テ阿耨多羅三藐三菩提ヲ成ジ、四流ノ衆生ヲシテ安止シテ三乘ノ中ニ住セ令メ乃至涅槃セシメント

○善男子爾時ニ寶海梵志、是クノ如キ大悲ノ願ヲ思惟シ已リ、右ノ肩ヲ袒ギ、佛ノ所ニ至ル、爾時ニ復タ無量百千萬億ノ諸天、虛空ノ中ニ在リテ天ノ伎樂ヲ作ス、種々ノ華ヲ雨ラシ各各同聲ニ讃歎シテ曰ク、善哉々々善大丈夫、今佛ノ所ニ至リ奇特ノ願ヲ發シ智水ヲ以テ世間衆生ノ煩惱ヲ滅セント欲ス」爾時一切ノ大衆合掌シ恭敬シテ梵志ノ前ニ在リ同聲ニ敬禮シ讃歎シテ言ク、善哉善哉尊大智慧我等今ハ大利益ヲ得タリ、能ク堅牢ナル諸善願ヲ作シ玉フ、我等今ハ尊意所發ノ善願ヲ聞カンコトヲ願フ、爾時梵志ハ佛前ニ在リテ右ノ膝ヲ地ニ著ク、爾時三千大千世界六種ニ震動シ、種々ノ伎樂ハ鼓セサルニ自カラ鳴ル、飛鳥走獸相和シテ聲ヲ作ス一切ノ諸樹、非時ニ華ヲ生ス、三千大千世界ノ中、因地ノ衆生、阿耨多羅三藐三菩提ニ於テ、若シハ已ニ發心シ、若シハ未タ發心セサルモノ唯ダ地獄餓鬼下劣ノ畜生ヲ除キ、其餘ノ衆生ハ皆悉ク大利益ヲ生ズ云々

お經の文句は前後の形容詞が長過ぎる爲め其の要領を得るに苦むことも往々之れあるが、此れは要するに、釋尊が昔し寶海梵志たりし時、五濁惡世の衆生を濟度せんとの大願大思惟を爲したまひし

經路因位の發願を語りたまふたので以下彌々五百大願を發せられんとするのである

第六十七節　五百大願宣誓の大意

誓願の多大なるは惡世に於ける衆生の度し難きが故である

爾時ニ梵志復タ佛ニ白シテ言ク、世尊我レ已ニ無量ノ億衆ヲ教化シテ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ發セシム、是ノ諸ノ衆生、已ニ各々淨妙世界ヲ願取シテ不淨土ヲ離ル、清淨ノ心種諸善根ヲ以テ、善ク衆生ヲ攝シテ之ヲ調伏ス、火鬘摩納等一千四人皆悉ク毘陀ノ外典ヲ讀誦シ已リ、是ノ諸人等ノ爲ニ其ノ記莂ヲ授ク、賢刼ノ中ニ於テ當ニ佛ヲ成爲スベシ

諸ノ衆生アリテ多ク貪婬瞋痴憍慢ヲ行フ、悉ク當ニ三乘ノ中ニ調伏スベシ、是ノ一千四佛ノ放捨スル所ノ者ハ、所謂衆生厚重ノ煩惱アリテ五濁惡世ニハ能ク五逆ヲ作シテ正法ヲ毀壞シ、聖人ヲ誹謗シ、邪見ヲ行ジ、聖ノ七財ヲ離レ

（註シテ云ク五逆トハ殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血、七聖財トハ信心、精進、戒律、慚愧、聞慧、捨施、定慧是レ也）

父母ニ孝セズ、諸ノ沙門婆羅門ノ所ニ於テ心ニ恭敬スル無シ、作ス應ラザルヲ作シ、作ス應キヲ作シテ福事ヲ行ゼズ、後世ヲ畏レズ、三福處ニ於テ心ニ欲行無シ

（註シテ云ク三福ノ說種々アレドモ○觀無量壽經ニ依レバ一、父母ニ孝養シ師長ニ奉事シ慈心ニシテ殺サズ、二、三歸ヲ受持シテ衆戒ヲ具足ス、三、菩提心ヲ發シ深ク因果ヲ信ジテ大乘ヲ讀誦ス）

天上人中ノ果報ヲ求メズ、勤メテ惡ヲ行ジ、三不善ニ趣キ、善知識ヲ離レテ親善ノ智慧ニ親近スルコトヲ知ラズ、三有ニ入リ、欲界色界無色界之レヲ三有ト云フ）獄中ニ生死シ、四流（欲流有流煩惱流無明流）ニ隨ヒ、灰河ニ沒在シ癡ノ爲ニ盲セラレ、諸ノ善

業ヲ離レテ專ラ惡業ヲ行ス、是クノ如キノ衆生ハ諸佛ノ世界ニ容レラレザル所ナリ、是故ニ擯來セラレテ此ノ世界ニ集マル、善業ヲ離ルルヲ以テ不善業ヲ行ジ、邪道重惡ノ罪ヲ行ズ、積デ大山ノ如シ

爾時娑婆世界賢劫ノ中ノ人ノ壽命千歲ナリ、是ノ一千四佛、大悲成セズ、是クノ如キ弊惡ノ世ヲ取ラズ、諸ノ衆生ヲシテ生死ニ流轉セシム、猶機關ノ救護有ルコト無キガ如シ、依止スル所無シ、舍無ク燈無ク、諸ノ苦惱ヲ受ケ而モ反ラ捨放ス、各願ツテ淨妙世界ヲ願取ス、淨土ノ衆生ハ己レ自カラ調ヘ其心淸淨ニシテ已ニ善根ヲ種エ、勤行精進シテ、已ニ無量ノ諸佛ヲ供養スルコトヲ得テ而モ更ニ攝取セラレ、世尊是ノ諸人等實ニ爾リトセンヤ否ヤ

爾時ニ世尊即チ梵志ニ告ケ玉ハク實ニ言フ所ノ如シ、善男子是ノ諸人等ハ其ノ憙ム所ノ如ク各種々ナル嚴淨世界ヲ取ル、我レ其意ニ隨ツテ已ニ與メニ記ヲ授ケタリ

爾時ニ梵志復タ佛ニ白シテ言ク、世尊我レ今心ノ動クコト緊花樹ノ葉ノ如ク、心大ニ憂愁シ、身皆憔悴ス、此ノ諸ノ菩薩ハ大悲ヲ生ズト雖モ此五濁惡世ヲ取ルコト能ハズ、今彼ノ諸ノ衆生癡ノ黑闇ニ墮ス、世尊乃至來世、一恒河沙等ノ阿僧祇劫ニ入リ、後分賢劫ノ中人壽千歲ナリ、我レ當ニ爾時ニ當ツテ菩薩道ヲ行ジ、久シク生死ニ在リテ諸苦ヲ忍受ス、諸菩薩三昧力ヲ以テノ故ニ要ズ當ニ是クノ如キノ衆生ヲ捨テザルベシ。まてを五百大願の第一「久住利益世尊乃至來世以下捨テザルベシ願」と爲す、以下順に五百誓願の文が羅列せられてあるけれども、第一、第二等の文字はない、願文の中途に

佛、寂意菩薩ニ告ゲ給ハク、善男子、爾時寶海梵志、寶藏佛ノ所諸天大衆人非人ノ前ニ在リテ、尋イデ大悲ノ心ヲ成就スルコトヲ得ルコト廣大無量ナリ、五百誓願を作シ已ツテ復タ佛ニ白シテ言ク云々

とあれども番號の文無き爲め五百の數は分明ならず、古來の人師が番號を附けしものは三百三十五願あるのみ、五百といふは大數を舉げたものか、經中の文を區別することが不分明なるが爲か、法藏比丘に於ける四十八願の如く明了ならず

之を要するに寶海梵志たりし釋尊の大願は一千四菩薩の見捨てられし此の娑婆五濁の衆生を濟度する爲め、特に廣大無量の大願を發起したまひしことを領略すれば夫れにて足る可きである、今は昔願の如く人壽百歳前後の亂漫たる五濁惡世に出現し、度す可き者は皆已に度し、未だ度せざる者の爲めには已に得度の因緣を成就せられし廣大無量の佛恩を知悉しなければならぬ

第六十八節　大通智勝の十六王子

○以上は悲華經に於ける釋尊の本願であるが、次に○法華經化城喩品の說を見るに昔し大通智勝佛が在しました、其佛の未だ出家したまはざりし時、十六人の王子が在らせられた、大王出家成道の後、十六王子も皆菩提心を發して出家修行せられ、各自皆成佛して淨土を願取せられたが、第十六人目は即ち我れ釋迦牟尼佛であるとの御說法である、今は此に其の結文とも云ふべき所を示さう

諸〳〵ノ比丘、我レ今汝ニ語ル、彼ノ佛ノ弟子ノ十六ノ沙彌、今皆阿耨多羅三藐三菩提ヲ得、十方ノ國土ニ於テ現在ニ法ヲ說キ給フ、無量百千萬億ノ菩薩聲聞アリ以テ眷屬ト爲セリ、其二リノ沙彌、東方ニテ作佛セリ、一ヲバ阿閦ト名ク、歡喜國ニ在マス、二ヲバ須彌頂ト名ク、東南方ニ二佛アリ、一ヲバ獅子音ト名ケ、二ヲバ獅子相ト名ク、南方ニ二佛アリ、一ヲバ虛空住ト名ケ二ヲバ常滅ト名ク、西南方ニ二佛アリ、一ヲバ帝相ト名ケ、二ヲバ梵相ト名ク、西方ニ二佛アリ一ヲバ阿彌陀ト名ケ二ヲバ度一切世間苦惱ト名ク、西北方ニ二佛アリ一ヲバ多摩羅跋栴檀香神通ト名ケ、二ヲバ須彌相ト名ク、北方ニ二佛アリ一ヲバ雲自在ト名ケ二ヲバ雲自

在王ト名ク、東北方ノ佛ヲバ壞一切世間怖畏ト名ク、第十六ハ我レ釋迦牟尼佛ナリ、娑婆國土ニ於テ阿耨多羅三藐三菩提ヲ成セリ」ト云々

此の大通智勝といひ、十六王子といふもの、固より人界の歴史として見ることは出來ぬけれども、兎に角此中釋尊一佛のみは人界の歴史を以て慥に其の存在を認識することが出來るのであるから、他佛の存在も假定することが出來ぬ限りてもない、されど單に東南西方とのみあるのては漠然たるものにて、疑ひ深き我等は容易に之を確信することは出來ぬ、されど已に釋尊金口の所說なりとして、彼此の疑問を起さず如說に仰信するのが佛弟子の本分かも知れぬ、假令他の十五佛は釋尊方便の假設なるにもせよ、釋尊のみは現在の事佛にして我が娑婆國土の敎主である、此の娑婆國土は現量の世界なるが故に確信することが出來ると云へば云ふものゝ其の現量は且く五大洲中のみてある、其他の三千大千世界なるものは容易に信知することが出來ぬやうなものなれども、比量の論法を以てすれば其の實在なることを認識せられぬ限りてもない、況して無限の空間に無邊の世界あることを否定することは出來ぬ、故に釋尊の說きたまひし東南西方の國土もあるてあらう在るとして他の諸佛は他の淨妙國土に於いて成佛せられ、此の娑婆世界五濁の惡世に成佛して衆生を敎化せらるゝことを厭はれしもの、設ひ其の諸佛に十方世界念佛衆生攝取不捨の誓願があるにもせよ、其は且く本願の形容詞にして、娑婆界の衆生までを攝取したまふ大悲とも思はれぬ、故に我等娑婆界の衆生は敢て他土に於ける十方の佛如來に歸依せずとも娑婆の敎主たる釋尊一佛に歸依し奉れば其れて充分てある、釋尊に何の不足する所があつて殊更他佛に歸依することを敎へたのてあらうか、釋尊は劣應身にして尊貴ならざるが故に他の報身智佛に歸依すべきものぞと考へたる結果てあらうか。是れ一を知つて二三を知らざるの愚論てある

第六十九節　本願成就

○法華經の如來壽量品に依れば、過去久遠の昔、已に正覺を成就したまへる報身佛に在しませり、又○觀普賢經に依れば釋迦牟尼佛を法身毘盧遮那と說いてある、是れ明かに應身の釋迦牟尼佛が、直に法報の二身を兼具せられたる尊貴最勝の獨尊たることを證明せらるゝのである、是くの如く獨尊にして此の娑婆界に出現在しませしも皆是れ過去久遠の昔し、寶海梵志たりし時の本願力に乘じたまへる大慈悲心なることを知らねばならぬ、故に○法華經の方便品に云く

舍利弗當ニ知ルベシ。我レ本ト誓願ヲ立テテ。一切ノ衆ヲシテ。我ガ如ク等ウシテ異ナルコト無カラ令メント欲シキ。我ガ昔ノ所願ノ如キハ。今ハ已ニ滿足シヌ。一切衆生ヲ化シテ皆佛道ニ入ラ令ムレバナリ。

謂ゆる昔の所願とは、寶藏佛の所に於ける寶海梵志の五百誓願、大通智勝佛の所に於ける娑婆願取の如きものを指されたのである

▲問ふ『釋尊の誓願たるや一切衆生をして我が如く等うして異なること無からしむ、其の昔願たる今は已に滿足す云々との事なれども、未だ曾て一人だも釋尊の如く萬德圓滿の佛陀となつたものは無いやうに思はれます、況や此の娑婆界の衆生未だ佛を信ぜざるもの甚だ多し、夫れても滿足が出來るものでありませうか

◉答ふ」釋尊は涅槃の夕に至り左の如く仰せられた（佛遺敎經）

自利利人ノ法ハ皆具足セリ、若シ我レ久シク住スルトモ更ニ所益無ケン、應ニ度スベキ者、若ハ天上人間、皆悉ク已ニ度ス、其ノ未タ度セサル者ハ、皆亦已ニ得度ノ因緣ヲ爲ス」ト云々

又云ク、常ニ當ニ自カラ勉メ精進シテ之ヲ修スベシ、爲スコト無ウシテ空シク死セバ後ニ悔有ルコトヲ致サン、我レハ良醫ノ病ヲ知テ藥ヲ說クガ如シ、服スト服セザルトハ醫ノ咎ニ非ズ、又善ク導クモノ、人ニ善道ヲ導クガ如シ、之ヲ聞テ行カサルハ導クモノ

ゝ過ニ非ルナリ」ト云々

生界不盡は佛陀三不能の一である、如何に智德圓滿なる如來の出現があればとて、根機未熟のもの、罪業深重のものは如何ともすることが出來ぬ、されど已に得度の因緣も備はりをるが故に、今までは救ひの網に洩れたりと雖も、因緣純熟すれば、遺法の中に於いて何時しか佛緣に逢ふこともあらう、その又佛の如く一時に智德圓滿せずとも、已に未來成佛の方法を敎へ且つ貽したまへるがゆゑ、夫れに依つて修行さへすれば、必ず成佛疑ひ無きに依り、如來は已に滿足せられ、佛弟子も信心決定せしものは滿足するのである、故に一切衆生を化して皆佛道に入ら令むればなり」と仰せられたのである左はあれど無緣のものは如何ともすることが出來ぬ、ソコで○法華經方便品の次の佛言に左の如く申してある

若シ我レ衆生ニ遇ハバ。　盡ク敎フルニ佛道ヲ以テス。　無智ノ者ハ錯亂シ。　迷惑シテ敎ヲ受ケズ。　我レ知ヌ此ノ衆生ハ。

○無性闡提

無性は無佛性の略闡提は梵語にて極惡といふこと、佛性の明かに現はれたのが極善隱れた者の行爲が即ち極惡となる

未ダ曾テ善本ヲ修セズ。　堅ク五欲ニ著シテ。　痴愛ノ故ニ惱ミヲ生ズ。　諸欲ノ因緣ヲ以テ。　三惡道ニ墜墮シ。　六道ノ中ニ輪廻シテ。　備サニ諸ノ苦毒ヲ受ク。　受胎ノ微形。　世世ニ常ニ增長ス。　德薄ク福少ナキ人ハ。　衆苦ニ逼迫セラレ。　邪見ノ稠林。　若ハ有若ハ無等ニ入リ。　此ノ諸見ニ依止シテ。　六十二ヲ具足ス。　深ク虛妄ノ法ニ著シテ。　堅ク受ケテ捨ツ可カラズ。　我慢ニシテ自カラ矜高シ。　諂曲ニシテ心實ナラズ。　千萬億刼ニ於テモ。　佛ノ名字ヲ聞カズ。　亦正法ヲモ聞カズ。

是クノ如キ人ハ度シ難シ」云々

○涅槃經の中にも此の娑婆界には可治の衆生と不可治の衆生とがある、可治の衆生とは宿善有るもの、不可治の衆生とは宿善無きものである、之を無性闡提ともいふ、此中五欲に堅著するとあるは煩惱濁のこと、六趣に輪廻するは衆生濁、受胎微形增長衆苦とあるは命濁、邪見の稠林に入り有無斷常の二見に墮し、我慢にして其心の諂

曲なるは見濁、六十二は斷常の二見を開すると其の數になる、其本は一の我見である、百千萬億劫を經るとも正法を聞かざるは劫濁である、今も昔も人情は同じものにて、如何に文明であるの開化であるのと申したからとて、此の五濁に於いては依然として改まらぬ、殊に倍々人智が進めば進むほど此の五濁が巧みに增長するので、之を解脫するものは殆ど皆無の有樣である、昔は多く證果の人もあつた樣子なれど。今は行解相應の人だに得難いのである

但宿植善根の人のみがあつて如來の正法を見聞し深く信敬するのである、我れ常に此の世間を見渡すに未だ曾て善本を修めたことのなき人が九分九厘であるから、堅く五欲に執著して貪愛癡慢の爲めに惱みを生じ、此貴重なる人身を持ちながら、哀れにも地獄餓鬼畜生の三惡道に墮在し又は日々夜々六趣の巷に彷徨て種々無量の苦毒を受けつゝある、如何にして此衆生を濟うたものであらうか、如何にして如來の本願海に誘引したものであらうかを思念するのである

●六十二見

この六十二見は斷常の二見より起る之れに四何がある、一、色大我小、二、我大色小、三、離色是我、四、即色是我、之を色受想行識の五蘊に配當すれば四五の二十と成る、この二十を刹那の三世に約すれば二三が六と成る之れに根本の斷常を加ふれば六十二見と成る、又この斷常は一の我心より起る、この我心は迷ひである

第二十二章　釋尊主師親の三德

第七十節　日蓮大士の卓說

▲問ふ　釋尊が昔の本願力に乘じて此五濁惡世に出現し、一切衆生の大導師と成らせたまひしことは大略了解致しましたが、尙この釋尊に主師親の三德を備へさせたまふといふことは如何なる事柄でありますか。

◉答ふ　多くの佛名を聞く中にも主師親の三德を備へさせたまふは只釋尊ばかりである、日蓮大士云く

釋迦佛ハ我等ガ爲ニハ主也師也親也、一人シテスクヒ護ルト說キ給ヘリ、阿彌陀佛ハ我等ガ爲ニハ主ナラズ親ナラズ師ナラズ、然レバ○天台大師是ヲ釋シテ曰ク、西方ハ佛別ニシテ緣異ナリ、佛別ナルガ故ニ隱顯ノ義成ゼズ、緣異ナルガ故ニ父子ノ義成ゼズ、

眞經とは法華經なり

又此經ノ首末ニ全ク此旨無シ、眼ヲ閉ヂテ穿鑿セヨト實ナルカナ

釋迦佛ハ中天竺ノ淨飯大王ノ太子トシテ、十九ノ御年、家ヲ出テ給ウテ檀特山ト申ス山ニ籠ラセ給ヒ、高峯ニ登テハ妻木ヲトリ、深谷ニ下リテハ水ヲ結ビ、難行苦行シテ、御年三十ト申セシニ佛ニナラセ給ウテ一代聖教ヲ説キ給ヒシニ、上ニハ華嚴阿含方等般若等ノ種種ノ經經ヲ説セ給ヘドモ、內心ニハ法華經ヲ説カバヤトオボシメサレシカドモ、衆生ノ機根マチマチニシテ一種ナラザル間、佛ノ御心ヲバ説キ給ハデ、人ノ心ニ隨ヒ、萬ノ經ヲ説キ給ヘリ、此ノ如ク四十二年ガ程ハ心苦シク思食シカドモ、今法華經ニ至テ我願既ニ滿足シヌ、我ガ如クニ衆生ヲ佛ニナサント説キ給ヘリ、久遠ヨリ已來或ハ鹿トナリ、或ハ熊トナリ、或時ハ鬼神ノ爲ニ食ハレ給ヘリ、此ノ如キ功德ヲバ法華經ヲ信ジタラン衆生ハ是レ眞佛子トテ、是レ實ノ我子ナリ、此功德ヲ此人ニ與ヘント説キ給ヘリ是レ程ニ思食シタル親ノ釋迦佛ヲバ、ナイガシロニ思ヒナシテ唯以一大事ト説キ給ヘル法華經ヲ信ゼザラン人ハ、爭カ佛ニナルベキヤ。

以上の文句は法華宗といへる宗旨の立場より立論せられたので、宗癖の嫌ひなきにあらざるも、釋尊は阿彌陀其他の諸佛と異なりて正しく主師親の三德を具備したまふ印證とするに足る可き文なりと思ふ、更に又日蓮大士の著なる『今此三界合文』の中を見るに○法華經譬喩品の文證を引いて之を證せられてある。

○主＝今此三界皆是我有
○師＝唯我一人能爲救護
○親＝其中衆生悉是吾子

又是れを三身に配當して云く

今此三界皆是我有＝國主也報身也
其中衆生悉是吾子＝親父也法身也

（唯我一人能爲救護）導師也應身也

此の義に付○涅槃經を引證して云く

今日如來應供正徧知、衆生ヲ憐愍シ衆生ヲ覆護シ、等シク衆生ヲ視ルコト羅睺羅ノ如ク、爲メニ歸依ノ屋舍室宅ト作ル云々

○涅槃ノ疏一ニ云ク、但タ三號ヲ歎ズルコトハ三事ヲ明サント欲ス、初ニ如來ヲ歎ズ、允ニ諸佛ニ同ジテ其尊號ヲ生ズ、是ヲ世ノ父ト爲ス、應供トハ是レ上福田ニシテ能ク善業ヲ生ズ、是ヲ世ノ主ト爲ス正徧知トハ能ク疑滯ヲ破シ其智解ヲ生ス、是ヲ世ノ師ト爲ス、故ニ下ノ文ニ云ク、我等今ヨリ主無ク親無ク宗仰スル所無シト云々

○我等今ヨリ救護有ルコト無ク、宗仰スル所無ク貧窮孤露ナリ、一旦無上世尊ニ遠離シ上ラバ、設ヒ疑惑有リトモ當ニ復タ誰ニカ問フベキト○又云ク無救無護無所宗仰トハ此レハ無主ノ苦ヲ示ス

貧窮孤露一旦遠離無上世尊トハ無親ノ苦ヲ釋ス、設有疑惑當復問誰トハ無師ノ苦ヲ釋ス

○經ノ第二ニ云ク、我等今ヨリ主無ク親無ク救無ク護無ク歸無ク趣無クシテ貧窮飢困ナリト

○涅槃ノ疏第二ニ云ク、無主ハ是レ佛ヲ失ヒ、無親ハ是レ法ヲ失ヒ無救ハ是レ僧ヲ失フ、若シ主無ケレバ忠、護スル所無ク、若シ親無ケレバ孝、歸スル所無ク、若シ師無ケレバ學趣ク所無カラン既ニ主ノ爲メニ護ラレズ、又主トシテ護ル可キ無キハ卽チ榮無ク祿無キナリ、是故ニ貧ト言フ、既ニ親トシテ歸ス可キ無ク、又親去リテ歸セザレバ、卽チ生無ク陰無キナリ是故ニ窮ト言フ、既ニ師トシテ趣ク可キ無ク、又師トシテ趣ヲ示サザレバ、卽チ訓無ク成無シ、是故ニ困ト言フト

又云ク主無ク親無ケレバ家ヲ亡シ國ヲ亡スト、又云ク一體ノ佛ヲ主師親ト作スト、又云ク世尊ヲ擧ゲテ主ト爲スコトヲ許シ、種智

ヲ擧ゲテ師ト爲スコトヲ許シ、調御ヲ擧ゲテ親ト爲スコトヲ許ス既ニ主ト爲スコトヲ許セバ、卽チ其貧ヲ斷ジ、既ニ親ト爲スコトヲ許セバ卽チ其窮ヲ除キ、既ニ師ト爲スコトヲ許セバ卽チ其困ヲ除クト

是等は正しく三德を具したまへる明證である○法華經如來壽量品偈に云く「我モ亦世ノ父爲リ諸ノ苦患ヲ救フ者ナリ」ト又○譬喩品ニ云ク「舍利弗ニ告ゲ玉ハク我モ亦是クノ如シ衆聖ノ中ノ尊ニシテ世間ノ父ナリ」と又云く「一切衆生皆是吾子と」是等の文句より考ふれば我等衆生は釋尊の子にして釋尊は卽ち親にて在しますのである、子といふは因の義にして、親といふは果の義である。

日蓮大士は此の三德を證明し更に論じて云く

經ニ云ク唯ダ我レ一人ノミ能ク救護ヲ爲スト」何ゾ二人救護スト云ハザル乎、二人ナレバ必ズ成辨ス二人同心ノ利、金ヲ斷ツ、鳥ノ二羽車ノ兩輪、日月、父母、福智、止觀、日兩、兩目、佛弟子ノ二人阿闍世ノ月光耆婆、妙莊嚴王ノ二子二法更互ニ相依ル轉次ニ左右ノ佛、二人與力シテ救ハザラン乎、然リト雖モ釋尊ハ敵對無キナリ、十方三世諸佛ノ神通利生慈悲濟度ヲ合シテ對論ストモ釋迦一佛ニ及ブ可ラズ、例セバ等荷擔ノ如キ、諸蓋ノ中、無明中ニ於テ荷フ所偏ニ重シト云フガ如クナルベシ云々

○寶積經十五ニ云ク、生死險難ノ惡道ニ往來シ、愚痴無智ニシテ常ニ盲ニシテ目無シ、誰カ能ク指導シ誰カ行ク救護セン、唯ダ我レ一人ノミ應ニ示スベク應ニ救フベシト云々

○涅槃經三十五卷迦葉菩薩品ニ云ク、我レ處々ノ經中ニ於テ說テ云ク、一人出世スレバ多人利益ス、一國土ノ中ニ二人ノ轉輪王アリ、一世界ノ中ニ一佛出世スト云フハ是ノ處リ有ルコト無ケント爲ス、是中更ニ餘佛無シ、實ニ一人ノ釋迦牟尼佛ノミナリト

○大論ノ九ニ云ク、十方恒河沙ノ三千大千世界ヲ名ケテ一佛國土ト爲ス、是中更ニ餘佛無シ、實ニ一人ノ釋迦牟尼佛ノミナリト

○籤ノ七ニ云ク、十方ニ各釋迦ノ淨土有リト

○大集經ニ云ク、一切衆生ノ受クル所ノ苦ハ皆是レ如來一人ノ苦ナリト

○涅槃經ニ云ク、一切衆生ノ異苦ヲ受クルハ悉ク是レ如來一人ノ苦ナリト

○大論三十八ニ云ク、佛國トハ恒河沙等ノ如キ、諸〳〵ノ三千大千世界是ヲ一佛土ト名ク、諸佛ノ神力能ク普遍自在ニシテ礙リ無シト雖モ衆生度スル者局リ有リト云々

○法華化城喩品ニ云ク、第十六ハ我レ釋迦牟尼佛ナリ、娑婆國土ニ於テ阿耨多羅三藐三菩提ヲ成ズト

○又壽量品ニ云ク、我レ常ニ此ノ娑婆世界ニ在リテ說法敎化スト

○又提婆品ニ云ク、我レ(智積菩薩釋迦如來ヲ見上ルニ無量劫ニ於テ難行苦行シ、積功累德シテ未ダ曾テ止息シ玉ハズ、三千大千世界ヲ觀ルニ、乃至芥子許リノ如キモ、此ノ菩薩ノ身命ヲ捨テ玉フ處ニ非ルコト有ルコト無シ

○齋法功德經ニ云ク、復タ佛ノ言ハク尸毘王ノ爲ニ鳩ニ代リテ鷹ニ身ヲ施シ、是クノ如ク無量劫ニ於テ難行苦行シ、積功累德シテ佛道ヲ求メ、未ダ曾テ止息セズ、三千大千世界ヲ觀ルニ乃至芥子許リノ如キモ我ガ身命ヲ捨テシ處ニ非サルコト有ルコト無シ、此レ衆生ノ爲ノ故ナリ、然シテ後ニ乃チ菩提ノ道ヲ成ズルコトヲ得テ釋迦牟尼如來ト名ク

○懷中ニ云ク、法華二十八品ニ付テ前ノ十四品ハ足レ迹、後ノ十四品ハ是レ本ナリ、前ノ十四品ノ中ニハ但タ釋迦如來、釋氏ノ宮ヲ出テ、迦耶城ヲ去リテ始メテ正覺ヲ成ズルコトヲ明ス、四十餘年諸ノ衆生ノ爲ニ三乘ノ法ヲ說ク、人天修羅ハ皆釋迦如來、淨飯宮ニ於テ始テ菩提ヲ得タマヘリト謂ヘリ、又云ク、後ノ十四品ハ正シク如來久遠ノ成道ヲ明シ、地涌ノ菩薩涌出シ、先ヅ久成ノ相ヲ顯ハシ、壽量品ニ正シク久遠ノ成道ヲ說キ玉フ（中略）

○觀普賢經ニ云ク、釋迦牟尼佛ヲ毘盧遮那遍一切處ト名ケ、其佛

ノ住處ヲ常寂光ト名ク云々

以上の合文に依て大恩教主の釋迦牟尼世尊は一身にして法報應の三身を具足し、一人にして主師親の三德を圓滿せられてあることをも知らずして、此土に因緣薄き他土の佛を信じ他土に往生せしめんとするが如きは何の心であらうぞ、而も釋尊をば劣應身の小さき佛とのみ見て、此一佛が直に遍一切處の大なる佛體に在しますことを知らぬ者もある、斯かる有難き親しき御佛を輕蔑して是れよりも大なる佛の在しますと思ふは佛法の通局に達せぬ愚かと云はねばならぬ日蓮大士は是くの如く釋迦一佛論を主張しながら、何故に之を本尊とし稱名とせられなかつたのであらうか、夫れには別に理由があるけれども、所說の法を本とし、能說の佛を末とせられたのは、吾人の服膺することが出來ぬのである。

○禪宗は本來釋迦宗にして釋迦本尊と極りをるがゆゑ、之を云々するは雪上加霜頭上安頭と思ひて强て喧囂の說は無けれども、尙ほ道元禪師は云く「十方諸佛を見上る可くんば釋迦一佛を見上る可し」と又云く「願生此娑婆國土し來れり、見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや」と又云く「諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ卽心是佛なり、過去現在未來の諸佛共に佛と成る時は必す釋迦牟尼佛と成るなり、是れ卽心是佛なり」と是くの如く釋迦本尊なれども、卽心是佛の自力に重きを置いて主師親の他力に重きを置かざるがゆゑ、觀音を以て本尊とするも、彌陀藥師を以て本尊とするも敢て之を怪まざるに至つたのである。

然るに日蓮大士の如きは、眞言淨土が彌陀大日を以て大佛とし、釋尊を小佛として幾分か輕賤の思ひを爲すの氣味あるがゆゑ、法華經を楯にして頻りに釋尊大佛の說を主張せられたのである、吾等は敢て法華經一部を楯として釋尊を見るのではなく、一切經能說の本師本佛として廣い意味に於いて釋尊を卓上するのであるけれども、釋尊を娑婆の敎主とし法王として信仰の主體とする點に至りては日蓮

大士の主張も大いに參考としなければならぬ、卽ち○善無畏三藏鈔の中を見るに云く

我師釋迦如來は一代聖敎乃至八萬法藏の說者也、此娑婆無佛の世の最先に出させ給ひて、一切衆生の眼目を開き給ふ御佛なり、東西十方の諸佛菩薩も皆此佛の敎へなるべし(乃至)此釋迦如來は三の故ましまして、他佛にかはらせ給ひて娑婆世界の一切衆生の有緣の佛となり給ふ、○一には此娑婆世界の一切衆生の世尊にておはします、阿彌陀佛は此國の大王にはあらず釋迦佛は譬へば我國の主上の如し先づ此國の大王を敬うて後に他國の王をば敬ふべし、天照太神正八幡宮等は我國の本主也、迹化の後神と顯はれさせ給ふ、此神にそむく人は此國の主となるべからず、されば天照太神をば鏡にうつし奉りて內侍所と號す、八幡大菩薩に勅使有て物申しあはさせ給ひき、大覺世尊は我等が尊主也、先づ御本尊と定むべし。

○二には釋迦如來は娑婆世界の一切衆生の父母也、先づ我が父母に孝し、後に他人の父母には及ぼすべし、例せば周の武王は父の形を木像に造りて、車にのせて戰の大將と定め、天感を蒙り殷の紂王をうつ、舜王は父の眼の盲ひたるをなげきて涙をながし、手をもてのごひしかば、本の如く眼あきにけり此佛も亦是くの如く我等衆生の眼をば開佛知見とお開き給ひしが、いまだ他佛は開き給はず。

○三には此佛は娑婆世界の一切衆生の本師なり、此佛は賢劫第九人壽百歲の時、中天竺淨飯大王の御子十九にして出家し、三十にして成道し、五十餘年が間、一代聖敎を說き、八十にして御入滅舍利を留めて一切衆生を正像末に救ひ給ふ、阿彌陀如來、藥師佛大日等は他土の佛にして、此世界の世尊にてはましまさず、此娑婆世界は十方世界の中の最下の處、譬へば此國土の中の獄門の如し、十方世界の中の十惡五逆誹謗正法の重罪逆罪の者を、諸佛如

來擯出し給ひしを釋迦如來此土にあつめ給ふ、三惡並に無間大城に墮ち、其苦をつぐのひて人中天上には生れたれども、其罪の餘殘ありて、ややもすれば正法を謗り、智者を罵り罪つくり易し、例せば身子は阿羅漢なれども瞋恚のけしきあり、畢陵は見思を斷せしかども餘殘あり、何に況や凡夫においてをや、されば釋迦如來の御名をば能忍と名けて此土に入り給ふに、一切衆生の誹謗を咎めず、よく忍び給ふ故也、此等の秘術は他佛の缺け給へるところ也、阿彌陀佛等の諸佛世尊、悲願をおこさせ給ひて心に耻をおぼしめして、還て此界にかよひ四十八願、十二大願なんどは起させ給ふなるべし、觀世音等の他土の菩薩も亦復是くの如し。

佛には常平等の時は、一切諸佛は差別なけれども、常差別の時は各々に十方世界に土をしめて有緣無緣を分ち給ふ、大通智勝佛の十六王子、十方に土をしめて一一に我が弟子を救ひ給ふ、其中に釋迦如來は此土に當り給ふ、我等衆生も亦生を娑婆世界に受けぬいかにも釋迦如來の敎化をば離るべからず、然りと雖も人皆是れを知らず委しく尋ねあきらめば、唯我一人能爲救護と申して釋迦如來の御手を離るべからず、然れば此土の一切衆生、生死を厭ひ御本尊を崇めんとおぼしめさば、必ず先づ釋尊を木畫の像に顯はし、御本尊と定めさせ給うて、其後力おはしまさば彌陀等の他佛にも及ぶべし。

○我等が父母世尊は主師親の三德を備へて一切の佛に擯出せられたる我等を、唯我一人能爲救護とはげませ給ふ、其恩大海よりも深し、其恩虛空よりも廣し云々

主○師○親○の三德は概ね是くの如きものである、是くの知く尊い(主)有難い(師)戀しい(親)釋尊を本尊とせず、信仰の主體とせず、娑婆卽寂光淨土の正中に居ながら、徒らに他土薄緣の佛に歸依し、此世界を離れて他土の往生を願ふが如きは、設令釋尊の方便なるにもせよ、そは帶權の假設にして一乘實敎の眞說とは申されぬ、故に余は飽くまで

了義眞實の教旨に從ひ、唯我一人能爲救護の御本懷を弘めたいと思ふ、斯樣に思うて見ると汝諸人等は皆是レ吾子ナリ、我ハ卽チ是レ父ナリ、汝等累劫ニ衆苦ニ燒カル、我皆拔濟シテ三界ヲ出テ令ム、我ハ法王爲リ、法ニ於テ自在ナリ、衆生ヲ安穩ナラシメンガ故ニ世ニ現ズ、汝舍利弗、我此ノ法印ハ、世間ヲ利益セント欲スルガ爲ノ故ニ說ク」との金言を見れば見る程有難く、聞けば聞く程懷かしく、慈悲の程が身に染みて感泣禮拜せずには居られぬ、如何に諸佛の慈悲心が廣大なれば とて、釋尊の慈悲廣大なるには及ばぬ、その證據は直接我等を敎化したまはぬを以ても知るべきである。

元來淨土敎の發達したのは支那日本であるが、彼等の諸高僧は斯くの如く知れ切たる現佛の在しますを除外し何の不足する所があつて影も形も無き他土薄緣の阿彌陀を捕へ來つて宗旨を建立せられたのであらうか、今となりては淨土敎中の法孫の者ですら尙其法に飽足らずして竊に後悔しつゝあるを傍觀するのである。

第二十三章　人法本尊の勝劣如何

第七十一節　日蓮宗の法本尊

▲問ふ」佛菩薩の名號多き中にも主師親の三德を具したまへるは釋尊のみにして、我等娑婆界の衆生が本尊として崇め、信仰の主體として歸する所の無上法王は彌陀に非ず大日に非ず將た藥師觀音に非ずして、釋尊一佛に在しますことは、最早一點も疑ひを容るゝの餘地はありませぬ、殊に龍樹菩薩が〇大智度論に於いて「十方諸佛ト謂フト雖モ實ハ釋迦一佛ナリ」といひ、又「十方恒沙ノ三千大千世界ヲ名ケテ一佛國土ト爲ス、是中更ニ餘佛無シ實ニ一リノ釋迦牟尼佛ノミナリ」とあるが如きは八宗の祖師とも仰がるゝ賢者の斷案であるから、その釋尊が〇法華經に於いて「唯我一人能爲救護と仰せられ〇涅

道元禪師は法華經を以て大王と讃歎せらる

槃經に於いて「一世界ノ中ニ二佛出世ス云フ無有是處」と宣言せられたのを承はりましては、他に如何なる有難い貴い佛如來が在しますにもせよ、釋尊を措いて他佛に歸依し奉り、その救濟を受ける氣にはなりませぬ、その他佛餘尊は設令釋尊の所說なりと雖も、如來出世の本懷たる一大事因緣を說かせたまへる法華經に於いて、正直捨方便、但說無上道とあるからには、爾前のお經は方便にして眞實で無かつたと云ふことが信じらるゝのです、又○無量義經に四十餘年未顯眞實と說かせられた所を考へ見るに、唯我一人能爲救護と仰せられたのは、少しも飾り氣のない、赤心を吐露せられたのかと信じられます、斯樣に申すと日蓮上人の口調を借りる樣ですが、法華經は獨り日蓮宗特有のものでもなければ、天台宗專有のものでもない、日本曹洞の開祖道元禪師は日蓮上人が未だ法華宗を開かれない以前に先立ち「法華經は諸佛如來ノ一大事因緣ナリ、大師釋尊所說ノ諸經ノナカニハ法華コレ大王ナリ大師ナリ、餘經餘法ハミナコレ法華經ノ臣民ナリ眷屬ナリ、法華經中ノ所說コレマコトナリ、餘經中ノ所說ミナ方便ヲ帶セリ、ホトケノ本意ニアラズ、餘經中ノ說ヲキタシテ法華經ニ比校シタテマツランコレ逆ナルベシ法華ノ功德力ヲ破ウフラサレバ餘經アルベカラズ、餘經ミナ法華ニ歸投シタテマツランコトヲマツナリ」と仰せられた位であつて見れば、敢て天台、日蓮の宗我とも申されませぬ、一經一論に依らざる宗旨の祖師が斯くの如く稱讃せられたのであるから、此れは實に公平なる批判であらうと思ふのですその經中に「今此ノ處諸ノ患難多シ、唯ダ我レ一人能ク救護ヲ爲ス」と說かせられたのですから、是れは實に最後決定の一大斷案であらうと思ふのです、斯く仰せられた應身の釋尊が自から我れは久遠實成の古佛であるぞと仰せられたのですから、此の釋尊に歸依せずして方便帶權の經中に名のみある佛を本尊とせられずして、名もあり實もある釋尊を三身卽一の無上尊として歸依せしめられ、信

最後決定の一大斷案

日蓮大士は法を先として人を後にす

信仰の歸趣

仰の主體として渇仰せしめられむとする尊師の所論は實に古今絶倫であるかと思ひます

然るに世尊滅後、諸宗開敎の最後に於いて、從前の諸宗諸祖を一言の下に罵倒し、經王法華を中心として主師親の三德を具したるは、此の娑婆界に於いて釋尊のみであるとし、久遠實成の大釋迦牟尼佛を本師本佛としながら、何故に法華經を本尊として、釋尊を本尊とせられなかつたのでありませうか此義は日蓮宗の人に就いて聞くべきなれど、今尊師は日蓮上人と同床に生じて同床に死せず、法華經を崇めながら、法を本尊とせずして釋尊の人を本尊とせらるゝは其處に必ずや人法の勝劣本末が無くてはならぬ筈なるに由り、敢て尊師の卓說を承はり度いと思ふのであります

◉答ふ』法が先か人が先かといふの質疑であらうと思はれるが、其處は各自の所見に因つて先後を爲すので、別に人法の勝劣を論ずる場合ではあるまいと思ふ、日蓮大士は法を先として人を後とし、余は人を先として法を後とするのである、故に日蓮大士は法を以て本尊とし稱名とせられ、余は人を以て本尊とし稱名としたのである、今竊に日蓮大士が法本尊を立てられたる本旨を忖度するに、大士は法華經一部を以て所依とし、天台大師の意思を祖述せられたものと見える、此事は○本尊問答鈔の中に詳說せられてある、卽ち法華經を本尊とせられた其本は迹門の第十法師品の中に左の文句がある

法華經法師品に依りて本尊を定む

如來の全身あり

藥王在在處處ニ、若ハ說キ若ハ讀ミ、若ハ誦シ若ハ書シ、若ハ經卷所住ノ處ニ皆應ニ七寶ノ塔ヲ起シ極メテ高廣嚴飾ナラ令ムベシ復タ舍利ヲ安スルコトヲ須ヒザレ、所以ハ者何、此中已ニ如來ノ全身有リ云々

此經中に已に如來の全身が在しますのであるから、法が其儘の人である佛である釋迦牟尼佛である、故に法華經を活きた釋尊であるぞと信じられたものらしい、又天台大師の○法華三昧に云く

道場ノ中ニ於イテ好キ高座ヲ敷キ法華經一部ヲ安置シ、亦未ダ必

ズシモ形像舍利並ニ餘ノ經典ヲ安スベカラズ唯ダ法華一部ヲ置ク云々〜

とあり、日蓮大士に取りては實に倔强の材料である、大士の○問答

鈔に云く

問ウテ云ク日本國ニ十宗アリ、所謂倶舍、成實、律、法相、三論華嚴、眞言、淨土、禪、法華宗ナリ、此宗ハ皆本尊マチマチナリ所謂、倶舍、成實、律ノ三宗ハ劣應身ノ小釋迦也、法相、三論ノ二宗ハ大釋迦佛ヲ本尊トス、華嚴宗ハ臺上ノルサナ（盧舍那）報身ノ釋迦如來、眞言宗ハ大日如來、淨土宗ハ阿彌陀佛、禪宗ニモ釋迦ヲ用ヒタリ、何ゾ天台宗ニ法華經ヲ本尊トスルヤ

答フ彼等ハ佛ヲ本尊トスルニ是レハ經ヲ本尊トスル其義アルベシ

問フ、其義如何ン佛ト經トイヅレカ勝レタルヤ

答ヘテ云ク本尊トハ勝レタルヲ用フベシ、例セハ儒家ニハ三皇五帝ヲ用ヒテ本尊トスルガ如ク、佛家ニモ亦釋迦ヲ以テ本尊トスベシ

本尊義の問答

問ウテ云ク、然ラバ汝云何ゾ釋迦ヲ以テ本尊トセズシテ法華經ノ題目ヲ本尊トスルヤ

如來と天台との趣旨に基き法華經を本尊とする也

答フ、上ニ擧グルトコロノ經釋ヲ見給ヘ私ノ義ニハアラズ、釋尊ト天台トハ法華經ヲ本尊ト定メ給ヘリ、末代今ノ日蓮モ佛ト天台トノ如ク法華經ヲ以テ本尊トスル也其故ハ法華經ハ釋尊の父母諸佛ノ眼目也、釋迦大日總ジテ十方ノ諸佛ハ法華經ヨリ出生シ給ヘリ、故ニ今能生ヲ以テ本尊トスル也、

能生を以て本尊とす

問フ、其證據如何

答フ○普賢經ニ云ク、此大乘經典ハ諸物ノ寶藏ナリ、十方三世ノ諸佛ノ眼目ナリ、三世ノ諸〜ノ如來ヲ出生スル種ナリ云々

釋尊ノ最後ノ御遺言ニ云ク、依法不依人等云々〜、法華經最第一ト申スハ法ニ依ル也云々

此等の文證に依りて日蓮大士の法本尊義は粗了知することができる

のである

第七十二節　法王教の人本尊

日蓮大士も法華經に依り釋迦如來を本尊とするの御内意なきにしもあらざれど、其實は法華經の文句に轉ぜられ、釋尊の御本意を誤解せられたやうに思はれる、何故かといふに、釋尊は能說の主にして法華は所說の法である、法華が釋尊を出生したのではなく、釋尊が三世十方の諸佛如來を出生せられたことは大乘の經典にのみありて小乘の經典にはない、故に大乘の經典は諸佛の母にして其眼でもあらう、けれども大乘經典の母は正しく釋尊である、諸佛の母も眼も其本を原ぬれば皆釋尊である、若し釋尊が法華經及び大乘の經典を說かせられなかつたならば、釋尊以外に一佛一菩薩の名號だも聞くことは出來ぬのである、若し釋尊以前に法華經及ひ諸大乘經があつたとすればその經典が釋迦大日等を出生したとの理由も立つけれど

釋尊以前には一もその經典が無かつたのであるから、その理論はこの人間世界に通じない、折角普賢經を證據に引かれたけれど、その證據は何等の價値をも有しない○五燈會元の序に「釋迦出世セズ達磨西來セザルモ佛法大地ニ遍シ」といふこともあるけれども、その之を述べたものは釋尊を師として佛法を學んだ後に此言を發したのであるから、雲門の一棒と同じく釋尊の前には三文の價値なしと云はねばならぬ、況や所說の經典を以て釋尊の父母なりとは誣言も亦甚しい、又法華經何れの所に「南無妙法蓮華經」といへる明文があらうぞ、又天台大師が、法華三昧を修する時に法華經一部を高處に安置せよと云はれたればとて、それが本尊の證據にはならぬ、又法華經の法師品に、此中に如來の全身ありと說かせられたればとて、題目を本尊とし、稱名にせよと定めたまふたのではない、只迹門の流通分として此の法華經を讃歎せられたまでのことである、その法師品に「於此經卷敬視如佛種種供養」とある、已に佛の如くに敬視して供養せよ

とあるので、佛よりも尊貴であるとの事ではない○佛說遺敎經に言く

汝等此丘於我滅後、當尊重珍敬波羅提木叉、如闇遇明、貧人得寶、當知此則是汝等大師云々

又經の終りに至りて言く

自今已後、我諸弟子、展轉行之、則是如來法身、常在而不滅也

成る程戒法は如來の法身にして衆生の大師なるに、相違なけれども

そは只佛の如くに尊敬せよと仰せられたので、佛を措いて經を本尊とせよ、稱名とせよと仰せられたのではない○斯くいへば法華經は釋迦牟尼佛が初めて說かせられたのではない、過去の諸佛も已に之を說かせられ、釋尊も已に其說を聞いて發心修證せられたのぢやと辯護する人もあらうが、その過去佛が此の法華經を說かせられたといふことは誰れに敎へられたのであらうぞ、釋尊以外に一人として之を敎へたものはない、假りに釋尊から敎へられたとするも、過去

法は孤り弘まらず之を弘むるは人に依る

佛は本にして法は末なり佛は先にして法は後なり

世に於いて、その法華經を說いたものは過去の佛である、又其の前に佛があつて法華經を說かせられたとすれば、その佛も卽ち人にした法ではない、法とは十界十如權實なりと、此法は常住にして法爾如然なるにもせよ、その之を說く所の人も亦常住にして法爾である法と人と共に常住法爾なれども、法は孤り弘まらず、之を弘むるは必ず人に依る、釋尊出世以前たりとて十界三千の諸法は如理如常なれども、釋尊にあらされば之を示すこと能はず、天台にあらざれば之を論すること能はず、日蓮大士にあらざれば、人をして信仰せしむることが出來ぬのであるから、別に勝劣はなけれども佛は本にして法は末、佛は先にして法は後なりと云はねばならぬ、故に三寶を配列する時にも、能說の佛を先にして所說の法を次にし以て佛法僧といふ、法若し法爾ならば前に論じた如く自然法にして淸濁混合、敢て尊貴とするに足らざれど、八識の和合を破りて眞如法身を顯現したる諸佛の說かせ給ふ所の法なるがゆゑ正法尊法として歸依し奉

つるのである、法爾の法を以て本とするが故に、無始本有の三身如來が在しますかと思ふやうにもなる、一家の内に家憲のあるのは其の家主があるからのこと、一國の内に國法のあるのは國王があるからのこと、一世界の中に正法の流布するは法王の佛陀があるからのこと、勅語と天皇とは不二なるが如くなれど勅語よりも其本たる天皇を先としなければならぬ、即ち天皇は人にして勅語は法である、今も其の如く、佛と法とは不二なるが如くなれども、佛は本にして法は末なるが故に、其本たる佛を本尊としなければならぬ、其本尊佛も生死起滅に涉る佛ではなく、不生不滅の佛身である、遍滿法界の佛身である、遍滿法界なるが故に千百億の木佛畫像を造立すれば月の萬水に映るが如く、佛身の靈體も亦その形像に宿りたまふのである、耶蘇教者は佛教を指して偶像教なりと譏れども、彼等は未だ偶像に卽して非偶像なることを知らぬ、耶蘇教の神はッィぞ人間の形を現じて口づから其の福音を說いた事が無いのであるから、偶像

偶像建立の可否

を造らうにも造ることが出來ない、然るに釋尊は正しく人間の形を現じて口づから解脫の法門を說かせられたのであるから、人間の如くなる偶像を造ることができるのである、

斯く云へば論者難じて言はむ、若し然らば釋尊の如く人間の形を現はした佛の形像を造るは道理に合すれども、彌陀大日藥師觀音不動等の如く、只其名のみを聞いて其實を見ざる佛菩薩の形像を、如何にも人間らしく造るは何故ぞ、荒誕無稽も亦甚しからずやと、眞に爾り、若し別に斯くの如き佛菩薩在しますと思うて其の形像を造りなば誤りの甚しきである、何となれば其の形なきに形を造るのであるからのこと、設ひ理想畫なるにもせよ、阿彌陀佛が果して人間に似たる形像なるや、大日藥師が果して人間の如くなるものなりや否やは想像だもすることはできぬ筈のものである、然るを平氣にて應身の釋尊像と同じやうに思うてをるのは不思議である。全く不合理の事と言はねばならぬ、何となれば物無きに物を造るからの事であ

る、然れども吾人を以て之を見るときは然らず、一切の諸佛菩薩は皆釋尊一佛の異名同體なるが故に、忿怒折伏の相を現じたまふ時は不動明王又は五大力士の如き形像を造り、攝受柔和の相を現じたまふ時をば地藏觀音の如き形像と爲すのである、又報身法身の相を現じたまふ時をば彌陀藥師大日如來の如き形像を造るので。釋尊一佛の變形と見れば則ち道理に合すると思ふのである

○又日蓮大士が涅槃經の依法不依人とあるを引證して法本尊の義を立てんとせられたれども、此に人とあるは佛陀の事には非ずして如來滅後の人師である、又涅槃會上に於いての依法の法が必ずしも、南無妙法蓮華經の法を指されたものとも思はれぬ、吾人は是くの如き引證を以てするは曲解の甚しきものと思ふ、蓋し四法の中、了義經に依て不了義經に依らざれとある金言に基き、日蓮大士が他師の如く、不了義經に依らずして經王法華經を活して宗旨を建立せられたのは卓見と言はねばならぬ、然れども法華塔を造れよとある文句のみを楯にして本門壽量の大釋尊を本尊とし稱名とせられなかつたのは吾人をして甚だ遺憾の叫びを爲さしむるのである、已に主師親の三德をまて主張しなから、所說の經題を本尊とせられたのは、萬世の識者をして首肯すること能はざらしめられたのである、吾人の釋迦本尊論は其の缺點を補ふものと云はねばならぬ

第七十三節　起信の四信と本論

▲問ふ』已に貴說の信仰が日蓮大士の如く法本尊に非すして人本尊たることは了解致しましたが、師が常に馬鳴大士の大乘起信論を以て通佛敎の根本義とせられつゝある其中には、根本の眞如を以て信仰の主體とし、三寶を以て其の妙用とせられてあります、然るに今此の本論に於いて釋尊を其の主體とせらるゝのは、起信の主體と齟齬するやうに思はれますが果して然るものなるにや

◉答ふ』成るほど眞如は諸佛衆生の根本ではあるけれども、その根

起信論の根本眞如は諸佛出經の眞如也

本たることを知らしめられたものは卽ち釋尊である、眞如の本體より論ずるときは不增不滅にして衆生諸佛の差別は無けれども、信仰の必要は諸佛に在らずして衆生に在るものなりとす、今衆生の方面より之を見るに衆生の眞如は在纏にして諸佛の眞如は出纏である、已に前にも論じたるが如く、衆生在纏の眞如は金鑛の如く、諸佛出纏の眞如は精金の如きものなるに依り、本體一なりと雖も、其用に至りては天地雲泥の相違がある、起信論の謂ゆる根本眞如は諸佛の方面より見たる出纏の眞如にして無垢の黃金である、蓋し其の諸佛といへば無數に在しますが如くなれども、其實は釋尊一佛の異名同體なるが故に、法華經の方便品に諸佛世尊は唯一大事因緣を以ての故に世に出現したまふとあるは他佛の事に非ずして釋尊一佛の事なりと決定しなければならぬ、且つ起信論の中にも諸佛如來の術語が頻々と使用せられてあるけれども、奇羅璨然たる諸佛如來が十方世界の盡天盡地に充滿したまふものとも思はれぬ、又論の始めに歸命盡十方、最勝業徧知、色無礙自在、救世大悲者」とあるに依り如何にも恒河沙數の諸佛が虛空に充滿したまへるやうに見え、論の終りにも「諸佛甚深廣大義」とあるに依り、三世諸佛の法義を論明せられたやうにも見ゆれど、其實は釋尊一佛の法義に過ぎぬ、又論の中に、如來根本義の文字はあれども、彌陀如來とも、藥師如來ともなきに依り、是れは必ず釋迦如來の事に限られてある、例へば日本國中に於いて天皇といへば必ず上み御一人に限られてある如く、此の娑婆世界に於いて佛陀世尊如來といへるものは、必ず一の釋迦牟尼如來のみである、又馬鳴大士の頃は一の釋迦宗のみにて、大日宗もなければ彌陀宗もなかりし故、殊更釋迦牟尼の佛號を署名せらるゝの必要がなかつたのである、然れども龍樹菩薩に至りては、大乘の經典漸く發展せられ、諸佛の名字も隨つて多般となり、衆生の惑ひを生ぜむことを恐れ、前に揭げし如く

十方諸佛と謂ふと雖も實は釋迦一佛なり、化土の機緣に約して種

如來滅後六百年間は一の釋迦宗のみ

種の佛名を立つるのみ

と、後來道元禪師の頃に至りては倍々多名の佛號を立て、其の歸趣に迷ふものあるに依り「諸佛とは釋迦牟尼佛なり」と決斷せられてある此義は釋尊御在世の時已に早く楞伽經中に問答せられてある、云く

爾時ニ大慧、復タ佛ニ白シテ言ク世尊所說ノ句ノ如キ、過去ノ諸佛恒河沙ノ如ク、未來現在モ亦復是クノ如シ、如何ゾ世尊、說ノ如クニ受ルト爲ンヤ、更ニ餘義有リト爲ンヤ、惟タ願クハ如來哀愍シテ解說シタマヘト

佛、大慧ニ告ケタマハク、說ノ如クニ受ルコト莫レ、三世諸佛ノ量恒河沙ノ如クニハ非ズ、所以者何トナレバ世間ノ望ミニ過ギタリ

と、蓋し十界依正の理が宇宙間本有の實理であるとしたならば、釋尊以前にも以後にも必ず出世が無くてはならぬ理なれども「今此三界悉是我有、唯我一人能爲救護」の說法を聞きたる我等は、諸佛とある

も、萬佛とあるも、皆是れ釋尊一佛の御敎化なりと一心一向に信ずるのである、故に眞如は根本なりと謂ふと雖も、此れは是れ淨法の根本にして、染法も此中に包容せらるゝものとは云はれぬ○起信論に云く

一心ノ法ニ依テ二種ノ門有リ、云何ガ二ト爲ス、一ニハ心眞如門二ニハ心生滅門、是ノ二種ノ門皆各々一切ノ法ヲ總攝ス、此義云何是ノ二門相離レサルガ故ナリ

此の二門は水波の如く、兩翼の如く互に向背表裏を爲してをるから衆生に在りても、諸佛に在りても俱に離るゝことは出來ぬのである俱に離るゝことは出來ぬけれども、衆生に約するときは、無明の染法のみ多くありて眞如の淨法は殆ど見ることが出來ぬ、若し又如來に約するときは眞如の淨法のみ多くして無明の染法は殆ど見ることが出來ぬ、設令無明ありとも、眞如の爲めに包容せられて無明の用を爲すことが出來ぬ、これを煩惱卽菩提、生死卽涅槃といふ、此の

二門は恒存なれども、醇乎として醇なる淨法の眞如を見たるは釋尊出世以後の事なりと云はねばならぬ、故に馬鳴大士が眞如を以て四眞の第一に列せられたりと雖も、佛法僧の三寶に關係なきものとすることは出來ぬ、卽ち三寶所顯の眞如なるが故に、此の眞如は三寶の妙體にして、三寶は眞如の妙用である

三寶所顯の眞如

○無住法師の隨筆に云く

起信論ニハ四ノ事ヲ信ズベシトイヘリ、眞如ト三寶トナリ、眞如ハ三寶ノ妙體、三寶ハ眞如ノ妙用也此ホカニ何事ヲカ信センヤ天台云ク、但法性ヲ信ジテ其餘ヲ信セズト云々、此信マコトノ道源功德ノ母ナリ、先達ノ申サレシハ佛道ニ入ルトイフハ、內ニハ眞如ヲ信ジ、外ニハ因果ヲ信ズ、コレ佛法ノ大意ナリ云々

佛法の大意

單に根本といひ眞如とあればとて、此の宇宙間に磅礴せる大氣の如きものではない、佛世尊の謂ゆる眞如法性○馬鳴大士の謂ゆる根本眞如なるものは諸佛所證の淨法にして衆生在纏の眞如佛性等を指されたのではない。天台大師の謂ゆる法性なるものも蓋し諸佛所顯の法性であらう。清涼大師云く、「非情に在つては法性と名け、有情に在つては佛性と名く」と、若し非情に於ける法性ならば、此の法性は清濁混合のものにて靈々昭々たるものにはあらず、靈々昭々たるものは卽ち佛性である、佛性は覺性の義なるが故に、靈鑑不昧である若し天台大師が宇宙に周遍せる識大の如きものを指して法性とせられしならば、信法性の言も容易に首肯することが出來ぬけれど、大師の眞意は眞如法性の義であらう、此の淸淨なる眞如法性は、諸佛の位に在りてこそ始めて之を見之を信ずることが出來るので、衆生數中に在りては之を見ることも信ずることも出來ぬ、されど此の眞如法性は因位の衆生界に絕無と云ふには非ず、其の一分を認むることとは出來得るけれど、其の全分を認むることは不可能である、身口意の法性に順じたるを善人といひ、佛性の身口意に發現したるを聖賢といふ、此中に菩薩もあり羅漢もあるに依り、信仰すべきの人も

數多あるけれど、絶對の信仰に至りては佛如來を標準としなければならぬ、之を圖にして見れば左の如し

是くの如く三寶と謂ふと雖も歸趣する所は佛の一寶である、而して眞如は其内に在りて根本となるが故に三寶の爲めには其の種子と成る、此の種子に左の三義が含まれてある

- 覺照の義あり
- 軌持の義あり
- 和合の義あり

●根本種子

此の三義が外に開發して三寶となる

●現前三寶

- 佛――釋迦如來
- 法――一代時教
- 僧――菩薩羅漢

此の眞如は三寶の種子となりて外に開發するのみならず、三寶の中位となり、常に因人果人の根本となつて常住不變である、中心の不動阿字の本體なりとは卽ち此義を云ふ

之を要するに三寶と云ふと雖も詮じ詰めるときは人法の二義となる卽ち因人が因法を修して果人の佛陀と成るのである、彼の涅槃經に諸佛の師とする所は所謂法也」とは眞如の淨法を指されたものである而して又依法不依人とあるは如來所說の正法に依りて、末代人師の見解に依らされとの佛訓である、然るを知らず如來所說の法を本として能說の如來を末とするは本末顚倒である

第二十四章　釋尊信仰と諸佛

第七十四節　諸佛は悉皆化佛

▲問ふ』上來種々の方面に渉りて人本尊の大義を拜聽致しまして最早疑ふべきの餘地もありませぬけれど、若し釋尊一佛を以て信仰の對象と定むるときは從前尊敬し來りし彌陀藥師大日等乃至七佛主尊十方三世の諸佛菩薩に對するの觀念は如何やうに定めて宜しいものでせうか

◉答ふ』釋尊一佛を以て本尊と定めたのは佛敎を統一し信仰を統一したいと思ふからのこと、本來一佛にして餘佛が在しまさぬのならば統一するの必要もないのである、統一するといふは多種に紛亂して其の本末源流が解らぬやうになつてをるから其本を示し源を知ら令めんが爲めなるにありて、其末を廢せよ、其流を絶てよと叫ぶのではない、其本を本と知らず、其末を末と知らざるものをして反省自覺せしめんが爲めの叫びに過ぎぬ、故に其本を本と知り其末を末と知らば夫れにて本論の歸趣は其の結論となるのである

然るに釋尊は劣應身である、淨飯大王の太子にして人間である、妃もあれば實子もある、聖人と云へば云ふものゝ且く人間中の尊貴な人て、人間以上のお方ではない、宗敎なるものは人間と人間以上の或物と結び附ける所以のもので、その或物を名けて神とも云ひ佛とも云ふので、或は天帝とも云ひ、梵天とも云ひ、又は天之御中主神とも云ふのであると云ふ觀念が土臺となつてをるから、吾人の釋迦本尊說が如何にも賤劣なやうに考へらるゝのであるらしい

世の宗敎反對者は云く、耶蘇敎では人間以上に全智全能なる造物主があつて人間及び萬物を造つたと云ふけれども、斯く考へたのは卽ち人間である、故に神が人間を造つたのではなく、人間が神を造つたのである、其が證據には、神ありと信する者には神あるが如く、

神が人間を造つたのではなく人間が神を造つたのである

無佛論

神なしと思ふ者には絶對的に神はない、世に無神論者の出づるは之が爲めであるぞと、然れば則ち神ありと思ふも人の心、神なしと思ふも同じく人の心である、是に於いて唯心論が最後の勝利を得るのであるぞと

若し此の論鋒を佛教に轉用し來らば則ち如何、阿彌陀と云へる佛、大日と云へる佛、藥師阿閦多寶等の佛、乃至過去現在未來の諸佛菩薩、乃ち人間以上のもの、曾て人間の歴史になきもの、此等は皆釋迦と云ふ人間の思想口頭より其名を案出せしものにて其の實體實質が有るものか無きものかは甚だ疑問である、有りと信ずる者の思想には有るが如くに思はるゝでもあらうけれど、其んなものは無きものなりと思ふ者には彼の天神と同じく無佛である、世に無佛論を唱ふるものあるは之が爲めである。如何に釋迦の經文に其名及び其の功德經歴が列ねてあればとて、他に證據のなき事であるから、我等は絶對的に無佛を主張するものであると云ふは必然である、故に釋

有佛論

迦の經文を楯にして單に有りと思ふのは迷信にして無しと思ふのが實義であると論決するのである、然れば其の有りと思ふのも心の作用、無しと思ふのも心の作用なるが故に唯心論は是に於いて成立するのであると云々

是くの如き論者に對しては彌陀も大日も、地藏も觀音も皆是れ愚民を誘引する方便假作のものに過ぎぬ事となる、世の大日實在論者、彌陀實在論者觀音實在論者等、如何なる言詞を以て信服せしめんとするか、如何なる論鋒を以て屈伏せしめんとするか、無性闡提の無緣衆生として之を度外に置くべきか○有佛論者云く、夫れは暴論である、藥師を信ずる者には藥師の靈驗があり、彌陀大日を信ずる者には必ず彌陀の來迎があり、大日の靈威がある、或は彌陀の光明を拜することあり、或は生身の大日に摩頂せらるゝ事がある、信ぜざる者の知る所でない、其が證據は古今の史上にも枚擧に遑あらず、口碑にも傳はりて埋沒することが出來ぬ、不信者以て如何と爲す、

設令己れが信ぜざるからとて他の信仰までを阻害せんとするは甚だ邪見ならずやと○無佛論者云く、其れは汝等が唯心の所造である、障らぬ神に祟なし、若し彌陀觀音が夫れほど慈悲心深きものならば人の親の頑惡者をも慈むが如く、信仰なき重罪人までも之を救ひ之を敎へて善道に導かなければならぬ、然るに誹謗正法、重罪業障を

幻覺の作用か

ば之を除くとて無慈悲にも之を相手にせぬ事になつてをるてはないか、而して其の靈驗感應を受けたりと云ふものは、一心不亂寢食雙忘の者に限るてはないか、之が卽ち無佛の證據である、その佛の光明を拜んだの摩頂せられたの、又は妙なる音聲を以て靈告があつたの又は微妙の容顏を拜したのと思ふのは、皆悉く幻覺の作用に過ぎぬ、平素その木像や畫像、又は其等の說明などを聞いて心の中に疊み込てをるのが、或は夢中に其の形が顯はれたり、或は幻覺中に其の音聲となつて聞えたりするまての事にて、其實は唯心の所現にして心が心を見るのて、心外の客觀境に左樣なものがあるのてはない、

唯心の所現

然るを心外に其物ありと思ふのは大なる誤まりてある、若し實在するものならば信者未信者の差別なく、その實體實質を見ることがあり、感ずることが無くてはならぬ、若し然らば我れ〳〵たりとも其の確實なることを認むるべけれども、其事なきを以て見れば決して信するに足らぬものであるぞ之れに反して又世に殺人罪を犯し、竊罪等の大惡を犯したものは、日夜心の鬼や羅刹に責めらるるに依りて、夢中に知らず〳〵其の惡事を寢物語にする事があり、又は夢中にその遊魂が地獄幽闇の街に彷徨し、獄卒阿房に遭遇して、恐怖の思ひを爲すやうな事がある、此等の如きものは皆是れ唯心の所造にして空中の樓閣てある、設令空中の樓閣にても佛菩薩や、極樂天堂を夢想するは、人をして幾分か善心に導くものなるが故に、愚人の爲めには無用ならざるも、智人の爲めには終に無價値のものてある云々

空中の樓閣

是くの如くに論破せらるゝ時、有佛論者は如何に之を辯護せんとす

るか、只度し難き人間として立別れとするより爲方が無からうと思ふ、何となれば彼の天帝、梵天、ゴット、造物主、御中主と同じく思想信念上の實在論にして、畢竟は有耶無耶の水掛論に終るものなるが故である

第七十五節　實佛實在の釋尊

論じて此に到るや、世の所謂釋尊以外の有佛論者は、余を目して外道天魔の如くに思ふかも知れざれど、其は未だ余が眞意のある所を了知せざるからの事である、余は是くの如き無佛論者をも度せんが爲めの故に是くの如きの奇論を假設して世の有佛論者に利便を與へんとするに外ならぬ、論者乞ふ之を聞け

余が屢々論辯せし如く、釋尊出世以前に於いては一佛一菩薩の名字だも聞くことが出來なんだではないか、況や百千の諸佛菩薩に於いてをや、釋尊出世以後、始めて三寶の名字を聞くことが出來たのである、阿彌陀經も藥師經も、大日經も、地藏經、觀音經、其他有り

と所有佛菩薩明王權現等の名字及び誓願、眞言陀羅尼の如き、殘らず釋尊の一佛源より流れ出てたるものにあらずや

○法華經の壽量品に申してある

我レ成佛シテヨリ已來百千萬億那由他阿僧祇劫ナリ、是レヨリ來タ、我レ常ニ此ノ娑婆世界ニ在リテ說法敎化ス、亦餘處ノ百千萬億那由他阿僧祇ノ國ニ於テモ衆生ヲ導利ス」と

さすれば過去の七佛及び一千佛と云ふ者も皆是れ釋尊が出現度生の爲に說かせらたものと云はねばならぬ、又西南東北無數億刹の諸佛と云ふも亦是れ釋尊一佛の分身化生と云はねばならぬ、此の世界外に其んな諸佛の國土が有るか無いか、其の穿鑿を爲すに由なけれども、佛語は眞實にして虛ならずと信ずる以上は此の所說を以て眞實なりと信ずるより爲方がない、又云く

諸ノ善男子、是ノ中間ニ於テ我レ然燈佛等ト說キ、又復其ガ涅槃

ニ入ルト言ヒシ、是クノ如キハ皆方便ヲ以テ分別セシナリ

是れは假説に過ぎなかつたとの御申譯である、又云く

諸ノ善男子、若シ衆生アリ、我ガ所ニ來至スルトキハ、我レ佛眼ヲ以テ、其ガ信等ノ諸根ノ利鈍ヲ觀ジテ、度ス應キ所ニ隨ツテ處處ニ自カラ名字ノ不同、年紀ノ大小ヲ説キヌ、亦復現ジテ當に涅槃ニ入ルベシト言イキ、又種々ノ方便ヲ以テ微妙ノ法ヲ説キ、能ク衆生ヲシテ歡喜ノ心ヲ發サ令ム

此れは所謂人を見て法を説かせられたので、其者を歡ば令めんが爲め、巧みに方便を設け、其者をして善心を發さしめたのであるとの事であるから、是れも假設と思はねはならぬ、例へば淨土の三部經の如きは微妙の説法である、如何にも本統らしい巧説である、けれども今日の普通常識より觀察するときは、巧みなる一種の佛教的小説として詠むるより爲方のない處がある、併し假説の中にも實説が交へてあるから全然棄つべきものではない、それ故經典として末代に傳へられてある、されど悉く文の如くに解せんとするは到底不可能である、三部經に限らず、この法華經でも小説のやうな所がある

如來所説の經典多くは止喩錢

又云く

諸ノ善男子、如來所演ノ經典ハ皆衆生ヲ度脫センガ爲ナリ、或ハ己ガ身ヲ説キ、或ハ他ノ身ヲ説キ或ハ己ガ身ヲ示シ、或ハ他ノ身ヲ示ス、或ハ己ガ事ヲ説キ、或ハ他ノ事ヲ示ス、諸ノ言説スル所ノ説ハ皆實ニシテ虚ナラズ

此中に己身とあるは釋尊御自身の事にて、他身とあるは諸佛の事である、總て如來所説の經典は黄葉を以て兒啼を止めしむるやうなもので、木葉でも是れが黄金である、之を與へる程に啼いてはならぬぞと云へば、小兒が直に啼きを止めて了へば又木葉であるか、黄金であるかとの穿鑿をするには及ばぬ、啼きを止めて機嫌がよければそれて親たる者の目的は達したのである、なる程大人から見れは全く欺したに相違なけれども、其が決して惡意ではない、コラ〳〵機

嫌よく靜にしないと巡査樣が來て連れて往かるゝぞと嚇せば、頑惡な小兒も靜になる、惡戯をせぬやうになる、如來所說の經典も多くは此輩であるぞと思はねばならぬ、故に神通自在の妙技を得たまひし釋尊の事なるに依り、或は西方の極樂淨土を說き、或は東方の淨瑠璃世界に藥師如來が在しますと說き又は人を幻境に入れて、極樂世界や無間地獄の體相を示され、其他種々無量の佛菩薩、因緣譬喩を說かせられた、智者としては眉毛に唾を附けて見なくてはならぬやうな事も多多あるべけれども、其實は皆衆生を度せんが爲めの方便言詞にして止啼錢空樓閣なれども、其權が直に實となるのである世間の父母が其兒を欺したり嚇したりするのと同じこと、決して惡意ではなく、眞實の慈悲心である◎例せば釋尊御在世の時、毘舍離國に大惡病が流行し、夜叉鬼神が横行して人の精氣を吸ひ、命まで奪はるゝものが夥しかつた、時に平素釋尊に屬魂惚をなして居た月蓋長者及び其他五百の長者が大いに心配を爲し、何らしたらば之を

撲滅することが出來るであらうかと凝議の末此れは世尊にお縋り申ずより外に良方があるまいと決し、打揃うて佛所に詣うて願ひけるやう、

今國中の人民、多く大惡病に罹りまして良醫耆婆の技術も之を救ふことが出來ませぬ、何うぞ世尊、慈愍を垂れたまひ、アナタの大神通力を以て之を救はせたまへと一同が歎願に及んだ、時に世尊は直に機を見て取られ、是れは尋常一樣の手段では行かぬ、適應の方便を施さねばならぬと思召されしものと見え、告げての仰せに、月蓋よ夫れには善き方法がある、是れより西方に無量壽佛と申す世尊が在します、その脇侍として觀音、勢至の二菩薩が在します、常に大悲を以て一切衆生を憐愍し苦厄を救ひたまふのである、其方今方に五體を地に投じ、彼方に向つて禮拜し、燒香散花して十念の間、人民の爲めの故に一心不亂に彼の佛世尊及び二菩薩を拜請せよと、是語を說きたまひし時、釋尊の放ちたまへる光明の中に於いて、三尊

を見たてまつることを得た、すると其の三尊が又大光明を放ち毘舍離國を照したまひしに、大地虛空が悉く金色に變じた、此時疫病神は國外に放逐せられ、流行病は立所に本復したといふことが○請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼經の中に記載してある、時に長者等は大い に釋尊の御方便に感じ、閻浮檀金を以て將來の記念にとて、その三尊を鑄造したのである、其中の無量壽如來だけが渡り渡つて日本に來らせられ、今は信州善光寺の本尊として奉安せられてあるとのこと、此の一事を以ても釋尊の善巧方便にてありしことを知らなければならぬ

月蓋長者等は無智であつたから、釋尊手中の機關人形たることを悟らず本當に其の三尊が在しますのかと思ふたから、記念鑄造までを行うて有難がつたのである、惡い事ではない殊勝な心懸けであつた今日でも或は月蓋と同じやうな信仰を持つてをる同行も澤山にあらうが、其實は憐れむ可きである、若し其が眞實なりと强情に信ずる人があるならば、試みに惡病流行の時、一心不亂になつた三尊を拜請して見るが宜い、決して三尊の御來現はない、若しあつたとすれば釋尊が三尊となつて化現せらるゝまでの事である、而も彼れ月蓋が拜觀したのは、釋迦如來佛光の中に於いての事であつた、又釋尊は娑婆世界の大導師に在しまして全智全能なるがゆゑ、疫病神を放逐する位なことに、他佛菩薩の力を借たまふ筈がない、若あらば唯我一人能爲救護の御言葉は虛妄になつて了ふ○傀儡師頸に掛けたる人形箱、佛出さうと鬼を出さうと『釋尊は古今絕倫の傀儡師である、世の傀儡師が一人にて使ふ所の人形は全く死物であるけれども、釋尊が使ひたまひし所の人形、卽ち佛菩薩なるものは決して死物ではない、活動人形である、應身といふは六道衆生の機根に應じて種々無量に應現化生せらるゝのであるから、千百億化身釋迦牟尼佛と尊稱し奉つるのである、觀音の無刹不現身と云ひ、地藏の無邊身と云ふもの、其實は皆釋尊一佛の千變萬化である、釋迦一佛の異名同體

てある而して其の釋尊は人間を度するが爲め正しく人間の形相を現はしたまふたことは、信者未信者の別なく、之を否認することは出來ぬ、天帝ゴッドの如き有耶無耶の間に在りて曖昧未定なるものと同日の論ではない、その肉身は隱れたまひしかども、その靈體は常在娑婆界、常住此說法なるが故に、衆生の心水さへ淨ければ今日でも必ず月の衆水に映るが如く我等衆生を救護したまふのである、故に釋尊を以て信仰の中心とするものは、他佛餘尊に對するも皆是れ釋尊一佛の御變形に在しますのであるぞと思ひ、決して輕蔑の念を生ずることは相成らぬ世に佛罰を受けたといふやうなことを言ふ者があるけれど、佛は決して耶和華の如き嫉妬の方にて復讎的の行爲ある方ではない、その罰を受くるが如き事のあるのは自已が作して自已が受くるので佛の復讎ではない、自作自受の因果律に制せらるゝのである、若し全く然らざるものありとせば賞罰分明なる守護神の所爲にして釋尊等諸佛菩薩の冥罰とは申されぬ

第二十五章　信佛の階級

第七十六節　信佛の所詮

▲問ふ』師說の一佛論を聞かぬ前は其の信佛の本義が區々になつて一定の歸趣に迷ひをりましたが、お蔭にて一佛卽諸佛、諸佛卽一佛の大旨を了得致しました、就いては信佛の階級と及び其の所詮は、どの樣なもので御座いませうか

◉答ふ』信佛の階級を大別すれば上中下の三階級となる、若し更に之を區分すれば三々の九品ともなり、九々八十一品ともなるであらう、此の階級に應じて見佛の樣子が違うて來る、どの樣に違うのであるかといふに、三身一體の釋尊なれども、その階級に依りては應身の釋尊を見たてまつるものがあり、報身の釋尊を見たてまつるものがあり、法身の釋尊を見たてまつるものがある、而して其の見佛

の所詮は直に見眞なることを知らねばならぬ、謂ゆる見眞とは見得眞如である、禪宗に於いて見性といふは卽ち見眞の事である、何故に今見性と云はずして見眞と言ふのであるかと云ふに、性は性欲不同として善性もあり惡性もある、性分性根玉と云ふ樣に純淨潔白なるものでない、然るに眞は不妄の義にて、何れの處に於いても雜り物のない純淨潔白なるものにて不變不異なるものなるが故に眞如と云ふ、又單に眞如と言つては名稱が漠然としてをるから馬鳴大士は心眞如と命名せられた、是に於いて釋尊の眞如と說かせられたるものは衆生心中の眞なることが明白になつたのである、卽ちマコトの心、心のマコト、變らぬ心といふ事に歸着するのである、この變らぬ心、これを佛心とも堅實心とも眞如心とも名くるのである、人として是心が明白になれば一切に通達して來る、通達自在なる心が卽ち道である、彼の大道は通達自在にして王侯も往來し人民も往來し畜類も往來し、善人惡人も往來し、七通八達して無礙自在なるが如く、佛敎の專門語を以て云へば卽ち四聖六凡の十界に通するのである、尙ほ之れに形容詞を附して云へば阿耨多羅三藐三菩提心である、略して云へば阿耨菩提ぢや、譯して云へば無上正眞道である又更に略して云へば無上道、正道、眞道、大道、佛道、覺心であり此心を以て人生宇宙を觀見すれば、善法惡法、苦樂昇沈、依報正報有情非情悉く是れ唯心の所現なるが故に三界唯一心心外無別法なりと人生宇宙の根本原理を發明したのが卽ち釋迦牟尼佛であるから、見佛することが出來れば見眞することが出來る、見眞することが出來て始めて見道し悟道することが出來る、之れが卽ち信佛の所詮といふものである、更に約言すれば己れの心を明かにして萬法を照すのである、萬法を照して以て自己の立脚地を確定し人世に處するの安心を講じなくてはならぬ、自己の安心が確定したらば他人をして斯道に引入し、俱に安心せしめなくてはならぬ、之を自利利他圓滿の安心決定と云ふ

其の此處に到るには階級がある、その階級は佛教の中にも五十二位に分れてをるが、今手取早く申して見れば凡そ八位になるかと思ふ一には信念位、二には信心位、三には信佛位、四には念佛位、五には稱名位、六には見佛位、七には見眞位、八には見道位である

第七十七節　信佛の八位

とは是れは一般の宗教意識である、この人生を概觀するに學者と云はず、不學者と云はず男と云はず女と云はず、貴賤尊卑の差別なく生れながらにして宗教心の有るものと無きものとがある、此中にも絶對の有無と相待の有無とがある、絶對の無は神佛基回と云はず何と云はず、單に衣食住を全うし五欲を滿たせば人生の萬事休了と思惟し、過去未來の事などにも毫も想到せさる底の人間である、之を佛教では闡提無佛性と云ふ、一切衆生悉有佛性といへる上から觀察すれば無佛性の道理はなけれど、實際の現相から觀察すれば無宿善にして、釋尊ですら無緣を度したまふことは出來なんだのである、而して絶對の有は、宿善の薫發する所なるか、生れながら、他の教を待たずして神を敬ひ佛を拜むものがある、釋尊の如きは卽ち其の模範である、誕生と同時に天上天下唯我獨尊の獅子吼を爲したるは古今東西に於いて釋尊御一人である、其他高僧偉人が幼少の時より信佛の徵證ありたるが如きは最も深厚なる有佛性である、相待的信念とは他人から勸められなくても神も敬ひ佛をも信じて粗略にせず一神でも多神でも、一佛でも多佛でも更に撰びなく崇拜すべきものなりとして、參詣もし寄進をもする、されど深く賴み厚く縋るといふ程の念は起らぬ、或は他人から勸誘せられて宗教の仲間入をする人もある、これは矢張宗教心があつたからのこと、無きものには如何に勸めても無効となる、爾うかと云つて度外にすることは出來ぬけれど、宗教的意識は先天的と云はねばならぬ

第二信心位

とは宗教的意識が一層深くなつて惡事を作さぬ程度に進んだものを云ふ、マコトの心と讀てもよし、心を信ずると讀てもよし神や佛を信ずる心と讀でもよろしい、併しながら凡夫の分際に在りては設ひ我が良心本心を信ずると云つても其心動もすれば煩惱妄想に隨逐して頼み難きものである、昔し鑑智大師が○信心銘といへるものを書かれた、それは分別事識分際のものではなく九識清淨の眞如心を指されたものなれど、一般の男女には高尚に過ぎて攀づることが出來かぬる趣がある、又傳大士は○心王銘を書かれたが、是れも却々高尚にて一般の男女には不適當の趣がある、多くの社會をして信心を高めしむるには客觀の境に信仰の目的物を置かねばならぬ、されば神社佛閣木佛畫像等の世に多きは此の要求に應じたものである、此の意識分際に在るの男女は成る可く多くの神佛に頼めば寄つて掛つて守護したまふものと考へ、種々の方面に信念を向けつゝある、眞宗から云へば雜行雜衆である、此等の信仰多くは現世利益にして自利一方である、未だ敢て深く因果の道利を信ずると云ふまでには至らぬ、經典を讀み、眞言を誦すれど、その理趣を味はつて見やうと云ふにあらず、只讀誦すれば功德になるであらうと云ふまでのこと、訓讀よりも棒讀の方が有難い樣であると云ふ位な信仰に過ぎぬ

第三信佛位

此れは更に一歩を進め純粹の佛教徒となり、或は受戒し、或は灌頂し、深く諸佛を念じ、因果を信ずるのみならず、聊か眞如佛性の妙理にも隨順する位に入つたので、四恩十善を我が行く道として修養するのである、又種々の佛書をも繙き、諸種の講席にも列なり、他人の爲めにも少し辯じて見たい程になる、教相の階級でいへば別教十信位の初信位には當るのである

第四念佛位

朝念觀世音、暮念觀世音、念々從心起、念々不離心、朝々佛を抱いて起き夜々佛を抱いて睡ると云ふやうに、身心を三寶の境界に投げ入れて、暫時も佛を忘れぬやうになる、是くの如く信佛の念が增進して來るから、或は知識に從つて佛法を問ひ、或は經卷に從つて廣く佛經の妙理を研究するのである、されど此人はまだ諸佛を念じて其心が純一無雜にならぬから一定の稱名を爲すまでには至らぬかと思ふのである

第五稱名位

此れは已に深く佛を念じた結果一佛一法に心を定めて精進するのである、例せば淨土眞宗の如く、日蓮宗の如く、一佛一法に固まつて來るのである、余が一佛論も此點にあるので、稱名を一定するには其の本尊佛を一定しなければならぬ、從前念佛稱名とだにいへば、阿彌陀に限れる如くになつて來たのは、その簡易を悅ぶの結果である、萬善萬行を以て念佛稱名の一理に歸せしめたのは淨土諸祖の腕力と云はねばならぬ、然れども余が主唱の法王敎に於ける釋迦稱名は淨土諸宗の一行と同一の論にはならぬ、衆生の機根を三種に分ち、其の下根に蒙むらしむるの法門としたることは前に論じた通り、卽ち

禮拜	聞法	懺悔	罪障
一心	歸命	哀愍	攝受
頓入	佛土	速證	佛身

である、此れは先づ純他力の方面であると知らねばならぬ、而して

或從	知識	或從	經卷
心地	開發	念念	淸淨
頓入	佛土	速證	佛身

は中根にして前の念佛信佛の位中に攝するのて、此れは半自力半地力の部に攝するのてある

第六見佛位

信――念――稱――の位に於ける佛は應身若くは報身であるが、此位に於ける佛は釋尊の法身である、法身は元來無相なるが故に、法華經中にも「若し諸相の非相ヲ見レバ卽チ如來ヲ見ル」とある、又金剛經には「若シ色ヲ以テ我ヲ見、音聲ヲ以テ我ヲ求ムレバ是人邪道ヲ行ジテ如來ヲ見ルコト能ハズ」と、三十二相や八十種好、乃至四辯八音などを以て眞の如來を見んとするものは邪道を行するのであつて、無相眞實の如來を見ることは出來ぬとある○又楞伽經の中には「眞實ノ如來ハ心意識所見ノ相ニ過ギタリ、譬ヲ爲ス可カラズ」と、淨土三部經の中に說いてある、佛身は心意識や念想觀を以て其の相好を觀想することが出來るやうに思はるれども、其は報身なるが故に其の人格的佛身を想念することが出來るけれども、此の法身は無相なるが故に想見することが出來ぬ○又法華經に「深入禪定見十方佛」と又「隨順是師學得見恒沙佛」と、此の佛說を瞥見すれば如何にも無量の佛が宇宙間に充滿して居らるるやうなれど、是れは敢て人格的の佛身が肉眼若くは心眼に映ずると云ふのではない○華嚴經に「佛身ハ法界ニ充滿シテ普ク群生ノ前ニ現ズ」とある、此の佛身は遍一切處なるが故に色相音聲はない、十方佛と云ひ恒沙佛と云ふものは充滿法界の法身佛である、○又法華經に「受持讀誦正憶念、修習書寫、是法華經者、則見釋迦牟尼佛」とあるも亦是れ釋尊の法身である○又「一心欲見佛、不自惜身命、時我及衆生、俱出靈鷲山」とあればとて、佛身の相好が出現せらるゝのではない、一心は卽ち禪定である、深入禪定すれば盡法界が靈鷲山となる○觀無量壽經に「諸佛如來ハ是レ法界身ナリ一切衆生心想ノ中ニ入リ給フ」と是れも亦釋尊の法身を明したまふたのである、是くの如き釋尊の法身を觀見するものは上根の衆生にて禪宗諸

派の見佛は多く是れてある

第七見眞位

此れは萬機休罷千聖不携の端的に住する人にして始めて其眞を見るのてある、前に云ふ

靜坐　默然　萬慮　休息
一念　不生　本體　現前
頓入　佛土　速證　佛身

昔し長拙秀才なる石霜慶諸禪師の俗弟子にして見眞せし居士が偈を作つて禪師に呈した

光明寂照遍河沙　凡聖含靈共我家　一念不生全體現
六根纔動被遮雲　斷除煩惱重增病　趣向眞如亦是邪
隨順世緣無罣礙　涅槃生死是空華
是くの如きは實に見眞非思量底の樣子にして洒洒落落の境界本地の風光コロリ現成てある、之を超凡越聖といふ、妙樂大師が「眞如海中ニ生佛ノ假名ヲ絕シ、平等慧內ニ自他ノ形相無シ」といへるが如きも矢張絕對見眞の端的にして即ち般若皆空の佛向上てある

第八見道位

又は得道得法とも云ふ、敎乘て云へば法華の諸法實相禪家の宗乘に て云へば回途復妙、垂手爲人の境界、華嚴の法界にては重重無盡主伴具足と云ふ、最う此處まて進みては念佛稱名も用不著、或從知識或從經卷も、靜坐默然萬慮休息も共に是れ用不着、有情非情同時成道草木國土悉皆成佛となり來る、佛と云ふも尙ほ是れ心田の汚れとなる

之を要するに信仰なるものは世間に處しながら世塵に染まざらんが爲め精神界に向つて廣大無邊萬世不易の眞理を求め安心を確定するのてある、其の方法に就いて幾多の宗敎が現はれたのてあるが、其

中に於いて吾人の要求する所は、世界古今の第一人たる釋尊を以て人生宇宙の秘密を開く關捩子とし、信仰の目的を達する中心力として不明を習ふの大導師とし、愚迷の賴むべき大慈父とし、恐怖を除いて大安心を獲得する大聖主として尊敬供養を捧ぐるのである、尊敬を拂ふと同時に大聖主の敎へたまひし敎勅を奉じて諸惡莫作と願ひ衆善奉行と勤め勵みて成佛得道に回向しなければならぬ、例へば明君賢主の治下に在り其の法令を遵守して順良の民たるが如きものである、啻に順民たるのみならず功を積み德を累ねて君主に生れ替るが如く、今生に於いて發心滿位の法成佛を成し未來に於いて行果滿位の人成佛を期待するのである

第二十六章　成佛の二類

第七十八節　發心滿位の成佛

▲『問ふ』人法成佛とは如何なることてありますか。

◉『答ふ』此れは古人の未だ明晰に辯ぜざる所なるが故に、世の佛敎を學ぶものが惑ひを生じ易い、余も亦多年此事に付煩悶して時の人師に質問討議する所ありしも終に其の要領を得ざりしが、一旦豁然として開悟せしより以來、之を筆にし之を口にして世に發表せしより十有餘年を經れども、未だ一人として抗論せしもの無ければ、擧世余の所見に服したるものと思ふ、故に今之を此に辯ずるは重說の嫌ひなきにあらざるも、說の極めて堅固不可動なるを覺ゆるのである。

其の余が曾て煩悶擬議せしは如何と云ふに、天台眞言禪幷に日蓮宗

にては卽身成佛、一生成佛、見性成佛、一超直入如來地と云つて未來成佛と云はず、釋尊の見明星悟道も、阿難の刹竿倒却悟道も、二祖慧可大師の斷臂得髓も、香嚴の擊竹悟道も、靈雲の見桃悟道も、乃至古來諸人師の豁然大悟及び梵網經の受戒入位位同大覺も皆是れ釋尊の見明星悟道と同等同一なりと唱へ且つ思うて濫りに生佛一如迷悟不二なりと云ふ。

然れども釋尊以外の者にして未だ一人の佛陀と稱するものはない、馬鳴龍樹の大賢も釋尊を祖述せられ、達磨天台の大智も釋尊の弟子、とし法孫として其の敎旨佛心を傳通せられたまでのこと、何れの處が同等同一であらうか、卽身成佛を唱ふる弘法日蓮も且く佛說を傳通せられたまでのこと、況や末代の素凡夫が、俄に佛戒を受けたればとて、大覺の世尊と同じかるべき道理があらうぞ。

然るに古來獨り面山禪師のみありて發心滿位、行果滿位の二位を分別し梵網經の謂ゆる受戒入位は發心滿位の初住(圓敎)に過ぎずして行果滿位にあらずと判斷し置かれた、この發心滿位は懺悔受戒して嗚呼有難やの一念心が驀然として佛心に通達するのである、此の通達佛心が位同大覺である、之を入我我入とも云ふ、卽ち衆生心が佛心の中に入り、佛心が衆生心の中に入るのであるから生佛一如二面裂破と云ふことにもなる、例へば君の心が臣の心に入り、臣の心が君の心に入れは君臣道合上下一心と云ふことになる樣なもの、又父子に於けるも師弟に於けるも、朋友に於けるも自他に於けるも皆其通り、夫婦に於けるも其通り、親々密々なる所が卽ち君臣父子夫婦師弟自他生佛の通達無礙なる大道である。

○龍樹菩薩の○菩提心論に「若シ人佛慧ヲ求メ、菩提心ニ通達スレバ父母所生ノ身、速ニ大覺位ヲ證ス」とある、是語に依つて眞言宗に於いては卽身成佛の義を唱ふるのである、成る程、佛の智慧を求めるときは衆生の心が佛智慧の中に入る、又自未得度先度他の慈悲心に通達すれば、其心が慈悲と智慧とに同化するが故に、父母所生の肉

發心滿位の成佛
行果滿位の成佛

眞言の成佛義

身に於いて佛の大覺位を證得する道理に當る。

又身に印像を結び、口に眞言を誦し意に佛を念ずれば三密相應するが故に此身此儘大日如來の光明裏に包まるゝに依り、卽身成佛の義を決定することが出來る、然れとも此れは是れ發心滿位の因佛にして行果滿位の果佛とは天地雲泥の相違がある。

○華嚴經に「初發心時、便成正覺」と說かせられてある、一寸見れは多劫の修行を假らず、初發心時、一生の卽座に卽身成佛が出來る樣に思はるれども、此れは因中說果の言葉であることを知らなければならぬ、誤解の者があつてはならぬとて○天台の四敎儀に此義を辯解してある。

曰く「初發心トハ初住ノ名也、便成正覺トハ八相ノ佛ヲ成ズルナリ是レ分證ノ果ニシテ卽チ此敎(圓敎成佛)ノ眞因ナリ、妙覺ヲ成ズト謂フハ謬リモ甚シ矣、若シ是クノ如クナラバ二住已去ノ諸位ハ徒ラニ施スナラン」云々

因中說果

此に初發心と云ふは天台四敎の中圓敎に十住の位がある其の初住に當る、又別敎の中では十地の初地に當る、初地を歡喜地と云ふ、此の初住と云ひ初地と云ふは如何なる境界であるかと云ふに、這は已に三界の見思惑を斷じ盡したるのみならず、塵沙惑までも斷じ盡し三百由旬は疾くに通り過ぎ四百由旬も行き越て、根本無明の一部分を斷じ、一分の三德を(法身般若解脫)證し、中觀現前して佛知見を開發し、一切種智を成就して五百由旬を通過し、實所に到り初めて實報無障碍土に居し、念不退に住すると云ふのが、天台大師の解釋である、龍女が須臾に成佛したと云ふのも、聲聞緣覺が當來作佛の記莂を受けたと云ふのも、皆此位に於ける成佛の相である。

その此處に到るを淨土門に於いては入正定聚不退轉地と云ひ、聖道門に於いては卽身成佛、又は見性成佛と云ふ、馬鳴大士が○大乘起信論の目的眞髓とせられた「修行信心分」の中に「是ノ中未ダ正定聚ニ入ラザル衆生ニ依ルガ故ニ修行信心分ヲ說ク」とて四信五行を明かされ

龍女成佛の相

淨土門の入正定聚
聖道門の卽身成佛

止觀俱行の所に於いて廣く定慧圓明の眞如三昧を諭明せられ、又念佛三昧を附加せられたのも、皆是れ正定聚不退轉の位に入ら令めんが爲めである。

○迦葉菩薩の偈に「發心ト畢竟ト二ツナカラ無別ナリ、是クノ如キノ二心先心難シ、自未ダ得度セザルニ先ヅ他ヲ度ス、是故ニ我レ初發心ヲ禮ス、初發已ニ天人師爲リ、聲聞及ビ緣覺ニ勝出ス、是クノ如キノ發心三界ヲ過グ、是故ニ最無上ト名クルコトヲ得」とある、此の初發心と云ふ言詞は如何にも低いやうに聞ゆれど此等は凡夫二乘の發心ではなく、圓敎の位に於ける菩薩の發心であるから、三界に超過して天上人間の師範となる大菩薩の發心である。

此の發心と云ふは前に辯じた圓敎の初發心住にて別敎の初歡喜地である、畢竟とは妙覺果滿の佛位である、先心難しと云ふは此の歡喜地の正定聚に入ることは容易ならぬからのこと、此位に入るを以て心事了畢と云ひ、安心立命と云ふのである、開佛知見と云ふのも、

發心滿位の相

見性成佛の相

見性悟道と云ふのも、入如來種性と云ふのも此事である、之を法成佛と云ひ、發心滿位とも云ふ、彼の如來の如く妙覺果滿の佛位に入るを行果滿位の人成佛と云ふ、此の人位と法位とに就いて道元禪師は坊火と螢火との相違があるぞと仰せられた。

法成佛の論

學道用心集の中には斯樣な事が申してある。

然るにも拘はらず○夫レ釋雄調御、菩提樹下ニ坐シテ明星ヲ見ルコトヲ得、忽然トシテ頓ニ無上乘ノ道ヲ悟リタマヘリ、其ノ悟リタマフ所ノ道ハ聲聞緣覺等ノ能ク及ブ所ニ非ズ、佛能ク自カラ悟リタマヒ、佛、佛ニ傳ヘタマウテ今ニ斷絕セズ、其ノ悟リヲ得ル者、豈佛ニ非ランヤ云々

と此祖語を正面から詠むれば大聖世尊も、歷代祖師も同等無二なるが如くに考へられる。

○又正法眼藏嗣書の卷に云く

佛佛カナラス佛佛ニ嗣法シ祖祖カナラズ祖祖ニ嗣法スコレ證契ナ

リコレ單傳ナリ、コノユエニ無上菩提ナリ、佛ニアラザレバ佛ヲ印證スルコトアタハズ、佛ノ印證ヲエサレハ佛トナルコトナシ：……佛道ハタタ佛佛ノ究盡ニシテ佛佛ニアラサル時節アラス……曹溪アルトキ衆ニ示シテイハク、七佛ヨリ慧能ニイタルニ四十佛アリ、慧能ヨリ七佛ニイタルニ四十祖アリ、コノ道理アキラカニ佛祖正嗣ノ宗旨ナリ……六祖ヨリ向上シテ七佛ニイタレハ四十祖ノ佛嗣アリ、七佛ヨリ向下ニテ六祖ニイタルニ四十佛ノ佛嗣ナルベシ佛道祖道カクノ如シ

此文も亦表面より詠むるに、佛と云ふも祖と云ふも何等の差別なく釋迦牟尼佛も歴代祖師も毫髪の差違あるを認識することが出來ぬ。今これを察するに斯くの如きことは法本位より拈提せられたものにて、歴代祖師は法成佛の位を得た方々であることを知らねばならぬ故に凡夫をして正傳せしむるも凡夫の法に墮せず、聲聞をして正傳せしむるも聲聞の法に墮せずとも云はれた、凡夫二乘は人にして正傳するものは如來の涅槃妙心である。

然るに永祖は又人本位より左の如くに拈提せられてある。

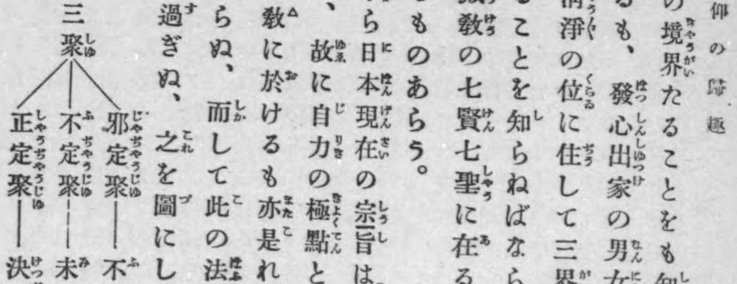
○正法眼藏發菩提心の卷に云く

○禪苑清規一百二十問に云ク、發悟菩提心スルヤ否ヤ、アキラカニシルベシ佛祖ノ學道カナラズ菩提心ヲ發悟スルヲサキトセリトイフコト、コレスナハチ佛祖ノ常法ナリ、發悟ストイフハ曉了ナク、コレ大覺ニハアラズ、タトヒ十地ヲ頓證セルモナホ是レ菩薩ナリ、西天二十八祖唐土六祖等オヨビ諸大祖師ハコレ菩薩ナリ、佛ニアラズ聲聞辟支等ニアラズ、今ノ世ニアル參學ノ輩菩薩ナリ聲聞ニ非ズトイフコト、アキラメ知レル輩一人モナシ、タタミタリニ衲僧衲子ト自稱シテ、ソノ眞實ヲ知ラザルニヨリテミダリガハシクセリ、アハレムベシ澆季祖道廢セルコトヲ

此れに依りて歴代祖師及び諸大高僧等は佛に非ずして初住以上の菩薩に在しますことを知らねばならぬ、又見性悟道の人々は皆是れ大

菩薩の境界たることをも知らねばならぬ、未だ省發悟道の地位にあらざるも、發心出家の男女、見佛聞法の信者は、皆是れ十信の初信六根清淨の位に住して三界見思の煩惱を伏斷しつゝある初心の菩薩であることを知らねばならぬ、或は別教の十信位に在る人もあらうし、藏教の七賢七聖に在る人もあらうし、或は二乘及び人天の位に住するものあらう。

去り乍ら日本現在の宗旨は悉く是れ大乘圓頓の一乘實教ならざるものはない、故に自力の極點と他力の極點とが一致するのである、今我が法王教に於けるも亦是れ入正定聚にして因位の法成佛を理想するに外ならぬ、而して此の法門に攝入する所の衆生は邪定不定正定の三聚に過ぎぬ、之を圖にして示さば左の通り。



此中邪定聚の人は疑ひが深いから如來の根本義より說かねばならず不定聚の人は安心が一定せぬから、本論の如く大いに理由を說明して實行せしめなくてはならず、罪障深き人の爲めには業障懺悔の法を修せしめなくてはならず、或は自力根性の人には止觀を修習せしむるもよし、或は、自力修行の出來ぬ人には、南無釋迦牟尼佛と心念口稱せしめなくてはならぬ、故に我等は人成佛を未來永遠に希望して法成佛を今生の未だ過ぎざる間に急ぎて成就しなくてはならぬ之を要するに法成佛といふは因位の小佛にして、人成佛といふは果位の大佛である、小佛の中には五十一位の階級がある、謂ゆる十信、十住、十行、十回向、十地、等覺である、大佛は即ち妙覺位にして此娑婆界に於いては釋迦牟尼佛である、佛弟子佛信徒の希望する所のものは大佛の位に在れども其は一生や二生の事にあらさるがゆゑ、因位の小佛たることを成就するにあれども、根機の利鈍に依りて成佛の地位が定まるものと思はなくてはならぬ。

第二十七章　成佛往生人の歸着如何

▲問ふ」御高説に依り、釋尊以來其の教化を蒙りたるもの幾百千萬なるを知らずと雖も、未だ一個として行果滿の人成佛を遂げしものあるを聞かず、其の得道得法し安心立命せしは皆之れ發心滿位、若くは夫れ以上の人、卽ち法成佛の人なることを了知致しました、其れと同時に行果滿の人成佛を遂ぐることの容易ならぬことをも了知致しました、爾うして見ると釋尊以來の佛弟子、佛信者は豁然大悟と云ふと雖も、見性成佛、卽身成佛、頓證菩提、頓成佛果、卽心是佛、卽得往生と言ふと雖も、皆是れ發心以後の因佛にして果佛にあらざることをも併せて了知致しました、而して此等の因佛には幾多の階級(譬へは小學より大學を卒業するまでに多くの階級あるが如く)があらうと思はれます、中には又十方淨土に往生せし者も多かるべく、彌勒の淨土や、藥師の淨土へ往生せし者は有りや無しや、西方淨土に往生せし者は頗る多からむと思はれますけれども、果して如何なるものなりや、還り來りて其の消息を通告せしことも無ければ之を知ることが出來ませぬ、若し此の娑婆界、換語して言へば此の地球上此の宇宙間に個性的の魂魄數に一定の量があるものとすれば、彼の天國に往生したり、西方極樂土に往生すればする程、數量の上に於いて減じなくてはならぬ筈なるに實際は然らず、年々歲々人數は增加する許り、此理を以て押すときは生天ぢやの、往生ぢやのと云ふことは、小供欺しの如き方便說に過ぎざるものゝ樣にも考へられます、若し然らずして依然六道に輪廻しつゝあるものとすれば、三界出離と云ふも、生死透脫と言ふも往生淨土と云ふも、只言說のみあつて實義なしと云はねばなりませぬ、從前は其んな事でも深く穿鑿せられずして濟んで來たものですけれど、人智が倍々發達して來た今日となりては一々理論と實際とが數理的に合はなければ決して承認

せぬことになりましたから、此等の事柄を確め置くは佛教徒たる者の一大急務であらうと思ひます、仍て更に御高説を拜聽致し度いものであります。

◉答ふ』此れは實に人生の一大問題たるのみならず、一般宗教界の大問題である、殊に佛教界の大々的問題なりと云はねばならぬ、併しながら今は敢て外教上の辯護を爲す必要を認めず、單に一般佛教界の責任問題として、將た法王釋尊の辯護士として廣く人類界の爲めに辯じなくてはならぬ、就いては項を分ちて之を辯じて見ることに致さう。

第七十九節　成佛往生人の位地

元來成佛と云へる熟語が精神上の事たるは無論なれど、之を解釋するには人生の根本問題に溯らねばならぬ、古來一元二元、三元九元二十五元、五位百法等の問題もあるが、今は其の煩雜に渉らず、渾沌たる衆生心中に覺不覺の二義あることを知らねばならぬ、謂ゆる覺とは覺知覺察覺了覺明覺照の義がある、之を眞如と云ふ、不覺は此の反對であるから無明である、之を眞如心無明心と名く、此の二元は常に和合して相離れぬゆゑに眞妄和合心とも阿賴耶識とも云ふ、此の和合心中の覺心が卽ち佛の種である、佛の字に深き意味はない、これは佛陀耶の略稱にて或は浮圖といへる文字を以て音を寫すこともある、然るを必ず佛の字に限るが如くにしたのは習慣である、その謂ゆる佛陀耶は覺者といへることにて、是れには自覺もあり、覺他もあり、自他二覺の窮滿なるもある。

○大智度論に云く「秦には智者ト言フ、過去未來現在ノ衆生非衆生ノ數有常無常等ノ一切諸法ヲ知ル、菩提樹下ニ了々トシテ覺知ス故ニ佛陀ト名ク」と此れは釋尊を標準として解釋せしもの、妙樂の記に曰く「此ニハ知者トモ覺者トモ云フ、迷ニ對シテ知ト名ケ、愚ニ對シテ覺ト說ク。

○佛地論に曰く、一切智、一切種智ヲ具シ、煩惱障及ビ所知障ヲ離レ、一切ノ法一切種ノ相ニ於イテ能ク自カラ開覺シ、亦能ク一切ノ有情ヲ開覺ス、睡夢ノ覺ルガ如ク、蓮華ノ開クルガ如シ故ニ名ケテ佛ト爲ス云々、此等は皆釋尊の大覺を標準として解釋したものであるけれども、未だ一人として釋尊と同等なる大覺を開いたものはない、彼の初地初住の菩薩は三日月ほどの眞如を覺し、乃至等覺の菩薩は十四日の月を見るが如く、妙覺の佛陀は十五夜の滿月輪を見るが如く眞如心の全分が顯はるゝと云ふのである、馬鳴龍樹の如きは七住以上八地の菩薩にて弘法大師の如きは三地の菩薩であらうと云ふ相場もある、故に古來各宗に於いて成佛を論ずるものは、前にも辯じた通り圓教の初住、別教の初歡喜地乃ち正定聚不退轉地を以て、見性成佛とし、卽身成佛、卽得往生、安心決定としたものである、之を法成佛の人とも、大往生の人とも名くるので、肉體の死亡した事ではない、最も往生の中に體失不體失往生と云ふこともある不體失往生は卽身成佛である、併しながら各宗とも此の因位一分の成佛得道に到る人は甚だ多からず、大抵は十信位にて住まる人が多いのである。

第八十節　成佛と往生との意義

本邦の俚言に幽靈の治まつたことを成佛と云ひ、死去せしことを往生と云ふ、啻に俚言ではなく僧侶自から位牌や塔婆の裏などに何月何日往生抔と書きをる、然れども元來斯かることは經律論釋中に無きことにて世人を誤まるの甚しきものと云はねばならぬ、成佛と云ひ、往生と云へるもの、共に肉體の事にあらず、迷ひを轉じて悟りを開き、妄を轉じて眞と成し、不覺を變じて覺と成し、凡を轉じて聖に入るは是れ卽ち成佛である、蓋し前項に辯じたるが如く正定聚不退轉地に入るの成佛は容易ならねども、○法華經中に「若し曠野ノ中ニ於イテ土ヲ積ミ佛廟ヲ成シ、乃至童子ノ戲レニ、沙ヲ聚メテ佛

塔ヲ爲ル、是クノ如キ等ハ皆已ニ佛道ヲ成ジタリキ、若シ人佛ノ爲ノ故ニ諸ノ形像ヲ建立シ、刻彫シテ衆相ヲ成セルモ皆已ニ佛道ヲ成ジタリキ(乃至)彩畫シテ佛像ノ百福莊嚴相ヲ作リ、自ラ作リ若ハ人ヲシテセシムルモ皆已ニ佛道ヲ成ジタリキ(乃至)若シ人散亂ノ心ニテ乃至一華ヲ以テ畫像ヲ供養セシモ、漸ク無數ノ佛ヲ見タテマツリキ、或ハ人アリテ禮拜シ、或ハ復但タ合掌シ、乃至一手ヲ擧ゲ、或ハ復小シ頭ヲ低レテ、此レヲ以テ像ヲ供養セシモ、漸ク無量ノ佛ニ見エ自ラ無上道ヲ成ジテ廣ク無數ノ衆ヲ度シ、無餘涅槃ニ入ルコト、薪盡キテ火ノ滅スルガ如クナリキ、若シ人散亂ノ心ニテ塔廟ノ中ニ入リ、一ビ南無佛ト稱セシモ皆已ニ佛道ヲ成ジタリキ」云々、是れに由て之を觀るに、小火も大火となるが如く、小因も大果を成じ、一念の隨喜稱名も悉く以て成佛得道の勝因となるので、一念清淨なれは一念の佛念々清淨なれば念々の佛なるが故に小佛より中佛と成り、乃至生々を盡して大佛と成るものなることを知らぬばならぬ○楞嚴

一念清淨なれば一念の佛念々清淨なれば念々の佛

經に云く「理ハ頓ニ悟ルト雖モ事ハ漸クニ消スベシ」と、理は眞如の妙理にして事は無明の事相である、頓漸成佛の理は此義に依ることを知らねばならぬ。

さて往生の意義に就いても正念往生、狂亂往生、無記往生、意念往生の如き四種往生の義が○安心決定鈔などに列ねてあるが、此等は全く肉體臨終時の事を形容し體失往生の安心を示したものなれど、淨土三部經などに見えてある、心不顚倒卽得往生、如一念頃卽得往生、願生彼國卽得往生、卽隨彼佛往生其國、卽隨化佛往生其國、住不退轉、乃至一念、念於彼佛、以至誠心、願生其國、此人臨終、夢見彼佛、亦得往生等の文字あれども皆肉體の事にはあらで、精神上の事、卽ち臨終と云ふも、世壽の事ではなく、元品無明の命根斷絕して彼の眞如界に生れ、不生不滅の無量壽佛に相見するのであるから、不退轉に住すると說かせられたのぢやと信ずるのである、さすれば生住異滅の精神界より無生無滅不增不減の精神界に往生するの

生滅界より不生滅界へ往生するの義

てある、これを大乘起信論には「生滅門より眞如門に入る」と論じられてある、此の一心界中の往來なることを知らずして、彼國、其國、彼土などとあるを速了して七寶莊嚴の黄金土とも云ふべき物質世界でもある樣に夢想する者あるが如きは眞に片腹痛きことである。

第八十一節　成佛往生人の生活

已に見性成佛、若くは卽身成佛と往生極樂との異名同體なることを辯明せしに依り、其等の人の死して後如何なる處に行きしか、將た何れの處に在るかを論辯しなければならぬ、然るに此事たるや、宿命天眼を得たる聖者にあらざれば明知することが出來ぬけれども、或る一類の人達の夢想しをるが如く、此の娑婆界を懸け離れて他方世界に飛去り、父母陰陽の關係なくして、七寶蓮華の上に化生し、晝夜六時に如來の說法を聽聞するが如き事ではあるまいと思ふ、或は云ふ、往相回向とは死すると同時に來迎の彌陀に誘はれ、西方の

極樂世界に化生して永遠の快樂を受け菩薩の修行を爲し、而して後還來穢土として再び此の娑婆界に生れ來り衆生を濟度するのであるぞと、是れも亦甚だ迂回の夢想なりと云はねばならぬ、凡そ成佛往生なるものが精神界の往來なるからには、聖道門の敎に依りて往く所の淨土も、淨土門の敎に依りて往く所の極樂も同一のものたらねばならぬ、是れ唯り佛敎徒の往くべき所が同一たるのみならず、神道者の所期する高天原も、基敎徒等の所期する天國なるものも共に是れ同一精神界の樂處たらねばならぬ、其名異なるが爲めに其の往く先も異なると思ふは誤解の甚しきもの、同一人類の精神が歸著する所は異名同一の樂界たらねばならぬ。

○雨霰、雪や氷と隔つれど、落れば同じ谷川の水況や同一釋尊の導きたまひし成佛往生人の方處に於いて異種異相の眞如界があらう筈もなし、淨土門に於いて安養極樂世界と說けるも、聖道門に於いて常寂光土、又は密嚴世界、自性法界宮と說けるも、皆是れ衆生心地

○妙宗四種の淨土

の眞如界である、一の眞如界なれども衆生の根機が別なるにより淨土の見方が違ふ故に名稱の異なる邊もある○妙宗鈔には四種の淨土を明してある。

△一には凡聖同居土――娑婆世界の如き凡夫も居れば聖人も居る。

△二には方便有餘土――此れは聲聞緣覺の見たる所、有餘とは三界見思の惑煩惱は斷じたれども、未だ塵沙無明の惑煩惱を餘す故に有餘と名けたもの○法華經には三百由旬の化城と申してある。

△三には實報無障碍土――略するときは單に報土とも云ふ、天台の敎判からいへば卽ち別敎の十地圓敎の十住十行十回向より乃至等覺諸菩薩所見の淨土にて、諸宗に於いて報土往生と唱ふるものは卽ち此義である、謂ゆる正定聚不退轉の位とは卽ちこの實報土に往生せし人のことにて○法華經には五百由旬の寶所と申してある。

△四には常寂光土――此れは法性の理土にて、常は法身の義、寂は解脫の義、光は般若の義、常は不變を義と爲し、寂は離障を義と爲し、光は覺照を義と爲すので、妙覺果滿の如來のみ獨り居したまふ所の淨土である、已に三德所見の淨土なるが故に物質界にあらざることは明白である、唯佛の所居なれども、發心滿位の菩薩は心を此の寂光土に安住することが出來るのである、又

○四種の淨土
一には法性土
二には實報土
三には事淨土
四には化淨土

○法華論に云く、煩惱無キ衆生ノ住處ヲ名ケテ淨土ト爲ス、淨土不同ニシテ其ノ四種有リ○一ニハ法性土、眞如ヲ以テ體ト爲ス云々○二ニハ實報土、攝論ニ依ルニ云ク、二空(我空法空)ヲ以テ門ト爲シ、三慧(聞思修)ヲ出入ノ路ト爲シ、奢摩他毗鉢舍耶(止觀)ヲ乘ト爲シ、根本無分別智ヲ以テ用ト爲ス云々○三ニハ事淨土、上妙ノ七寶五塵(色聲香味觸)ヲ其土ノ相ト爲ス○攝論ニ云ク佛、周徧ノ光明七寶ノ處也云々○四ニハ化淨土、故ニ涅槃經ニ云ク、佛、謂ク佛、所變ノ七寶五塵ヲ化土ノ體ト爲ス、ルコト無シ、乃至猶西方無量壽佛ノ極樂世界ノ如シ云々○十地經ニ云ク、諸ノ衆生ノ心ノ見ント樂フ所ニ隨ッテ爲ニ示現スルガ故ニト」

○西方極樂は化淨土に屬す此は是れ如來神力の所變有るが如くなれども其實有るにあらず

第一は淨土の本體
第二は淨土の德用
第三は淨土の現相
第四は化現の淨土

此等ハ皆變化の淨土に約したもの、卽ち佛世尊の神力に依りて現はるるので、神力を攝めたまへば忽然として見えぬ樣になる。

◎以上の四種淨土の相は○法苑珠林の著者釋の道世和尙が敬佛篇中に擧げられた中の大要である。

此中の第一は淨土の本體、第二は修行に由て顯はれたる淨土の德用。第三は佛智の光明に照さるゝ淨土の現相、第四は如來の神力に依りて化現せられたるものにて此れは幻覺の所見である。西方極樂の如きも、實報土ではなく如來化現の淨土である。

○此の化土の中に○維摩經中の佛國品を引かれてある、今少しく其文を記して見やう。

爾時ニ舍利弗、佛ノ威神ヲ承ケテ是ノ念ヲ作サク、若シ菩薩、心淨ケレバ則チ佛土淨シトナラバ、我ガ世尊本ト菩薩タリシ時、意豈不淨ニシテ而モ是ノ佛土不淨ナルコト此ノ如クナランヤト、佛其念ヲ知シメシ卽チ之レニ告テ言ハク意ニ於イテ云何ン、日月豈不淨ナランヤ、而モ盲者ハ見ズ、對ヘテ曰ク、不也世尊、是レ盲者ノ咎ニシテ日月ノ咎ニハ非ズ、舍利弗、衆生罪アルガ故ニ如來佛國ノ嚴淨ナルヲ見ズ、如來ノ咎ニ非ズ、舍利弗、我ガ此土淨ケレドモ而モ汝ハ見ズ。

爾時ニ螺髻梵王、舍利弗ニ語ラク是念ヲ作スコト勿レ、此佛土ヲ謂テ以テ不淨ナリト、所以者何トナレバ、我レ釋迦牟尼佛ノ土ヲ見ルニ淸淨ナルコト譬ヘバ自在天宮ノ如シ、舍利弗ノ言ク我レ此土ヲ見ルニ丘陵坑坎荊棘沙礫、土石諸山穢惡充滿セリト、螺髻梵王曰ク、仁者心ニ高下有リテ佛慧ニ依ラザルガ故ニ此土ヲ見テ不淨ト爲スノミ、舍利弗、菩薩ハ一切衆生ニ於テ悉ク皆平等ナリ、深心淸淨ニシテ佛智慧ニ依レバ則チ能ク此佛土ノ淸淨ナルヲ見ン

ト。

是ニ於イテ、佛、足ノ指ヲ以テ地ヲ按ジ玉ヘバ、卽時ニ三千大千世界、若干百千ノ珍寶嚴飾スルコト譬ヘバ寶莊嚴佛ノ無量ノ功德

寶莊嚴土ノ如シ、一切ノ大衆未曾有ナリト歎ズ、而モ皆自ラ寶蓮華ニ坐スルヲ見ル」佛、舍利弗ニ告ゲ玉ハク汝且ク是ノ佛土ノ嚴淨ナルヲ觀ルヤ、舍利弗言ク、唯然リ、世尊本ト見ザル所、本ト聞カザル所ナリ、今佛ノ國土嚴淨悉ク現ズ佛舍利弗ニ語ラク、我ガ佛國土常ニ淨キコト此ノ如シ、斯ノ下劣ノ人ヲ度セント欲スルガ爲ノ故ニ是ノ衆惡不淨ノ土ヲ示ス耳……佛、神足ヲ攝メ玉ヘバ是ニ於イテ世界還タ復スルコト故ノ如シ云々

佛在世の智慧第一舍利弗尊者ですら淨土を心外に求め、此の世界を以て不淨土とし、淨土は衆生の心內に求むるものなることを知られなんだ位であるから、今時の凡夫が淨土を西方の遠きに求め、去此不遠の脚跟下に在るものなる事に氣の附かぬは無理ならぬ事である舍利弗が飽くまで淨土を客觀境に求むるのみならず、其時の聽衆が皆舍利弗一類の者のみであつたから、唯心の淨土を說き聞かせた所で、迚も安心することが出來ぬと云ふことを看取せられしものと見え、彼等を且く幻覺に入れ、難遭の想ひに住せしめられたので、全く物無きに物を拵へ、彼等が豫想しをるが如きバノラマ界を變現化生せられたのである、淺智の者は之を見て眞物かと喜ぶ、是れも亦一種の善巧方便である。

淨土に二種の綱要あり一は報土二は化土

○道世和尙又述して云く

上來、土ニ四種有ルコトヲ明スト雖モ、然モ綱要ハ二有リ、一ニハ報土、二ニハ化土、此二卽チ理事ノ二土ヲ攝ス云々

○維摩經に謂ゆる「直心是レ菩薩ノ淨土ナリ……深心是レ菩薩ノ淨土ナリ……大乘心是レ菩薩ノ淨土ナリ乃至是ノ故ニ寶積若シ菩薩淨土ヲ得ント欲セハ當ニ其心ヲ淨クスベシ其心ノ淨キニ隨ツテ則チ佛土淨シ」と云ふが如きは卽ち其の報土を示したるもの、而して上に擧したる神足卽現の淨土の如きは化土である。

○淨土論に云く「土ニ五種有リ、一ニハ純淨ノ土、唯佛果ニ在リ、二ニハ淨穢ノ土、謂ク淨多ク穢少ナシ卽チ八地已上ナリ、三ニハ淨穢

齊等ノ土、謂ク初地ヨリ乃至七地ナリ、四ニハ穢淨ノ土、謂ク穢多ク淨少シ、卽チ地前ノ性地ナリ、五ニハ雜穢ノ土、謂ク未入性地ナリ。

第五ノ人ハ後ノ一ヲ見テ前ノ四ヲ見ズ、第四ノ人ハ後ノ二ヲ見テ前ノ三ヲ見ズ、第三ノ人ハ後ノ三ヲ見テ前ノ二ヲ見ズ、第二ノ人ハ後ノ四ヲ見テ前ノ一ヲ見ズ、第一ノ佛ハ上下ノ五土悉ク知リ悉ク見タマウ也」

此土入證の聖道門
彼土得證の淨土門

此等は皆其の報土を示したもの、謂ゆる修して得たる實報土である。而して彼の三學六度、三十七品の菩提分法、四攝四無量、四恩十善念佛坐禪讀經禮拜、懺悔受戒等の如きは皆成佛の正因又は助因にして、又淨土の正因助因たる行業なることを知らねばならぬ、斯く論ずるときは此土入證の聖道門、彼土得證の淨土門と云ふが如き差別を立つるに及ばず、一切の萬善萬行は皆悉く成佛得道の菩提涅槃と往生淨土の正因淨業に回向するものなりと云ねばならぬ、故に淨土といへる一の社會ありて佛菩薩のみ集會せらるゝと思ふは物無きに物を見せられし如來の方便敎を眞面目になつて信ずる族に過ぎぬ、眞實報土に非ずと雖も、亦惡心を生ぜずして善心を生ずるが故にそれも亦往生の正因となる、下根の衆生には結句此の變化淨土の觀念が其性に適するかも知れぬ、若し然らざるものは他力に依らず自の修力に由りて機根相應の佛土を現じ淨土に遊化しなければならぬ。以上の淨土は宿生の薰力に由りて今生に得らるゝもあり、今生の修力に依りて今生に得らるゝのもあり、今生の修力に依りて來生來々生、乃至生々世々を經歷して後に成佛得道するのもある。從來淨土門に於いては往相還相と說き、聖道門に於いては向上向下又は上轉下轉、向去却來と云ふ、その往相といふは正定聚不退位まてを程度とし、それより穢土の三界に還來して無邊の衆生界を度せんとするのである、又聖道門に於いても初歡喜地の見性成佛、卽身成佛までを大事了畢の程度と定め、之を向上向去上轉の場處とし、

正定聚不退位を往相の程度と爲す

初歡喜地を以て見性成佛卽身成佛と爲す

夫れより三界六道に却來下轉して無量の衆生を度せんとするので、彼の自未得度先度他といふも、這般の見處を具した人の菩薩行にして、淨土門と無二無別である。

法位成佛以後の行程

○鴻山大圓禪師云く、斯ノ如ク行止實ニシテ枉ケテ法服ヲ被セズ、亦乃チ四恩ヲ酬報シ、三有ヲ拔濟シ、生生若シ能ク退カザレバ、佛階決定シテ期ス可シ、三界ニ往來スルノ賓、出沒シテ他ノ爲メニ則ヲ作ス云々

三界六趣の中に往來して止まず

○承陽大師曰く「若シ菩提心ヲ發シテ後、六趣四生ニ輪轉スト雖モ、ソノ輪轉ノ因緣ミナ菩提ノ行願トナルナリ」と、未だ佛緣に逢ふと雖も不退轉地に入らざるものは、佛の加被力の爲めの故に三惡道に墮せず、人間天上の間に往來し、その都度宿植善根の力に牽かれて佛緣に會ひつゝ向上發展の道に向ひ、功德を修しつゝあるものと云はねばならぬ、又正定聚に入りぬる菩薩は已に退失の憂ひなきがゆゑ或は六趣四生に輪轉し、三界二十五有に出沒して無量の衆生界を濟度しつゝあるものと云はねばならぬ。

衆生界即ち佛界
佛界即ち衆生界

若し如來の出現が無かつたならば、只三界六趣の苦海に出頭沒頭するまでのこと、如來出現したまひしに由り、四聖解脫の樂界が、此の苦界の中に活現したのである、されば拔苦與樂と說き、轉迷開悟離苦得樂、出離三界、厭離穢土と說くと雖も、此娑婆、此天地、此宇宙間の外に逸出するのではなく、依然として此中に往來しつゝある。

迷者と悟者との所見同じからず

○慈雲尊者云く「衆生界ノ外、別ニ佛界アルニ非ズ、佛界ノ外ニ衆生界アルニアラズ、佛界ト衆生界ト元來一異ヲ云フベカラズ、迷フ者ハ諸佛無上正覺ノ中ニ居テ三毒ヲ起ス、此三毒衆生ヲ惱亂スルコト、屠者ノ鮮肉ヲ燒煮スルガ如シ、諸佛ハ常ニ衆生三毒ノ中ニ在テ無漏大定智悲ニ安住ス、此無漏大定智悲、衆生界ニ應現シテ、月ノ萬水ニ影ヲウツスガ如クジヤ」、此の世界、迷者より見れば凡聖同居土、悟者より見れば實報土、若くは常寂光土の佛世界とも見ゆる、一佛

成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛、有情非情同時成道、此の佛界は衆生界中に在りて他より來るにあらざるがゆゑ不增である彼の出離三界、厭離穢土、往生彼國も前辯の如く、此の衆生界、此の娑婆界を去るにあらざるがゆゑ不滅である、故に佛滅後、成道往生の人も依然此の宇宙間に輪轉出沒して漸次向上發展の大道に活歩する事となり闇中に明を得て無限の快樂を獲得する事となりたるは全く如來大悲の賜なりと信受するのである。

衆生界も不增不滅
佛界も亦不增不滅

此の天地は本來不增不滅である、佛は之を七大の所成と說かせられた、七大とは地水火風空根識である、大とは周徧の義なりとす、此の七大は法界に周徧して不增不滅である、一切衆生も亦七大の所成である、一切の人類一個として七大の所成ならざるものはない、此の七大は識大の活力に依りて種々無量に變化するものなれども、其の實質に至りては毫末も增減はない、悟りても迷うても此の世界外に飛去るが如きものではない。

第二十八章　佛生前後の人生

第八十二節　佛生以後の人生觀

▲問『如來出現以前と雖も人生は依然として人生、以後と雖も左のみ變りはなく、未だ佛敎の行はれざる國土の人類と雖も左のみ變つたこともなく、却つて高尙の生活を爲しをる所の人類も夥多あるを見受けますが、畢竟佛前の人類と佛後の人類と何程の差違があるものでありませうか、殊に佛敎が此の人生に及ぼしたる効果は如何にして之を辨別致しますか

◉答『宇宙の創造、人類の發生といへる根本原理に就いては諸學諸敎、各々其說を異にするを以て、今は其の根本太原に溯らず、近々二三千年前後に於ける解釋であるが、佛敎の世に現はるゝまでは三界六道二十五有の世間說ですら明瞭には解らなかつたのである、

印度の如き、支那の如き、人天鬼畜の四趣は朦朧と知り居たるが如くなれど、其れ以外の事は漠然として知ることは出來なかつたのである、日本の如きは尙ほ其れよりも幼稚であつた、今日歐米諸國に開けをる諸教諸學の說を以てしても、天界鬼界の如きは印度支那の學說よりも尙ほ幼稚の感がある、彼等が僅に知れる所の範圍は人畜の二界に過ぎぬ、鬼界の如き、天界の如きは今尙研究の途中に在る然るに如來は三明六通を以て、三界六道四生十二類乃至二十五有の世界に於ける衆生の住處、業因、身量、名稱壽命に至るまで明鏡に懸けて見るが如く明了に說かせられた、而して如來出現の後は更に四界が增加したのである、其は左表にて之を知るが宜い

佛生以前は六凡の迷界のみ佛生以後は四聖界を增加す

此四聖界は人類一界に在り

○四聖界

佛陀―菩薩　緣覺　聲聞

○六凡界

○地獄　餓鬼　畜生　修羅　人間―四洲―欲界　○天上　色界　無色界

四惡趣

三界

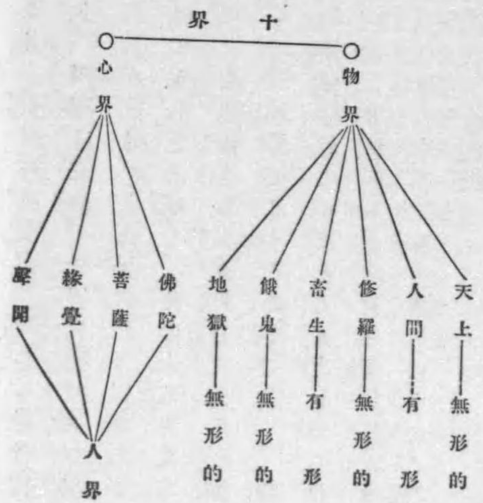
此れは且く概略に過ぎぬ、詳しく書けば四惡趣の中にも多趣の名稱があり、四洲は無論、欲界に攝する天界にも六天があり、色界天にも十八天があり、無色界天にも四種あるけれども、今は細論の必要を認めぬから之を省く、此の六凡界は天地宇宙の自然法にして、佛世尊の出現以前より法爾天有である、而して四聖界なるものは如來出現の後、天界でなく四惡趣でなく、特に我が此の人界の上に此の階級を設けられたのであることを知らねばならぬ、是くの如く十界あるが如くなれども、之を二種に區分すれば只天界と地界とのみである、二界の中四聖界は地界の中に人間一界に攝するので物質界として見るときは六道のみである。

六凡は物質界
四聖は精神界

四聖界とて別に物質界があるのではなく、只是れ人界に於ける精神上の無形的階級に過ぎぬ、然らば卽ち三界出離と云ふと雖も、此れは是れ精神界の問題にして、物質界に關係はない、然るに世の多くの佛者は、此の故實を辨知せざるが故に、或は極樂世界が、此の天

指方立相但着有相の教義は佛陀假設の方便なるのみ

地、此の人界の外に存するかの如くに考へ、指方立相、但着有相の教義を以て、別世界あるが如くに執著してをる、故に世人をして愈々疑ひを生ぜしむるのである、更に惑ひを生ぜざらむが爲め左表の如くに圖出して見やう



此の物界六道の中、修羅は人天の二界中に攝するものとして之を省き五道とすることもある

更に之を省略すれば左の如し

而して此の有情界を何故に三界と名くるかと云ふに是れ亦心界より割出したる解釋に過ぎぬ

而して何故に之を六道に分ちたるかと云ふに只三毒の厚薄である

○毗曇論に曰く「趣トハ到ニ名ク、亦ハ名ケテ道ト爲ス、謂ク彼ノ善惡ノ業因ノ道、能ク其ノ生趣ノ處ニ運到ス、故ニ名ケテ趣ト爲ス、亦ハ造ル所ノ業ニ依テ彼ノ生處ニ趣クガ故ニ名ケテ趣ト爲ス可シ、又趣トハ歸向ノ義ナリ、謂ク造ル所ノ業能ク天乃至地獄ニ歸向スル也」云々

謂ゆる善惡の業因とは三毒の厚薄に異ならぬ、故に善中にも惡があり、惡中にも善がある、此の善惡は相待なるが故に善と云ふと雖も純善に非ず、惡と云ふと雖も純惡に非ざるが故に、時として天界に生るゝと雖も其の福因が盡きれば下りて無間獄に墮するを免かれぬ惡業の爲めの故に墮して無間獄に入ると雖も、其の惡因が盡きれば亦漸々に餓鬼畜生修羅を經歷して人天に上生ずることもある、之を迷ひの輪廻と云ふ、譬へば汲井輪の始めも無く終りが無きが如く、一切の有情は生々死々して止まぬのが宇宙自然の法則である

古者云く、身は生老病死して復た生じ、界は成住壞空空にして復た成ずと、又云く、三界擾々たり、六道茫々たり、往還已まず、苦を受くること未だ央ならず、報繩敦逼し、楚痛分張す、寔に惡業に由て、此の危亡を感ず、焉ぞ溺水を知らむ、詎ぞ舟航を識らむ」云々

○法苑珠林三界篇に曰く「問ウテ曰ク六趣ノ報ハ何ノ業ヲ造リテ生ズルヤ、答ヘテ曰ク、智度論ノ說ニ依ルニ六趣ノ業ハ善惡ニ過ギズ、

各〻三品有リ、上ハ天ニ生ジ、中ハ人ニ生ジ下ハ四惡趣ニ生ズ」云々

○又曰く「夫レ三界位ヲ定メ、六道區ヲ分ツ、麁妙容ヲ異ニシ、苦樂跡ヲ殊ニス、其ノ原始ヲ觀ルニ色心ヲ離レズ、其ノ會歸ヲ檢スルニ生滅ニ非ザルハ莫シ、生滅輪廻、是ヲ無常ト曰フ、色心ノ影幻、斯ヲ苦本ト謂フ、涅槃ニハ之ヲ大河ニ喩ヘ、法華ニハ之ヲ火宅ニ方フ（中略）尋ヌルニ世界ノ立體ハ四大ノ所成ナリ、業和シ緣合シテ作ル、數盈チ災起リテ復々滅ニ歸ス（中略）夫レ虛空ハ不有ナルガ故ニ厥量無邊ナリ、世界ハ無窮ナルガ故ニ其狀一ナラズ、是ニ於テ大千ハ法王ノ所統ト爲リ、小千ハ梵王ノ所領ト爲リ、須彌ハ帝釋ノ所居ト爲リ鐵圍ハ蕃牆ノ城ト爲リ大海ハ八維ノ浸ト爲リ、日月ハ四方ノ燭ト爲リ、總總タル群生、茲ニ於テ是レ宅シ、瑣瑣タル含識塗炭ヲ思フコト莫シ、沈俗ニシテ觀ルトキハ迂誕ノ奢言ナリ、大道ニシテ察スルトキハ乃チ掌握ノ近事ナル耳」と

夫れ斯くの如く、虛空無邊なるが故に世界無邊なり、世界無邊なるが故に衆生無邊なり、衆生無邊なるが故に業果無邊なり、業果無邊なるが故に衆生と世界と業果とが相續輪廻して無始無終である、此の宇宙を外觀すれば只是れ色心二法の所成である此の天地を內觀すれば善惡苦樂の業相である、業と云ふは卽ち一切有情の身口意業である、天には天業、人には人業、鬼には鬼業、畜には畜業ありて各〻其の衣食住を異にしてをる、社會の大なるも業力の所成、天地の大なるも亦業力の所變である、神の關かる所に非ず、佛の作す所に非ず、自然偶爾として發見するものに非ず、皆是れ唯心唯識の所變なるが故に三界唯心萬法唯識と說き、及は業力所感と說く

斯くの如く劫々生々輪轉無窮なるものなることを知らずして、人間は生れた時が始めにして、死したる時が終りなりと速斷する者もあり、或は造物主があつて自由に造れるものと思ふが如きは、實に淺薄極まる愚劣の考案と云はねばならぬ

○大乘本生心地觀經報恩品に云く

有情輪廻シテ六道ニ生スルコト猶車輪ノ始終無キガ如シ、或ハ父母ト爲リ。男女ト爲リ。世々生々互ニ恩アリ、父母ヲ見ルガ如ク等シクシテ差無カルベシ。聖智ヲ證セザレバ識ルニ由ナシ、一切ノ男子ハ皆是レ父、一切ノ女人ハ智是レ母ナリ。如何ゾ未ダ前世ノ恩ヲ報セス。卻テ異念ヲ生ジテ怨嫉ヲ成センヤ。常ニ須ラク恩ニ報イテ互ニ饒益スベシ云々

是れに由て之を觀るに人間は生々人間たる能はず、畜生は生々畜生たらず、業の善惡增減に依りて六道に輪廻し四生に轉生するは宇宙自然の法則と云はねばならぬ○行基菩薩の歌に　△山鳥のほろ〳〵と啼く聲聞けば、父かとぞ思ひ母かとぞ想ふ」とは正しく此等の意味を詠まれたものと思はれる

○梵網經心地法門品四十八輕戒第二十不救存亡戒には一層深刻に此義を說かせられてある云く

若シ佛子慈心ヲ以テノ故ニ放生ノ業ヲ行ズベシ、一切ノ男子ハ是レ我ガ父。一切ノ女人ハ是レ我ガ母我レ生生ニ之レニ從ヒ生ヲ受ケズト云フコト無シ。故ニ六道ノ衆生ハ皆是レ我ガ父母ナリ、而ルヲ殺シ而ルヲ食スレハ。卽チ我ガ父母ヲ殺シ。我ガ故ノ身ヲ殺スナリ。一切ノ地水ハ是レ我ガ先身。一切ノ火風ハ是レ我ガ本體ナリ。故ニ常ニ放生ヲ行ズベシ、生生ニ生ヲ受ルハ常住ノ法ナリ云々」と

因緣の故に常に非ず、相續の故に斷に非ず」とは千古不磨の格言にして佛敎の正思量である、而して此の正思量は宇宙法爾の法則を其儘に看破したる佛知見にして、此中には六道の善惡も苦樂も含まれてある、之を生死の大河と云ひ、之を三界の火宅と云ふ、此の大河に流れをりながら左のみ苦痛とも思はず、此の火宅に居ながら左のみ怖しいとも思はず、深く五欲に著して、醉生夢死しつゝあるのが世間凡夫の常習である。

此の六道の中に於いて人身を受くることの難きことは、彼の畜類動

物界の數量多きに比して、人間界の人口甚だ僅少なるに比しても知らるゝのである、然れば此の有情界に於いて人天の樂界に受生せず四惡趣の苦界に墮して百千萬劫の苦患を受くる者は無量無數である之を敎へ之を救うて、無量永劫人天の樂處に受生せしめ、聲聞緣覺菩薩佛界の人たら令めむと云ふのが卽ち如來出世の一大事緣因である

第二十九章　佛敎以外の賢聖觀

第八十三節　天部緣覺權者

▲問ふ』如來の出現は闇夜に燈を得たるが如く、渡りに船を得たるが如く、病者の醫藥を得たるが如く、盲者の杖を得たるが如く貧者の寶を得たるが如く、擾々たる三界も爲めに佛界と變じ、茫々たる六道も爲めに淨土と成り、無始劫來の生死は轉じて涅槃と成り深廣無涯なる煩惱は變じて菩提と成り、三界を出でずして眞如の月を詠め、六道の內に於いて實相の慧日に照され、樂苦充滿の娑婆界に於いて遊戯自在の妙樂を受くる事と成つたのは全く釋尊出生の廣大慈恩なることを了解致し、且つ平平凡凡たる人界の上に四聖界の現はれしことも亦釋尊出世の所詮たることが明瞭に相成りました、然れども尙ほ佛敎に毫も關係なき聖賢の世に出て

人を敎へられしものあるは、佛敎より如何に之を詠めて宜しきものでありますか、又世には仙人の如き者もあり又は神人として尊敬すべき者もあり、或は印度、支那、日本等には神靈として祭られつゝあるは十界の中何れに配當すべきものでありませうか、又は十界以外に置くべきものでありませうか、詳細に御辯解を願ひます

◉答ふ』來問の如く釋尊以前に於いても仙人の如き五神通を得た者もあり、神靈として祭祀せられつゝある者もあり、三皇の如き、老莊孔孟の如き、カント、ヘーゲルの如き、キリスト、マホメットの如き、諸冊二神、天照太神の如き、乃至天神地祇八百萬神、山神、海神、水神、地神虛空神、火神、風神等の如き、脫俗逸凡の者がある、如來の出世と未出世とに關係無く、昔も今も斯くの如きものが此の天地間に存在せられてあるは爭ふべからざる事である、若し之を佛敎眼より詠むれば、佛敎の中に緣覺といふものがある、之を獨覺と名くる所以のものは、無佛の世に出て、無師にして獨り天地古今宇宙人物の自然に具有する眞理を發明し、自から之を行ひ、他をして覺ら令むるのである、此等の神仙が、佛の出世に値ふや、皆來りて其の敎を受け弟子となつた者も多くある、大迦葉の如きは卽ち其の一人である併し因緣熟せずして佛の弟子に成らなかつた者も多くある、佛弟子となつて敎を受けた者は、十二因緣の道理を聞いて三世兩重の因果律を悟り自から奮發して涅槃を求めたのである、然れども不幸にして佛の敎を受けざるものは、委しく流轉還滅の理を極むることが出來ぬから、涅槃無爲の境に遊ぶことが出來ぬのである彼の孔孟老莊の如きは畢竟此の緣覺人である、彼のキリスト、マホメット、カント、ヘーゲルの如きも、將た天照大神の如きも皆此の緣覺人である、或は種々の神仙も、皆此の緣覺人である、生れて人間に在れども人間たらざる所がある、此等の人々が死するや、その魂魄が神靈となつて、世人の爲めに尊崇せらるゝのである

然れども未だ全く凡域を出てざるが故に解脱自在の境界とは申されぬ、故に印度に於いても如來の教化を受けた賢人も少なからぬ、孔老顔回の如きは菩薩の化身ぢやと云へる經說もあれど、それは後人の虛構かも知れぬ、縱令眞の佛說なりとするも世人は容易に信服せぬてあらう、若し菩薩の化身ならば佛法と說を同うしなければならぬのてあるけれど、大いに其趣を異にしてをる點があるから、此れは未だ佛法に因緣なき緣覺乘の賢者なるべしと思ふ、然れども孔子は遙に佛大聖人の西乾に在しますことを感知せられてあつたことは列子の文に於いて明瞭である、或は日本の神祇も如來說法の會座に列しられたとも云ふ、又西洋に於ける賢人聖者の人々も多くは緣覺乘に接すべきものかと思ふ

印度の神明

○或は印度に於いて佛在世の時、夜叉鬼神の如きが如來の爲めに感化せられ、心地開發して永く佛法の守護神たらむことを誓ふたことが往々經文の中に記してある

支那の神明

○或は支那五岳の神が神僧に從つて佛戒を受けたと云ふ實例もあり

日本の神祇

日本に於いても、佛戒を受け心地の法樂を倍增したりとて感謝の實義を表せられたことも古來の史上に明記せられてある、例へば皇太神、住吉明神、嚴島明神、白山權現、稻荷明神、春日明神、天滿宮、八幡宮等の如き、枚擧に遑あらぬ

此等の神靈は佛法より詠めて菩薩天部と鬼趣とに屬するものなりと思ふ鬼趣の中には有威德と無威德とがあり、善鬼神と惡鬼神とがある、日本の神代に於いても善神と惡神とがあつた、けれども神明として崇敬されつゝあるものは皆善神である

○聖德太子云く

我國の神は天より此國に降り給ふ神なり、此國に生ります神ありて天地開闢以來此國に鎭座まします事幼兒と雖も皆知る所なり云々

○又云く

神明は己れなし天の君子なり云々

○又云く

我國は天尊齊元の國なり、神代すら尙人魂を祭りて神明に混ぜず人の世またこれに隨ふ、皇王臣連父祖を崇むと雖も神號を以てすること勿れ、是れに由て芳野、(藏王權現)苑狹(八幡大神)の如き己現の靈神にあらずは社祠を造り祭禮を致すこと勿れ

○又云く

神明屢々釋迦の法を修せむことを請ひ給ふ、社祠に於いて災を除き威を增すが爲めには宜しく神の請ひに隨ふべし云々

○又云く

小乘は神天を卑しめて沙彌よりも輕んず、大乘は高地と知り貴て菩薩とす、吾國は神國にて佛の本の神あり、佛の跡の神あり、小乘は吾國の理にたへず、たゞ大乘を學び專ら神明を貴べ

○又云く

佛は聖が中の聖なり何ぞ虛誕を說かむ、又神が中の神なり、造りごとをなす事なし、佛說は眞實の中の眞なり、事を說くに事の如くならざるはなし

○又云く

佛は天神の聖位を說き給へり、神は皇天に代りて下化し給ふことを託宣し給へり、然れば神もまた是れ佛道のみ云々

○又云く

佛典は西說の神道、儒文は蕃說の神道なり、大神の託宣と神代の上事とを知るべし云々

此等の見解に照して觀るも我が日本の神明中には本地が佛陀にして垂跡の神もあり、或は三賢十聖の位に在します菩薩の神もあり、或は欲界色界の天部に屬する神もあり、或は有威德の鬼神部に屬する神もあり、或は人魂の威靈あるを祭りたる神もあり、或は靈なる動物を祭りたる神もあり、或は偉人豪傑の靈を祀り籠めたる社祠もあ

りて一様の觀は爲し得られぬものと知らねばならぬ

その佛戒を受るを以て神威を增すものとし、その法會を修するを以て神明の法樂を加ふるものとして、古來の高僧大德に對し、感謝の靈徵を示されたるが如きは、その天仙神鬼の中途に介在せらるゝ神明であるからのこと、聖德太子の示されし如く「佛は是れ聖中の聖にして神中の神なり……釋佛は天も神も信伏し給ふ尊者也人間の知り測る所に下らさる德あり」云々とあるが故に初生の時より臍面もなく「天上天下唯我獨尊」と宣言せられた、又說法の會座には三界の內にある天龍八部衆までが皆敬意を表して參列せられた、例へば帝王の周圍に群卿百僚乃至億兆の臣民が圍繞するが如くである、大梵天王の如きは自から世界の統領なりと許して居りながら、釋尊の前には敬禮を表して參列したのである、故に日本支那の神々が就いて金剛の寶戒を受け、大乘の妙法を歡迎したまひしが如きは決して怪む足らぬ

斯くの如く夫れ神と云ふも佛と云ふも畢竟異名同體にして十界以外のものならず、佛位にも五十二段の階級あるが如く神位にも高下階段の差別が無くてはならぬ、佛と云ふも其心の靈覺明圓なるもの、神と云ふも其心の靈妙不可思議なるもの○住吉明神の宣託に云く

我に身體無し慈悲を以て身體とす
我に道德無し正直を以て道德とす
我に智慧無し忠孝を以て智慧とす
我に奇特無し無事を以て奇特とす
我に方便無し柔和を以て方便とす

此事たる信ぜざる人は以て佛者の虛構せしものと云ふならむかなれど、眞實なりと信ずれば決して信ぜられざるに非ず、神明の御心は眞に斯くの如きものなるかと思惟せらるゝのである

○宗門無盡燈論に曰く

神ハ心也、心垢滅盡シテ鏡ノ明了ナルガ如シ、是ヲ神ト謂フ、是

故ニ神乘ハ鏡ヲ以テ表體ト爲ス、心鏡本來清淨、常住寂然ナル是ヲ國常立尊ト謂フ、心鏡圓明物トシテ現ゼザル無シ、是ヲ天照太神ト謂フ○豐受皇太神御鎭座本紀ニ曰ク、廣大ノ慈悲ヲ發シ、自在神力ニ於イテ、種々ノ形ヲ現ジ種々ノ心行ニ隨ヒ、方便利益ノ爲ニ表スル所ヲ名ケテ大日靈貴ト曰ヒ亦ハ天照大神ト曰フ、萬物ノ本體ト爲リテ萬品ヲ度シ玉フ、當ニ知ルベシ神乘佛法同一理體ナルコトヲ

此等は無論佛者の解釋なれども其要を穿ちをるものと思はれる

○護法資治論に曰く

吉田兼好及ビ兼倶ハ神道家ニ在リト雖モ皆佛乘ニ歸ス、近年伊勢ニ龍ノ尙舍ト云フモノ有リ、能ク神道ノ學ヲ研メテ倶ニ佛法ヲ信ズ、何ソ其レ斯ノ如クナル乎、是レ他無シ元來神佛一理ニシテ亦心源淸淨ノ敎ヘ、佛最モ親切ナリトス故ニ遂ニ佛道ニ入ル耳、神ヲ垂迹ト爲シ、佛ヲ本地ト爲ス、是レ深義ノ有ル在リ、佛ハ法性眞如ノ理體寂然ナリ、神ハ和光同塵應用靈妙ナリ、猶太極ト陰陽五行トノ如シ若シ偏ニ垂迹ヲ敬シテ本地ヲ廢スル者ハ道理ニ闇キ也、昔ハ聖武帝天下ノ大社ニ敕シテ各神宮寺ヲ置キ（續日本紀ニ見ユ）神ノ爲メニ法喜禪悅無上ノ法味ヲ薦メ、無漏實相甚深ノ法義ヲ演ブ神ヲ敬スルノ至リ以テ尙フルコト無シ云々

と然るに明治の世になりては此等の深理あることを知らず、神佛混淆を忌むとて此の神宮寺を廢するに至つた、淺慮の至りと云はねばならぬ

○又曰く

西天大雄氏ノ敎本ト眞人ノ法ナリ故ニ無爲ノ眞人ト稱ス、夫レ眞人ハ言辭ノ形容ス可キニ非ズ、故ニ至人ノ位ニ於イテ其ノ上德ヲ顯ハス、是レ莊周ノ好テ至人ト稱スル所以ナリ、僧肇維摩經ヲ註スルモ亦至人ヲ假テ以テ解ヲ明ス、而モ事業ニ著ハレテ示敎利濟スルハ皆聖人分上ニ在ル而已、釋氏ヨリ之ヲ辯ゼバ、眞人ハ法身

ニ配シ、至人ハ報身ニ配シ、聖人ハ應化身ニ配ス、其說推シテ知ル可シ、其ノ震旦ニ在リテハ天皇氏ハ卽チ眞人地皇氏ハ卽チ至人人皇氏ハ卽チ聖人、而シテ羲農黃帝堯舜ハ之レニ繼グ、我ガ日域ニ在リテハ、天神七代ハ是レ眞人、地神五代ハ是レ至人、人皇神武帝ハ是レ聖人ナリ、而シテ垂仁帝、景行帝、應神帝、仁德帝、天智帝之レニ繼グ、列聖相承ケテ萬歲綿々、神化遠ク播ス夐ニ諸方ニ逾エタリ、夫レ上古ノ神聖、變化奇異、思議スベカラズ、日本書紀神代ノ卷ノ首メニ錄スル所見テ知ル可シ焉

又云ク、夫レ神道ノ敎ハ正直淸靜ヲ以テ天下ヲ化シ、萬民ヲ信ゼシム（中略）西天眞如實相ノ敎ハ其ノ心法ノ要ヲ取リ默悟シテ以テ知見ヲ開クニ足レリ矣

此等は儒士の佛乘に歸したる不染居士の所見であるが、日本の神道を解釋するや私を容れず、その讃歎すること至れり盡せりと云はねばならぬ然るに世の俗輩は日本に在りながら日本固有の神道を知らず、神明の歸服したまふ所の佛道を知らず、神佛兩道は全く天地水火の如く異なれるものなりと思ひ、神道を奉ずる者の佛法を忌み嫌ふことは異端の如く僧侶を視ることは蛇蝎の如しとも云ふ可き趣がある、然れども思へ天地日月陰陽水火は反對の如くにして反對ならず、表裏の如くにして表裏ならざることを、其相用より瞥見するときは別異なるが如くなれども、其本體より觀察するときは同一のものにして相離るべきものに非ず、離るべからざるものなるが故に、古より聖王賢臣、智人識者は俱に神佛を崇敬して治國利民の要道とせられたものである、然るを知らずして相反目するが如きは愚の甚しきものと思はねばならぬ、佛道を信ずるの人は心を大海の如くにして世界の中に在します至人聖人及び眞人を崇敬すべきである

第三十章　靈界の存否如何

第八十四節　人生と宇宙

▲問ふ』偖凡夫が見る所の天地世界國土なるものは兎角五官の範圍内に局られ、色聲香味觸の五塵五境だけは確認し得らるけれども、視官も聽官も屆かぬ靈界、即ち神明佛陀鬼神幽魂等の存在に就いては兎角有無の議論に渉り、之を確認することが出來難いのですが是れは如何なる方法に依て確信することか出來るのでありませうか

疑問の要點

一、輪廻轉生の原則に由り、人が死して其の魂魄が直に其業に引かれて轉生するものならば、顯界のみ在りて幽界なるものは無かるべしと考へらるる事

二、元來此の人間世界に身體を顯はしたることの無き神佛なるものは人間の思想界中に於ける產物として其の有無は各自の信不信に一任すべきものなれども已に一たび人界に受生せし釋尊の如き又は歷代高僧の如き、又は諸冊二神、天照太神、神武天皇八幡太神、天滿太神の如き、其の神靈は凡人に異なる所あるにもせよ、人間として見るときは飽くまで人間である、己に人間ならば死後其靈は他界に轉生して衆生を利益したまひつゝあるかも知れず、又有らねばならぬ筈、何時までも幽界に潛伏して居らるゝ筈なしと思はれます、然れば其靈が不滅にして幽界に存在せらるゝと思ひ、之を勸請し、之を尊敬し、之れに祈りをするも畢竟無益ならむと思はるる事

三、且夫れ靈と肉とは不離不卽なるもの、然るに肉體死して後獨り神靈のみ存すると云ふは道理に合はざる事

四、又神と崇め佛と尊み、社を造り像を作りて之を祭るは其人の

世に遺したる功績を記念として永く後世に傳ふるが爲と其人の名聲を永遠に追慕するが爲にして、之れに向つて祈願を爲し、利益を求むるが如きは勞して功無き事にあらざるかと思も事

◉答ふ』此れは是れ人生宇宙と及び宗教界とに於ける一大問題なりと云はねばならぬ、謂ゆる五官とは耳目鼻口形にて佛家の眼耳鼻舌身(五根)である、此の五官は各々司る所がある、之を指揮するものは内に心王といへる君主があるからのこと佛家の謂ゆる第六の意識である、されど此の心君意識、時として働きを失ふことがある、例へば正睡著の時悶絶する時、魔睡劑に掛けらるゝ時又は狂氣錯亂して全く其の作用を失ふこともある、此時は五官ありと雖も皆其の作用を失ふて了ふ、然れども死したのではない、確に活きて居る、その活きて居るのは五官及び心王意識の上に昭々靈々たる心王神識が無くてはならぬ、佛法では之を阿賴耶識(無沒不死の義)又は心王識主人公とも云ふ、五官五根等は身と共に死しても此の根本識あるが爲に

此身か出來たのである、此の根本識は決して兩親の精蟲から出來たものではない白骨は父の淫、赤肉は母の淫、赤白の二滴合して五體の身分が出來たのであるけれども、根本識ばかりは天地陰陽の和合體ではない、父母男女の混合物ではない、若し其の神識までが精蟲の混合體であると云ふならば、其身も亦半男半女のものが出來ねばならぬ筈なれど、男兒には男兒たるべきの根本的種子識があり、女兒には女兒たるべき根本的種子識があつて、各々智愚利鈍貧富貴賤美醜好惡の差別が歷々分明となり來る同じ田畑山林原野なれども、種子の異なるに依て五穀百草松柏桃李の千差萬別を生じ來るが如く人畜鳥獸魚鼈昆蟲の分々別々なる有情界の現はれ來るは、其の根本たるべき靈界に於いて其の種子識が分々別々になりて亂れぬ所のものがあるからのこと、單に物質と云へば純一なるが如くなれども其中に千差萬別あるが如く、單に神靈と云へば純一なるが如くなれども、其中に千差萬別あるものなることを知らねばならぬ、單に心と

云へば一なるが如くなれとも其の一心中より百千萬億の思想が出生し來るてはないか、卽ち十人寄れは十色、百人寄れば百色と云ふが如く、其心の異なりに從つて其境が異なり、其身が異なり、其家財物品が異なり、其事業生活が異なり、其國土の莊嚴、其社會の狀態が異つて來る、然れは物質は伴にして精神は卽ち主である、其身は其心の所造にして其心は其身の能造主である、天地國土には天地國土の大なる心があり人畜蟲魚には、人畜蟲魚の小なる心がある、愚鈍なるも其心の作用、賢智なるも其心の作用である、物を以て心を包容することは不可能なれども、心を以て物を包容するは其の本性である、是故に三界唯一心、心外無別法と我が佛陀は說かせられた、然れは則ち五官が屆いても屆かなくても、五官以外、五塵以外に廣大無邊にして五官の所到にあらざる靈界の存在するものなることを確認しなければならぬ、已に心外無法と說くからには、單に心を以て無形のものなり、靈を以て單靈なるものなりとのみ執することは出來ぬ、故に其の根本本體に溯るときは非肉非靈、非心非物、身心一如、有無一體なりと云はねばならぬ事になる、然れは之れを單に靈界と云ひ、又單に物界と云ふも俱に其當を得ざることになる故に其の存否を論するときは、唯靈界のみならず、物界も亦其の存否如何を論じなければならぬ、靈界の存否を疑ふものは、必ずや物界の現實的存在を確信するからであらうけれど、其の確信たるや、抑も誤りの甚しきものと云はねばならぬ、何となれば○四十二章經第十九章に云く

佛ノ言ハク、天地ヲ觀ズルニ非常ト念ジ、世界ヲ觀ズルニ非常ト念ズ、靈覺ヲ觀スレバ卽チ菩提ナリ是クノ如ク知識スレバ、道ヲ得ルコト疾シ矣

と、天地世界は人類五官の所到である、而も此の五官は天地陰陽五行の集合せる小天地小世界である、此の小天地小世界は五官を以て容易に觀測し得らるゝが如く、老少不定、有爲轉變、生々滅々して

存するが如く亡するが如く、念々刹那も停住するものにあらず、永く行住坐臥せむと思うて種々の珍木良材を集めて造營したる金殿玉樓も、一朝の火災に罹り、暫時にして烏有に歸するもある七十八十年の生命を見込て保險金を積みたる其身も忽爾として頓死の不幸を悲むもある、偕老同穴を契りたる意氣投合の夫妻も俄然として離別の不幸に遭遇することもあり、天晴人生の榮譽を夢想し、百千萬金を惜まずして學問藝術を手に入れたるも不時の災難に罹りて北邙一片の煙となるもある、斯くの如く天地山川も常に動搖し、時到れは風火水の爲に滅盡して空洞となる、何を以てか天壤無窮の常住不變を樂まるべきぞ、故に此の五官の境に觸るゝ色聲香味觸の物界有情非情は一として其の存在を確認することは出來ぬ

然るに其の生滅變遷に涉らぬ靈界は不生不滅、不增不減、不一不異不來不去、無始無終にして常住恒存てある、胡爲ぞ存否を論すべけむ

蓋し其の靈界たるや、物界の外に獨存するものにはあらず、物界と共に常住恒存なるとは恰も水と波との如く、空と色との如きもの、一とも云へず異とも云へぬ、麤なる部分を假りに名けて物界色界と云ひ、細なる部分を假りに名けて心界靈界と云つたのである、其性より觀るときは五官より詠めて無なるが如く、幽なるが如く、空なるが如くに思はれる、其相より觀るときは、五根より詠めて有なるが如く、顯なるが如く、色なるが如くに思はるゝのである、然れとも麤細顯幽有無色空を等觀するときは不一不異である、その不一不異なりと等觀する底のものは何物ぞ天地の廣大なるも、虛空の無限なるも都て吾人の一心に歸納したる一心を演繹して觀察するときは、麤細顯幽有無色空の人生宇宙物界靈界が昭々歷々として分明なるてはないか、その一大法界中には凡人の五官を以て窺ふことの出來ぬ神明も佛陀も鬼神も幽魂も天部も阿修羅も、餓鬼界も地獄界も淨玻璃鏡に懸けて見るが如く歷々分明である

確認せらるゝのせられぬのと云ふは、自己固有の心鏡靈鑑を昧ましたる淺智劣等者の妄想分別と云はねばならぬ

第八十五節　論廻轉生と靈界の存在

四有輪廻の狀態に關しては、明治三十一年十二月を以て公刊せし、拙著○佛教人生論中に詳論したるに依り、重説するの要なけれども輪廻の問題を解決するには、此の宇宙人生に四有の相續輪轉ありて無始無終なる○ものなることを領略しなければならぬ、謂ゆる四有とは生○本○死○中○である

四有輪廻

一、生有

○一に生有』とは母胎に托してより二百七十日間、滿九ヶ月、約十月の間にして五官五根の成就する時である、此れは人間五體の生ずる最初なるが故に生と云ひ、業力あり果報あり、五陰の色心ありて無ならざるが故に有と云ふ

二、本有

○二に本有』本とは當の義である母胎より出產して現當の五陰身心を持續し、老少不定なりと雖も人間ならば其の一生涯を總稱したものである、此の本有身に於いて苦樂もあり善惡もあり、貴賤尊卑、美醜好惡の差別もある

三、死有

○三に死有』此れは本有より中有に移らんとする一刹那の五陰とある人生の一大事と云ふは死の一事である、此死に善死があり、惡死があり、苦死があり樂死がある、又三類死、四類死、九横死と云ふやうな事もある、人死六驗法と云ふこともありて其の死相に依り、未來の生處を推知することも出來る、佛法に於いて八釜敷敎ふるのは臨終の一念である、臨終の正念なるを希望するのである

四、中有

○四に中有』此れは死有の一刹那を過ぎて、生有の　刹那に移る中間に於いて起る所の五陰である身心である、故に中有身と云ふ、身は必ず天地陰陽、男女交會の因緣に依て生ずるものゝやと思うて居るのが世間の凡夫料簡である、所が釋尊は此の天地間に四類生及び十二類生あることを説かせられた、その四類生とは胎生と卵生と濕

生と化生とである、此の四生の中に於いて父母の縁を假りるものは且く胎卵の二生にして、濕生は濕氣ある所に因縁相應の衆生が念想を起して托生するのである、化生は善惡の業力に依り、念想の起る處におのづと身相が現はるゝのである、彼の地獄天堂の如きも化生であるが、此中有は正しく化正である尤も極善極惡には中有無しと云ふこともある、何故かと云ふに其は今生の壽命盡ると同時に、其の善惡業に牽かれ、直に生天し直に墮獄するからのこと、然るに六道の中、人畜鬼修の四道は中善中惡なるが故に此の中有身が現はると云ふ、然るに此中有身は生本死、三有身の如く麁身でなく不可見輕微の細身なるが故に、凡夫の五官には滅多に觸れることがない淨天眼を得るもの、又は佛菩薩の位に昇れる人ならでは明かに見ることが出來ない、併し凡人にても偶には見ることがある、西洋に於いても、東洋に於いても、往々此の中有身に出會ふたものがある、世間に於いては之れを幽靈、亡魂、亡者、又は鬼神と云ふ、如何に

極善極惡に中有無し

幽靈、亡魂、亡者、鬼神

活きた亡者

も怖いものゝ樣に思うて居る、或は往々寫眞に現はれた事實もある成る程死して了へば一物も殘らぬと思ひ居る所へ偶々現はるゝのであるから恐しがるも無理ではなけれど、亡者が悉く恐しいに限つたことは無い、至つて柔和な亡者もある

亡者に限らず、生者の中にも頗る怖い奴が居る、亡者よりも數等怖い人間が居る、危險な人間か居る、人殺をする、放火をする、强盜竊盜、巷盜、詐僞脅迫、謀殺、陰謀密計、邪淫强姦、妄語、惡口、所有、五逆十惡を働いて暫時も油斷がならぬ、亡者に比すれば百千萬倍も怖しい、其處になると亡者は實に穩かなものである、邂逅無念で堪らぬ奴が迷ひ出る位のもの、甘く引導を渡してやれば直に靜つて了ふ、所が本有の身に於いて迷ひ居る奴は、說法を聽かせてやらう、佛書を讀ませてやらう、善道に導いてやらうと思うて粉骨碎身すれども、逃げ廻つてのみ居て一向に寄り附かぬ。幽靈ほど實に優いものはない、然るを非常に怖がるのは甚だ道理に合はぬ

斯く云へば如何にも諧謔の樣なれど死生一貫の大道理より詠むれば且く日中と夜中との如くである、闇中を其儘肉眼を以て見んとした所で、少しも見ゆるものではない、然れども燈火の光を以て照せば日中の如くにハッキリと判る、此中有身を、凡夫其儘の肉眼を以て見んとした所で決して見ゆるものではない、然れども佛智不思議の光を以て照し見れば、了々として晝の如くに解る

中有身は輕微にして不可見

此中有身は輕微にして不可見なれども、必ず眼耳鼻舌身意の六根及び末那賴耶菴摩羅の三識を具足して缺る所がない、されど已に身あるからには生滅の變化あることを免かれぬ、中有の壽命は人界の七日間に局られてあると申してある、即ち七日にして死して復生ずる

中有身の壽命

斯くの如く七死七生を經て四十九日に至れば必ず次生未來の生緣が定まり、業力の善惡と因緣の親疎に依つてチャンと生處が決定するとある、此中有四十九日間に於いて、六親九族の者が惡事を爲せば此の亡者にまで影響を及ぼすとあり、若し亡者の爲め故らに追福の

亡者追善の有効

善事を營めば、生前造りに作りし惡業に牽かれて惡趣に墮すべき者も爲めに其業が轉じて善處に生るゝとの事である、其が爲め古來より佛家の習はせとして四十九日までの修福追善を懇にするのである

四十九日迄の追善

四十九日後の追善

然らば四十九日以後の追善供養は無用に屬する譯では無いかとの疑問も隨つて起る所であるが、往々此の定規を逸して、四十九日を經過すれども、未だ生處の定まらぬ者がある、其者或は墓所に在り、或は其宅邊に在り、或は遠く百千里外に漫遊するもあり、其中有心は二年三年なるもあり、十年二十年、乃至百千萬年なるもあり、或に依草附木の精靈となつて其の歸着する處を知らぬもある此中有身は小兒の如しとある、然れども小兒の如く無智ではない、寫眞の小なるも老大の形を現はすが如く中有の眼光は天眼を得たるが如くにして百千里外の事物も、關係者の善事惡事も鏡に懸けて見るが如くに知らるゝと云ふ、故に中有を意行とも云ふ、意の欲する所に從ひ千里萬里を隔つるも一刹那の間に即ち行く電車電信電話飛行器も遠

中有の年數

中有身の形相

中有身の敏活

く及ばぬ、世に或は百千里外の他郷に於いて死したる者が、刹那の間に其の父母妻子の許に歸り來るが如きこともある例へば我等が坐ながらにして百千里外の遠方を憶念すれば、その念想が刹那須臾の間に其の欲する處に到り趣くが如きものである、故に親戚知人が其の人を追憶して供養の誠を捧げんとすれば、彼れ中有の意行身は直に其の所念を知り、感應道交して必ず其の齋筵に趣き其の供養を受くるのである、飛客も案内狀も不必要である、實に機敏なものぢや

中有身の食物

○次に又此中有身を尋香とも云ふ、彼は物の香氣を以て食物とするからの事である、彼等は業の善惡に依りて其の香食を受くるにも上中下等がある、已に香食なるが故に獻備せる靈供茶菓等の物質が滅らぬのである、古より佛者が燒香を以て亡者への供養としたるは正しく此義に依る、故に香は成る可く上香が善い、又從來檜の如き香り善き香木を亡靈に手向くることも、茶湯靈膳の香氣盛んなるものを獻備するも全く此義に依りたるものと知らねばならぬ

中有の狀態

又人間が死して再び人間に生るべき中有の靈身は飛鳥の如く傍らに横行すると云ひ、人間の死して諸天に生るべき中有の靈身は頭を上にして歩み、地獄に墮落せんとする所の中有身は、頭を倒まにして歩むとある、此の中有身は細身不可見なれども、無量の善惡業煩惱を持して彼の生有に趣くことは、大船に衆多の器財穀物を積み、纜を解き、布帆の風に任せて往くが如しとある

中有より生有に趣く狀態

此の中有身を以て靈界と爲し、精靈と爲すは少し無理なる名稱である、已に身心は一如にして性相は不二である、故に父母所生の肉血身が死滅したればとて單に靈のみの固體が獨立する譯のものではない、五根の細身を保持するが故に男子の中有は其母に對して愛念を起し、女子の中有は其父に對して戀想を起すのである、其父母交會の時に臨み、己れ自から交會すとの念想を起すと同時に托胎するのである、父母交會し、精蟲混合すと雖も、其子と成るべき中有の賴耶識が其處に現前しなければ托胎に至らずと云ふのが諸經論一定の

中有身は靈魂のみに非ず五根を具す

中有身托胎の念想

中有身は三世の連絡

中有否定論者

中有否定論者の辯駁

所說である

此中有身は過去世と現在世との連鎖と成るのみならず、現在世と未來世との聯絡船と爲るべきも卽ち此の細身にて、三世の因果、六道の輪廻相續は全く此の連絡身があるからのことで、若し之れが無ければ空理空論となる　或は誤解者云く、今生の身心は當處に生じて當處に滅するものなれども、只業力のみが滅せずして時到れば再び未來の身心を新生するのであると、然れども業力は無知無意にして善惡を保持するものではない、業は且く身口意の三業にして之を維持するものは中有の根身にして法相宗にては阿賴耶識と云ふと雖も單に識のみではない、心識の依るべき輕微四大の色身が無くてはならぬ、故に色心不二と云ふは本有の身心のみに適用すべきものではなく、生有にも死有にも、中有にも平等均一に應用しなければ、身滅心常の先尼外道が邪見に墮つるのみならず、因果の道理が許さぬことになる、然るを夫れ人生は只顯界の身心のみありて幽界の身心は無かるべしと考ふるが如きは最も淺薄皮相の妄見なりと云はねばならぬ、顯界の身に於いて壽命の長短があれば、幽界の身に於いても長短が無くてはならぬ

心の生住異滅
身の生老病死
人の行住坐臥
時の春夏秋冬
界の成住壞空

小天地の三世
大天地の三世

心の中に生住異滅の四相があれば、其身の上に於いても生老病死の四相が無くてはならぬ、人身に於いて行住坐臥の四儀があれば天地身に於いても春夏秋冬の四期が無くてはならぬ、人身に生老病死の四相がありて生死相續變遷無窮なるものなりとせば、天地身に於ても成住壞空の四相續が無くてはならぬ、人身に前後左右の四方があれば、天地身に於いても東西南北の方角が無くてはならぬ、又小天地の人身に過現未の三世があれば、大天地の宇宙身にも過現未の三際が無くてはならぬ、天地は空間にして三世は時間である、堅三世に亘り、横十方に通ずるは卽ち人生宇宙の當體現前である、其本體より觀察するときは一相平等にして靈肉不二なるべく、其現相より觀察するときは差別多相にして生死相續輪轉無窮である、之を裏

より見るも之を表より見るも共に是れ常住恒存にして存否を論ずべきものにあらざることを確信しなければならぬ

第八十六節　神佛の否存と人生

大悲の願力と靈界の存在

六凡四聖の中、善惡業の爲に引かれて已む無く生死に輪廻するは六凡の衆生、業の爲に引かれず願力を以ての故に生死に入るは四聖の境界なることを知らねばならぬ、六凡の衆生ですら、罪業深重のものは百千萬劫の間、阿鼻獄中に在りと云ひ、宿福深厚のものは有頂天上に在りて無量の壽命を保つとある、又前項に辯じたるが如く短命なる人間の中有身ですら千百年の長き間、中有の變土に潛伏しを明、出沒自在の佛陀菩薩等に於いてをや、彼の聲聞の弟子大迦葉尊者の如きは鷄足山中に入定して、釋尊滅後五十六億七千萬歲を過ぎて彌勒菩薩が世に出現せられ、龍華樹の下に於いて成道作佛せらるべき時節の到るを待ちたまふと云ふ、隨分氣長い話である

阿羅漢の壽命

○四十二章經に云く、阿羅漢ト云フハ能ク飛行變化シ、曠劫壽命住シテ天地ヲ動カス、次ヲバ阿那含ト爲ス、阿那含ト云フハ、壽終リ靈神十九天ニ上リテ阿羅漢ヲ證ス、次ヲバ斯陀含ト爲ス、斯陀含ト云フハ一タビ上リ一タビ還リテ卽チ阿羅漢ヲ得、次ヲバ須陀洹ト爲ス須陀洹ト云フハ七タビ死シ七タビ生ジテ便チ阿羅漢ヲ證ス、愛欲斷スレバ四肢ノ斷ジテ復之ヲ用ヒサルガ如シ

謂ゆる阿羅漢と云ふは人間の四肢を斷じて復た用ふべからざるが如く、愛欲を斷じて用ひざるが故に人間受生の緣を斷じて無餘涅槃に入るのである、涅槃は不生不滅である○圓覺經に云く「當ニ知ルベシ輪廻ハ愛ヲ以テ根本ト爲スコトヲ」と、羅漢の如く其の根本たる愛欲を斷ずれば輪廻せんとしてもすることが出來ぬ、その曠劫の長き壽命を保ち飛行變化することの出來るのは、三界の分段生死を出離して父母の恩愛を斷じて了ふたからのこと、成る程老子も云へるが如

く「我レニ大患アルハ此身有ルカ爲ナリ、此身無キニ及ンテハ何ノ患カ之レ有ラン」と○法華經にも、諸ノ苦ミノ因トスル所ノモノハ貪欲ヲ本ト爲ス」と、謂ゆる貪欲とは愛貪である、愛貪は分段生死の根本にして卽ち此身の種子である、その種子を斷じ切て了まへば父母男女の相待的戀愛が無くなるから、最早人間乃至天上、若くは三惡道に受生する所の緣が切れて無生に住するのである、故に阿羅漢の事を無生と云ふのである、或は殺賊とも云ふ、賊とは貪欲瞋恚愚痴等三界見思の煩惱である、それを殺して了ふたから無生である、又は應供とも云ふ、人間天上の衆生が其德を慕ひ、且つ福田の利益、除災の利益を祈らんが爲に供養し奉つれは、壯士の臂を屈伸するが如く須臾の間に其の齋筵に臨み供養を受け、且つ其願を成就せしめたまふの大力を具したまふのである。

○供養の式文に云く

夫レ一切ノ羅漢ハ皆是レ衆生ノ大福田ナリ、損益ノ報ハ來世ヲ待タズ、賞罰ノ驗ハ眼前ニ在リ、惱亂殃ヲ招キ、土ヲ雨ラシテ都城ヲ埋ムルモ、供養スレバ福ヲ得、寶ヲ雨ラシテ王宮ニ滿ツ、形像ヲ見ル者ハ永ク貧苦ヲ離レ、名字ヲ稱スル輩ハ早ク擁護ニ預ル云々

左すれは無生無滅の涅槃に入るとて煙の盡きて火の滅するが如く、火の滅して灰と爲るが如く、此の個人性が無くなつて了ふと云ふのではない、十六羅漢、五百羅漢の如く、一切の身苦を離れ、飛行自在、變化縱横の靈身となるのである、斯うなれば飛行器に乘るの必要もなく、乘つて墜死する樣な苦みもなく、前に申した中有身が行かんと欲する所へ一刹那間に行くが如く、三明六通八解脫を得て、高く三界の外に超然主義を取り、無碍自在の快樂を極むる身分となるのである、斯うなつては最早人界に餘り關係が無いのであるかと云ふに爾うでもない○羅漢應驗傳などに記する所を見れば、屢々人間に遊んで如來の正法を弘通せられ、衆生を利益せられつゝあるを

羅漢存在の例證

見る。

此羅漢果を證した人は父母所生の肉身の儘に飛行自在となるもあり或は死して後、輕微の細身を得らるゝもあり、或は山林巖窟に入定するもある、支那の天台山には羅漢僧が住しをると云ふ、黄檗義運禪師は一の羅漢僧に逢はれたとも云ふ、仰山禪師も一人の羅漢僧に逢はれたとある日本の日羅其人も羅漢である、道元禪師も支那で一人の羅漢僧に逢はれたことが實傳の中に記してあり、歸朝の後越前永平寺に於いて羅漢供養を修行せられし時、十六人の羅漢が寺中老松の上に來現せられたと申してある、鎌倉將軍頼家の時には稱念と云へる念佛僧に化して鎌倉に現はれ佛法の不思議を現はしたこともある(東鑑)鎌倉圓覺寺の開山無學祖元禪師は活きた羅漢であつたとも云ふ、此等の實例は枚擧に遑あらぬ、之を要するに多くの羅漢僧は隱顯出沒して此の世間に現住し、如來の大法を弘通し衆生を利益せらるゝも少なからぬ、されど菩薩僧に比すれば慈悲心が薄いと云ふ

永祖常在人間の願

ことである。

西天東土及び日本に於ける高僧賢者は多く菩薩の化現である○永平寺開山道元禪師、衆に示して云く

從今盡未來際永平老漢、恒常在人間、晝夜不離當山之境、雖蒙國王宣命、亦誓不出當山、其意如何、唯欲晝夜無間精進經行、積功累德故也、以此功德先度一切衆生、令見佛聞法、落在佛祖窟裡、末後永平老漢、坐佛樹下、破魔波旬、打開大事、成最上覺、欲重宣此義、以偈說曰

古佛修行多在山　春秋冬夏亦居山

永平欲慕古蹤跡　十二時中常在山

永祖の傳記を見るに其の托胎せられし時空中に聲あり告けて曰く、此兒は五百年以來、肩を齊うする者無き大聖人なるべし、今和國に正法を興隆せんが爲に生る云々と、是れに由て之を觀るに永祖の如きは悲願度生の爲め、偶々此の人間に來生せられしものにて、善惡業に牽れて輪廻せる衆生とは天地雲泥の相違がある又假りに寂を示

されしと雖も、大願力を以て晝夜恒常に人間に在りとの宣言なるが故、今も尙現在したまうて法を護し人を安んじたまひつゝあるものと云はねばならぬ。

弘法大師の常在人間

○又空海上人が其母人玉依姫の夢に告けさせらるゝやう、吾今宿世の因緣に依り此人間界に生を受け無佛の衆生を濟度せんと思ふ、今姑く汝の胎に宿らしめよ、是も亦吾と汝との宿緣深ければなり』と此の靈夢に依りて懷妊せられ、遂に人皇四十九代孝仁天皇の御宇、寶龜五年六月十五日を以て誕生せられた、果して一代の偉績は非凡の事のみ、滅後の今日と雖も、常に人間に遊び、時々不思議の事實を示したまふを見れば、依然として不可見の靈身は幽界に現在しましますことを確信しなければならぬ、再來權化の神僧偉人は都て斯くの如きものなることを信ずべきである、況して大聖釋尊の如きは、成佛以來百千萬億、阿僧祇劫の間、常に此の娑婆世界に在りて衆生を敎化しつゝありとのことは前來屢々開示せし通りのこと、法華經

釋尊の常在人間

の如來壽量品を拜讀しても明々了々てある。

日本神明の常在鎭座

又已に千百億化身の釋尊に在しますが故、種々に現身して衆生を濟度したまひつゝあることを信じて疑はぬ○又日本大小神祇の國土に鎭座在しますことは前述の如く、垂迹の神明もあれば諸天善神の來下したまふたのもある○聖德太子は儒士憲法に示したまひて云く

神在すが如しといへるは、その心爰には神在さざれども爰に在す如しといふ文句の勢なり、これは死せる者の幽暗の中にあそぶ精氣、冥境に沈む靈魂の、天に歸し黃泉に歸する神を祭るの方なりわが國の神は天より此國に降りたまふ神なり、此國に生りませし神ありて、天地開闢以來この國に鎭座ましますこと幼兒と雖も皆知る所なり、神在すが如きの義を頻りに說いて神社に及ぼさば、恐らくは諸神の鎭座を疑はむか、齊元の國に於いては此の如く講說することなかれ

此くの如く夫れ在すが如くてはない開闢以來嚴然として鎭座ましま

すのであるぞと誡め置かれたことを忘れては相成らぬ、是くの如く神明佛陀菩薩羅漢の靈界は在さざるものを在すなりと假定するのでは無く、目にこそ見えね、確に在しますに相違なしと信するのが正思量である。

第八十七節　靈界獨存の不合理

此義は第八十五節に於いて概略辯じたるを以て、最早詳說を要せざれども初心者の爲に聊か辯じて見やう

靈肉同體、身心一如、物心不二なることは佛法世法俱に論ずる所のものなれども、天地萬物を凡夫の五官範圍に入れて判斷するものぢやに依つて、地水火風の外四大(麤身麤色)のみあることを知り、堅濕暖動の(細身細色)內四大あるを知らざるが故に、外四大の分離を見て直に化生の細身に依り、神靈の維持せらるゝものなる微細の道理あることを知らぬより、身に斷滅の妄見を起し心に常住の妄見を起すのである、已に身心一如性相不二なるが故に、身の滅するときは心も俱に滅し、身の生ずるときは心も俱に生ずるのである、滅すると云つても滅盡して無物に歸するのではなく、生ずると云つても物なき種なき空より新に生ずるのではない、不生不滅の身心(本體が業に隨ひ願に隨つて、且く生滅の身心(現相)を現ずるまでの事である、故に常住を談ずる眞如門より見るときは身心萬法俱に常住不變、生滅を談ずる無常門より見るときは身心萬法俱に生滅無常である、身に

生老病死——があれば心にも亦

生住異滅——が無くてはならぬ、

身が生老病死、死して復生ずるからには心も亦生住異滅、滅して復生ずるのである、生に生じて生の始めを窮むること能はず、死に死して死の終りを窮むることの出來ぬは人生宇宙の實相である

是故に生滅卽眞如、眞如卽生滅、肉卽靈、靈卽肉、間髮を容れぬ、肉は是れ靈の現象、靈は是れ肉の本體、色卽是空、空卽是色、故に

肉卽靈靈卽肉
色卽是空空卽是色

身心一如

麤色の身心
細色の身心

個人性相續の有無

謂ふ、身を見るは心を見るなり、心を見るは身を見るなりと、又言く、心とは明かに是れ山河大地日月星辰なりと、余は卽ち言ふ、山河大地日月星辰は明かに是れ心なりと、是に於いて乎三界唯心萬法唯識の佛說は動かすべからざることを確信するのである、只目に見えず耳に聞えざるを以て神靈のみ獨存するものなりと思ふは愚の甚しきである、只夫れ十界の凡聖共に麤色の身心と細色の身心ありて其の麤身なるものを假りに肉身と名け、其の細身なるものを假りに神靈と名くるものなることを知らば、此の疑問は忽ちに氷解せられねばならぬ○而して又世人の能く迷ひ易きは個人性の有無である、人の靈魂なるものは火の如きものにて、洋燈なり蠟燭なり、薪なりに附き居るときは一個體のものあるが如くなれども、其の機械を離るゝときは散じて火大に歸す、歸したるときは、洋燈の火も、蠟燭の火も、薪の火も同體となるが如く、人の靈魂も其の如く、男女老少西洋人東洋人と分れて居るときは個々別々の樣なれども、一旦此身死しての後は一の識大に歸して、權兵衞も太郎兵衞もなく、都盧一平等と成るものなりと思惟して居る者もある、斯くの如く考へて見ると、過去世の業因も無ければ未來世の果報も無くなつて、只現世のみと云ふことになる、之れを心常相滅の妄見と云ふ、又其の識大に歸し性海に歸し、眞空に歸するを以て入涅槃とし大安樂なりとす、眞如法界無自無他であると、爾うなつて來ると、三世因果も立たぬことになり、六道輪廻も虛妄となり、四聖解脫の境界も、未來成佛の希望も、何も彼も皆滅茶〳〵となつて了ふ、此れは是れ惡平等の大邪見と云はねばならぬ、此の一切有情界に個性的の一物があればこそ六凡四聖が歷然として錯亂せぬのである、元來個性的の魂魄が個個別別なればこそ、善に善報あり、惡に惡報があつて、夫々善人惡人、智人鈍者、美人醜人、富者貧者の差別が歷然とし亂れぬのである

個性不滅論

若し個性が滅するなれば自業自得の原則は立たぬことになる、若し

個性が滅するなれば何の爲に善を作し、何の爲に德を積むのであらうか、人々〳〵個々の不生不滅なることを確信し來世又來世と生々滅々して個性の不失なることを確認すればこそ、惡事を愼み善事を勤めて、今世安穩後生善處の果報を樂み祈るのである彼の無神無靈なる洋燈や蠟燭の火と、三才の中に於いて最も靈なる人類と同視すべきものではない、人類は決して機關人形の無意識無靈魂なるが如き粗末のものではない、天地の靈物にして宇宙の主宰である、三世の諸佛十方の賢聖は靈物中の靈物、主宰中の主宰である、分けても大聖釋尊の如きは三大阿僧祇劫の修行を爲し、成佛得道以來亦百千萬億那由他阿僧祇劫の間、常在娑婆界にて一切衆生を導利したまひ、此の五濁惡世に於ける剛强難化の衆生をも見捨てたまはずして出現度生せられつゝあるのである○大寶積經に云く「假使百千劫所作業不亡、因緣會遇時、果報還自受」と是れ個性不失の佛訓である、○潙山大圓禪師云く「懇ニ齋戒ヲ修シテ謾リニ虧踰スルコト莫レ、世世生生殊妙

天地の靈物

潙山禪師の信仰

ノ因果アリ、等閑ニ日ヲ過シ時ヲ度ルベカラス」と○又云く「願クハ百劫千生、處處同ク法侶ト爲ラン」と此れは是れ大圓禪師の信仰である○永平祖師典座に對する調食大因緣の勸奬文に云く「今生既ニ之ヲ作ス悅ブベキノ生ナリ悅ブベキノ身ナリ、曠大劫ノ良緣ナリ、朽ツベカラサルノ功德ナリ、願クハ萬生千生ヲ以テ一日一時ニ攝シ之ヲ辨スベク之ヲ作スベシ、能ク千萬生ノ身ヲシテ良緣ヲ結バンガ爲ナリ」と又○眼藏行持奬勵の文に云く「百千萬劫同生同死ノナカニ行持アル一日ハ髻中ノ明珠ナリ、コノ一日ヲ曠劫多生ニモスクレタリトスルナリ」と○羅什法師戒經の序に云く「一タビ人身ヲ失ヘハ萬劫ニモ復ラス」と○中峯禪師云く「受ケ難キ人身、今已ニ受ケ値ヒ難キ佛法今已ニ値フ、此身今生ニ向ツテ度セスンバ更ニ何レノ生ニ向ツテカ此身ヲ度セン」と云々〳〵

永平祖師の信仰

中峯禪師の信仰

此等は皆個人相續個性不失の信念より割出したる金言金句である

此の生死を解脫し、此の愛根を斷滅し、此の穢土を厭離し、此の三

界を出離して眞空に歸し、性海に入り、涅槃の無爲に歸すると說けばとて、此の個人が無くなり、此の個性が滅して宇宙の大靈に歸入し、天地公共の一元に歸還し、絶對眞如に同化し、唯一の眞神、根本の神靈に還入して個人個性が滅失するのではない、或は其の樣に誤解して居る者も多かるべきなれども、因緣因果を敎義の原則として敎ふる佛敎の中には三文の價値も無き迷想妄見である

○永平祖師云く「生死ハスナハチ涅槃ナリト覺了スベシ、イマタ生死ノホカニ涅槃ヲ談スルコトナシ、況ヤ心ハ身ヲハナレテ常住ナリト領解スルヲモテ、生死ヲ離レタル佛智ニ妄計ストイフトモ、コノ領解知覺ノ心ハ、スナハチ尙生滅シテマタク常住ナラズ、是レハカナキニアラズヤ、嘗觀スベシ、身心一如ノムネハ佛法ノ常ノ談スル所ナリ、シカアルニ何ゾ此身ノ生滅セントキ心ヒトリ身ヲ離レテ生滅セザラン、モシ一如ナル時アリ一如ナラヌ時アラバ、佛說オノヅカラ虛妄ニアリヌベシ、又生死ハ除クベキ法ゾト想ヘルハ佛法ヲ厭フ

罪トナル愼マサランヤ云々」

人は未來の希望があればこそ今生の苦ヲ忘れるのである○經に云く『過去の因を知らむと欲せば現在の果を見よ、未來の果を知らむと欲せば現在の因を見よ』と是れ實に千古不磨の格言にして凡夫安心の秘訣である人は前途に於いて賃銀を得るの希望を有するが故に粉骨碎身の苦勞を厭はぬのである、人は後日の成功を期するが爲に今日の困苦を忘るゝのである、愚人の過去を信ずること能はざるは、人の我が背後を見ること能はざるが如く、愚人の未來を信ずること能はざるは、盲者の面前を見ること能はざるが如く、愚人の佛說を信ずること能はざるは、聾者の音聲を聞くこと能はざるが如く、愚人の現在世に於ける善惡因果の理を辨ふること能はざるは小兒の毒藥淨穢を知らずして自から其身を害するが如きものである、愚人の地獄天堂あることを信ずる能はざるは癡者の舌ありて物言ふこと能はざるが如く、愚人の靈界あり、幽界あり、未來あり後生あることを信

ずる能はざるは、無智文盲の者の眼あり口ありて文字を讀み、言語を發すること能はざるが如きものにて實に憐愍すべきである、世間に於いては名士である、學者であると持囃さるゝ智人めきた人の中にも往々斯くの如きの世智辨聰明盲目のあることを知らねばならぬ

第八十八節　神佛祈願効驗の有無

此義を解決するに就いては凡そ五種の理由を以てしなければならぬ

一、記念不忘

○一には記念不忘の爲め――人類社會の爲め、國家の爲め、靈界の爲め偉大なる功績を遺したる偉人豪傑の一大事業は單に其の時代を利するのみに非ずして永く將來の世を益せんとする廣大の希望、無邊の悲願なるに依り、其の尊敬すべき意志は自から記憶して忘れざるのみならず、永く將來の人にも之を傳へんとするの至誠赤心の發露して其の神社と爲り其の尊像と成つたもので此點より論ずるときは敢て祈願効驗の有無を穿鑿する餘地を存せぬ、

二、報恩謝德

○二には報恩謝德の爲め――前項と略相似たるが如くなれども、前項は人類一般の至情に訴へ、廣義に解釋せしもの、此れは其の弟子信徒として、慈恩に報い洪德を謝するの精神に出でたるものにて其の社を造り像を作るは、之れに尊敬を表し、之れを供養し、之れに報謝し、之れを記念して忘れざらんとするの誠意を表する對象と爲したるものにして、之れに祈願して何物をか求めんとするが爲てはない、本邦に於ける天神七代の如きは、其名のみありて其人ありしを認識すること能はざるが爲め、像を造り社を作ることは不可能であらうけれど、地神五代已降は其人ありしに依り、其像を造り社祠を作るのである、耶蘇教者は偶像教なりと謗れども、彼れは元來、偶像を造る母れとの誡めがあるからぢや、造らうにも造ることが出來ない、本邦と雖も若し地神五代八百萬神を廢して造化の三神だけにすれば、其像を造らうとしても作ることが出來ぬ、天理教や金光教が神像を造ることの出來ぬは耶蘇教と同じことである、彼等が其社

奈良の大佛は釋尊

を造るのは間違つてをる佛敎に於いても、威音王佛や、空王佛の像を造ることは出來ぬけれど、釋迦佛及び釋迦佛の化身化佛を造ることは出來る、本當なれば釋迦佛以外の佛像を畫いたり、造つたりすることは出來ない筈のものである何故なれば、此世に歷史が無いのであるから、造らうとしても作ることは出來ない筈のものである

奈良の大佛、是れは盧舍那佛といふから、釋尊以外に其んな佛があるかと思うてをる、所が其實は釋尊である、釋尊の外に其んな佛があるものではない、それても盧舍那は報身、釋迦佛は應身では無いかと云ふ人もあらうが、それは只名に執着して實を知らぬからである、此義は上に詳しく辯じたから今は略す、釋尊の像を造り奉りて之れを本尊とするのは永く其人を追慕して恩德を報謝せんが爲である、其の降誕會、成道會、涅槃會を營むが如きは祈願請求の爲ではなく報恩謝德の外ならぬ、或は禮拜し、或は稱名し、或は供養するものも皆弟子信徒として其眞心を捧ぐるばかりである、彼の伊勢太廟に詣するもの、桃山御陵に參するものと同一の觀念に外ならぬ、又其の子孫が父母祖先の靈を祭るに佛舍を營み、位牌石塔を造ると同じてある

三、功德善根

○三には功德善根の爲め——神道に於いては其說を聞くことを得ざれども、佛道に於いては造像功德經の如きものもあり、又諸經論の中に造佛も亦是れ菩提の行願、成佛の勝因なることを說かせられたるが故競うて之れを造るのである、造りさへすれば殊妙の果報があると思ふのみ

四、祈願請求

○四には祈願請求の爲め——或願望を達せんが爲に神躰佛像を建立することもあり、願望成就の爲に寺像を建立せしこともあり、一例を擧げて見ると昔し人王五十代桓武天皇の延曆年中、奥州に高丸といへる逆賊があつた、天皇より坂の將軍田村麿に征夷大將軍の勅命が下つた、然るに高丸は却々の豪雄であるから之れを征伐するのは容易ならぬ、時に京都清水寺延鎭法師と親しき友なりし故將軍延鎭に

勝軍地藏勝敵毘沙門

語つて曰く、我れ今皇詔を承はり東夷の賊徒を征することは偏に法力の加護を蒙らずんばあるべからす、若し然らずんば敕命を辱めん依て偏に貴僧の祈誓を頼み申すなりと告げられしかば、延鎭如何にも承知、心得申したりと諾された時に高丸は已に駿州まで攻勢を取り清見が關に居たりしが、田村將軍の出馬を聞いて直ちに後戻りを爲し奥州を堅むる事と爲したりしが、尋いて官軍は奥州に向ひ夷賊と頻りに合戰しけるに、官軍の方には已に矢種も盡きて、今は已に失敗を取らんとするの折柄、不思議なるは小き僧侶と小き男子がチラホラと見えて戰場に落ちたる弓矢をば拾ひ集めて將軍の許に持ち來りて渡しける、將軍は頻りに奇怪の思ひを爲しつゝも其れが爲め遂に高丸を神樂岡に射斃し其首を以て帝城に凱旋せられた、時に將軍は急いで延鎭の許に趨り曰く嗚呼頼母敷かな貴僧の祈念力に依り勅命を全うし、逆賊を誅戮せし也さてこそ師の修せられし法要は如何なるものにてありしや、承はりたくこそ侍れと申されければ、延鎭の曰く、我法の中に於いては將軍地藏勝敵毘沙門の行あり、故に我れ特に此の二像を造り恭しく供養を設けその法を修したるなりと申されければ、將軍これを聞いて卽ち彼れ戰場に二人の矢を拾ひ來りし事を物語りせられた、ハテな夫れは不思議なり兎に角其像を拜せんとて、頓て殿中に入り、法師と將軍と共にその像を見たりける に、さては矢の痕、刀の疵夥しく其體に被りたまへり、加之泥土も多く其の脚に塗れられたれば將軍大いに驚きて、其事の樣子を具さに天皇へ奏上せられたるに、帝も之れを聞し召されて深く信敬を加へたまひしことが○元享釋書に記されてある、奇怪といへば奇怪なり、不思議といへば不思議である、世の破佛家は曰く、頑迷不靈の偶像に、爭て然ることのある可き筈なしと、一も二もなく葬り去るのてあるけれども信ある所には必ず其靈が宿るのである、强ちに否定することは出來ぬ、されは何時ても其像が活きて働くかと云ふに爾うとも限らぬ、燒かば灰ともなり、埋めば土ともなるてあらうけ

れど、爾う思うて邪見を起さば必ず其の驗はあるものと知らねばならぬ

○工匠の感世といふは佛像を造る所の佛師であつた、閑暇あれば法華を讀みつゝありしが、殊に觀音を信じ普門品三十三返を誦じ以て之れを日課として居たのである、時に丹波の桑田郡に宇治宮成といふ者があり、感世に命じて觀音の像を彫刻せしめた、其像已に成就しければ宮成も大いに喜び厚く謝して其價を償ふた、感世は其の金錢を懷中して京都に向け歸途に就いた、時に宮成が思ひけるやう、我れ感世に與へし彫刻料は餘りに多過ぎた、後より之を追ひ途中にて彼れを殺し其金を奪ひ取らんには如かじ、他人も亦之れを知るべき筈なしと決意し、大江山にて追ひつけ直ちに感世を斬殺して其金を奪ひ歸り、先づは宜かつたと仕濟まして居たが、稍ありて後宮成は何心なく新作の觀音像を拜しけるに、這は如何に其像の肩の上が切割かれたまひ、其瘡より鮮血が流れ出て、地に落ちて凝りをる、

さて此れは不思議なこと、我れはそも感世をこそ斬殺したれと思ひけるに、此像何とて斯かる事のありけるぞと急に怖れを懷き、竊に使者を京都に遣はし、感世の樣子を見せしめたるに、彼れは恙なくさあらぬ體にて居たりける、使者立却りて其事を申しければ、宮成大いに驚嘆し、急ぎ佛師の家に詣り、彼の奪ひし金を返却し、備さに其の所以を語り謝しけるに、感世は卽ち曰く、我れ大江山に於いて直ちに强賊に逢ひ、金を掠められしゆ之潛に逃げ遁れて家に歸りたりしが、今君の語る所を聞くからには、是れ果して觀音大士が我れに代りて刑戮を受けたまひしに相違なしと二人は互に感嘆の餘り無二の親友になつたといふ、これも○元亨釋書に記されてある有名な話、人王六十二代村上天皇應和二年の事にて其像今は穴穗寺に納められてあるといふ

此事ありしを以て彼像に必ず生血がありとは斷ぜられず、又木像の中に一滴の血たりとも有るべき筈なし、設ひ其像に靈が宿りをるも

のとするも、靈は肉にあらず、鮮血の出づる筈なし、只々不思議の現象なりと云ふより爲方がない、此れは觀音大士が彼等の邪見を誡めんが爲め、鮮血にあらざるも、鮮血の如く、木像が大江山まで行きしにあらざるも行きし如く袈裟切となりて見せしめられしもの、卽ち其處が薩埵の妙智力と云ふより爲方がない、佛菩薩の靈驗記を繙かんか斯かる例證は數ふるに遑がない、到底六識分際の理窟を以て考へらるべきものにはあらず

○彼の四天王寺の如きは、聖德太子守屋と合戰の時、白膠木を以て四天王の像を造り、之を髮中に納め大誓を發して云く、若し官軍勝を奏すれば報謝の爲め四天王寺を建立すべしと、果して官軍勝利を得たるに依り宏壯なる四天王寺を建立せられたといふこと是亦○元亨釋書に記す所、祈願は決して靈驗なしと云ふべからず請求の心至誠なれは必ず感應の空しからざるものなることを疑はぬ、古歌に云く○後の世の祈り求むる其事の効驗なきこそしるゝなりけれ『その祈

大阪四天王寺

五、信順歸向

る心に誠が籠れば必ず感應はあるもの、感應の無きは祈る心に誠が欠けてをるからの事である

○華嚴經に云く、菩薩淸凉の月畢竟空に遊ぶ、衆生心水淨ければ、菩提の影、中に現ず」と、心水が淸淨になれば必ず佛神の月が其の心中に現じて靈驗の顯著なるは必然の事」である、人間同志ですら至心を籠めて懇願すれば必ず願望は成就する、況して靈界に至誠が通じて感應の虛しかるべき筈があらうぞ

◉五には信順歸向の爲め――天皇の眞影を奉揭する、是れは請求の爲ならず、盡忠歸順に至誠を表するが爲め、天照太神の聖像を奉祀するもの必ずしも祈願の爲ではない、國祖として尊敬を表するが爲めに是れは國民たる者の信順歸向である

○佛弟子佛信徒として佛菩薩羅漢乃至護法善神の像を奉安するもの必ずしも祈願請求の爲ではなく、其の人格を渴仰し、其の敎訓を信受し、其の擁護に縋り、以て其の行持を成就するが爲に信順歸向の

至誠を表する大禮とするのである

以上五種の理由に依りて神社佛閣神體佛像を奉安するものなるに依り、外教者及び物質論者の淺薄極まる智慮を以ては迚も其の深意を測ることが出來ぬ、殊に佛教に於いての木佛畫像は住持三寶の一として、生身の佛如來と同樣に崇め奉るので益無益を論ずるが如きものではない之を要するに神佛の靈驗なるものは、感應道交の理趣より現前するものにて、單純に極端に有りとも無しとも云ふことは出來ぬ、鐘が鳴るかや撞木が鳴るか鐘と撞木の間が鳴る」さて又「右が鳴るかや左が鳴るか右と左の間が鳴る」鐘を撞いて音響を發するも手を拍して其の音響を發するも皆同一の理由にて之を撞かんとし、之を拍たんと發起するものは何物ぞ自心に反省して見れば明々了々たるべきである、凡そ天地宇宙の間何物か自心の變幻ならざるものやある善相惡相暗相明相一一是れ自心現なることを知らば此等の問題は立所に解決せられなくてはならぬ

第三十一章　未來後生の希望

▲問ふ　上來重々の質問に對し一々明瞭に應答を垂れられ、信仰の對象とすべき本尊佛も定まり、信仰の歸趣たる成佛の階梯、即ち信成就發心の位置も、別教の初地にして圓教の初住に當ることを確め、發心滿位、行果滿位、人成佛法成佛の理由、乃至淨土の所在如來出現の効果、及び靈界物界の關係に至るまで問答往復至れり盡せりと申すべきであらうと存じます、且夫四有輪廻の要領もお說き下されたので後生の安心も略決定致しましたが、併し尙世人の最も迷ひを生じ易きは未來後生の有無と地獄極樂の存否といへる問題、此事も已に反復叮嚀に承はりましたので、私には敢て疑ひもありませぬけれど、尙世人の爲に一言せられ以て本論の終結とせられんことを希望に堪へませぬ。

◉答ふ　未來後生の有無てあるの、地獄極樂の存否てあるのと云ふ

ことは、未だ佛敎を見聞せさる者に在りての問題に過ぎずして、已に佛敎を見聞したる者に在りては問題は疾くに通り越してをる、然れども其の見聞にも程度のあることゆゑ一列には論じられぬかも知れぬ、程度の下き人の詠めた佛敎を、程度の高き人より詠めるときは隨分誤謬妄見も少なからぬ、況して從來佛敎の素養なき人が本論を讀了するも尙ほ靴を隔てゝ癢き所を搔かんとするの感があるかも知れぬ、又舊見に當て箝めて本篇を詠むるの人は奇異の感に打たるゝこともあらうと思ふ。

されど余は寡聞少見にして一大佛敎を誤解せし點なしとせず、言々句々佛意に適中し、眞理を看破したるや否やは自證するの限りにあらざれど、廣覽博涉必ずしも正見明解とは斷ぜられぬ、一華開いて天下の春を知り、一滴以て大海の味を識るに足るべければ、限りある時間を以て限り無き千萬卷の書籍を讀破すること不可能なりと思ふ、只擇法眼を具して法門の要領と深奥の秘訣とを領略すれば足りなんと思ふ。

第八十九節　因果撥無と斷見

○所謂未來の有無――斷見の病眼より觀察するときは、何の樣に考へて見ても未來が見えず過去が見えぬ、人間は但今生の一世のみと考へてゐる、此の斷見より割出して見ると、前世の物語や、再生の實話を聞くも只不思議である、奇怪である、理外の理にして到底信することは出來ぬと斷念し、更に一歩を進めて研究して見やう、糺して見やうと云ふ氣持にはならぬ、又地獄極樂の說を聞いても、其は只方便である、假設である、架空の妄誕であると極込て一笑に附し去るまでのこと、若し有りとすれば此世にこそあれ、未來に有るべき筈はなしと、井蛙の大海を知り夏虫の氷雪を識らぬと毫も異なる所はない、誠に淺陋ものである。

過去の因を信ぜざるが故に今生の果報に千差萬別あることを知らぬ

惡平等の妄見

否千差萬別あるは自然偶然の安排布置にて、善生に於ける業因の然らしむ所なるを信ぜず、人間は元來平等なるべきが天賦の公道である、自然の眞理である、然るに階級を設けて人類を高下し、君主を立てゝ人民を專制するは天理に背き公道に反くに依り、其んな差別を打破して財產を平均にするが宜いと云ふ樣な、無政府黨や、虛無黨、但しは社會主義者を出す樣にもなる、之を惡平等の妄見と云ふ天地も本來差別のものである、人類も本來階級のものである、此の差別階級を打破せんとするは牛角を矯めんとし馬角を添へんとするが如きの愚論妄見である、此の自然偶爾は天の配劑なりとして善生の業因より現はれ來る結果なることを信ずることが出來ぬのである印度に於いても支那日本に於いても將た歐米各國に於いても此種の外道が充滿して此の人界を惑亂しつゝある、今日の普通學をのみ修めたるものは九分九厘まで此の斷見に墮在してゐる、歐米の物質論者、哲學論者等も多くは此の妄見に墮してをる、佛者の中、殊に古

禪者の斷見

則公案のみに頭を突込てをる禪者の中にも此の斷見に墮落して因果を撥無する族がある、世智辨聰の者、此の禪者に向つて云く地獄極樂は眼前にのみ有りて未來の世に有るものては無いと思ひますが何うて御座いますかと、禪者云く如是々々汝が言ふ所の如し、殺人毒殺、謀殺故殺暗殺、乃至自殺他殺、監獄無期有期禁錮懲役の如きは正しく地獄にて、富貴福樂、高位高官に在りて如意圓滿なるは正しく此世の極樂である、此外身死して後に地獄極樂が有りと云ふは本來無きものなれど方便を以ての故に有りと說くのみなりと云へは、彼等俗輩云く、然り々々果して然り、死後に有るべき筈なし、神が有り佛が有ると云ふも、只其名のみありて實義は無きもの、人は只五倫五常を守り、人倫に背きさへしなければ事足れりと。成る程五倫五常を正直に守つてさへ居れば天下の法律に觸れる樣なこともあるまいけれど、神佛も無い、因果も無い、過去世も無い、未來世も無い、地獄も無い極樂も無いと云ふ族は只眼前の五欲六塵

に包まれて人生宇宙の眞理公道を昧ましてをる凡夫迷妄の甚しきもの、無事の時には差したることも無けれど、一朝にして貪瞋痴の三毒煩惱が勃發するや、不倶戴天の大逆罪を釀すに至る、小智ある者は徒黨を組んで陰謀を企て無智の者は單獨にして大惡事を働く、天下の監獄は此等の爲に設けられ、天下の警察裁判は此等の爲に必要を生じて來るのである、此の無法もの危險人物は皆此の斷見より起り來るのであるから、此の病眼を療治するにあらざれば到底三世因果の道理に照して未來後生の在在を信せしむることは出來ぬ、已に今生一世のみと思ふに依り過去世より相續し來れる魂魄が有りとも思はず、未來に相續すべき不滅の一物體が有りとも思はぬに依り、燒かば灰となり埋まば土となるのみ、氣は散じて五行に歸し心は滅して跡形も無きものと思ふ、故を以て自己を慎まざるのみならず祖先亡者の祭祀をも忘り、神佛賢聖の崇むべきをも崇めず、愚癡慳貪一途に固まつて淺陋一生を夢の如く幻の如くに打過すまでの事であ

る、濟度すと云ふは此等の斷見を打破して三世常住因果歴然たることを悟らしむるのである、已に善惡因果の味ますべからざることを悟れば其心が柔輭になりて、夢の覺めたるが如く、從前の非なりしこと知り、惡事を慎み善事を勤むるに至るは必然である謂ゆる十惡行を止めて十善行を勤め六弊を止めて六德を進め、四恩を報じ三有を資くるに至る、又

第九十節　因果撥無の常見

○所謂未來の有無――世に又常見の者がをる、斷見に比すれば尚ほ迷妄が輕いけれども因果の道理を昧ますの點に至りては依然病眼たるを免かれぬ、斷見は、極端なる無の見なるがゆゑ、過去未來を否定するのであるが、常見は、極端なる有の見なるがゆゑ、過去もあり、未來もあることを容認すれども如何せん變化の法則なることを知らぬ、此の生滅界中に居りながら、起滅變遷の道理を知らざるは

矢張因果撥無の妄見である、前にも屢々論じた通り此身此心は生滅無常的のものにして刹那秒時も停まらざるものなるに、尙ほ五十年百年の長壽を夢想し、只眼前の肉欲にのみ心醉して後の營みに心を寄せず宗教上の事などは老後の事のみ、靑壯の間には必要なきものなりとて、假初にも神佛を拜まず、祖先を祭らず、說敎を聽かず、宗敎上の書籍を繙かず、只營々として形而下の事にのみ奔走して來世の事には心を寄せず、終日終夜、只目前の名利にのみ齷齪して知らず識らず貴重の光陰を送りつゝある、夫れも至極順當の時は可なれども、或は父母妻子に死別れ、或は不時の天災地殃に罹り、或は火事火難、竊盜殺人等あらゆる逆境に遭遇することもあらば、何故斯くなる一大不幸不運に襲擊せられたてあらうか、平素何とて惡事を作さざるに何故斯かる逆境に接したのであらうか、平素神佛に祈願も致してをる、人に迷惑を掛けたことも無いのに何故此の惡魔に襲はれ此の惡病に惱まさるゝのであらうが、神も佛も、因果も報も

あつたものではないと愚癡非難の淵に沈むもあり、又思はざるに無常の殺鬼、閻魔の使ひに迎へらるゝや、其筈では無かつたのぢやがと今更の如くに打ち驚くが如きも、皆此れ常見の執著病に罹つてをるからの事である。

若し夫れ善因には善果あり、惡因には惡果の報い來るものにて、何事も皆因果無常の時節到來、免かるべからざる自業自得果であると諦むるときは驚くべきでもない、又常に其の用意を爲して、老少は不定なるが故に若いとて油斷はならぬ、宗敎の事にも心掛けねばならぬ、神佛をも信仰しなくてはならぬ、未來の安心も確定し置かねばならぬと云ふ所に氣が附かねばならぬ。

○又或る常見の者は思ふ、三世は必ず有るものなれども、人が畜生と成り、畜生が人と成り、人が餓鬼界に墮ち、餓鬼界から人間界に又は天上界に生れ替り、人間界から地獄に、地獄界から人間界に生れ替ると云ふ樣なことは有り得べからさる事である、人間は必ず人

間に生れ、畜生は必ず畜生に生れ替るもの、見よ猫は必ず猫の兒を産み、犬は必ず犬の兒を生み、牛馬羊豚、鳥獸魚鼈夫々皆其兒を産みつつある、未だ曾て猫が犬の兒を産み、牛が馬の兒を産んだ試しがない、男子は生々男子に、女子は世々女子に生れるもの、變成男子などの事は嘘の皮である云々。

此等は未だ唯心の所變なるを知らず心の中に三毒煩惱あり、此の煩惱心の厚薄輕重に依りて三界となり六道となるの原理を知らざるが故に、只物界の外相を詠めて速了した麁相の妄見と云はねばならぬ若し内界に於ける眞妄和合の心理が開發して四生六道十二類生の變化を爲すものなる事が解れば、その常見は忽ちに碎けて了はねばならぬ。

○愚なる心ひとつの行末を
六の道とや人のふむらん

愚痴無明の一念より開發して六道輪廻の行相を現はし來るのてある

からその一念を誤まらぬ様にしなければならぬ、古人云く（大藏一覽）

若人靜坐一須臾　勝造河沙七寶塔
寶塔畢竟化爲塵　一念淨心成正覺

又宋の○高僧傳無著の章を見るに文殊菩薩翁と化して偈を作るに云く

一念淨心是菩提　勝造恒河七寶塔
寶塔盡碎化爲塵　一念淨心成正覺

此の一念は眞如淨法の一念なるが故展轉進精して退かざれば、凡心を飜轉して聖域に入り、究竟行滿して佛果に到ることも出來得るのてある。

第九十一節　斷常兼帶の邪見

○又世の中には斷常兼帶の病眼者がある、卽ち一斷一常の妄見てある、此れは身に斷見を起して心に常見を起すのてある、之れを身滅